

IBM® DB2® Universal Database™



インストールおよび構成 補足

バージョン 8.2

IBM® DB2® Universal Database™



インストールおよび構成 補足

バージョン 8.2

ご注意!

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、**特記事項**に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GC09-4837-01
IBM® DB2® Universal Database™
Installation and Configuration Supplement
Version 8.2

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1993-2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

第 1 部 DB2 サーバーの手動インストールおよび構成 1

第 1 章 DB2 サーバーの手動インストール 3

DB2 製品の手動インストール	3
db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール (UNIX)	4
SMIT を使用して DB2 製品をインストールする (AIX)	6
rpm を使用して DB2 製品をインストールする (Linux)	7
swinstall を使用して DB2 製品をインストールする (HP-UX)	8
pkgadd を使用して DB2 製品をインストールする (Solaris オペレーティング環境)	10

第 2 章 手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ 11

クライアント・サーバー通信のシナリオ	11
手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ	11
DB2 UDB インストールのためのグループおよびユーザー ID の作成 (UNIX)	12
DB2 Administration Server (DAS) の作成	14
db2icrt によるインスタンスの作成	15
DB2 ファイルのためのリンクの作成	16

第 3 章 クライアントとサーバーとの間の通信の構成 19

コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成	19
TCP/IP の構成	20
CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成	20
クライアント・サーバー接続の構成のための TCP/IP パラメーター値ワークシート	21
クライアント・サーバー接続の構成のためにサーバー・ホスト・アドレスを解決する	22
クライアント上のサービス・ファイルの更新	23
DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ	24
CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ	25
データベースのカタログ用のパラメーター値ワークシート	27
NetBIOS の構成	28
CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成	28
NetBIOS 接続に関するクライアントの論理アダプター番号の判別 (Windows)	29
NetBIOS パラメーター値ワークシート	29

DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ	30
NetBIOS 接続のためのデータベース・マネージャー構成ファイルの更新	31
名前付きパイプの構成	32
CLP によるクライアントでの名前付きパイプの構成	32
クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ用パラメーター値ワークシート	32
クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ	33
CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト	34

第 4 章 DB2 サーバー通信の構成 37

コントロール・センターを使用した DB2 サーバー通信の構成	37
リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成	37
ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成	39
コントロール・センターを使用した DB2 サーバー通信の構成	40
コマンド行プロセッサを使用した DB2 サーバー通信の構成	41
DB2 インスタンスの通信プロトコルの設定	41
DB2 サーバー通信の構成 (TCP/IP)	42
DB2 インスタンスの TCP/IP 通信の構成	42
TCP/IP 通信のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新	43
TCP/IP 通信のためのサーバー上のサービス・ファイルの更新	44
DB2 サーバー通信の構成 (NetBIOS)	45
DB2 インスタンスの NetBIOS 通信の構成	45
DB2 サーバーでの通信セットアップのための NetBIOS インターフェースの構成	46
DB2 インスタンス起動時に起動するように NetBIOS を構成する (Windows NT)	47
NetBIOS のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新	48
DB2 サーバー通信の構成 (名前付きパイプ)	49
DB2 インスタンスの名前付きパイプ通信の構成	49

第 2 部 応答ファイルによるインストール 51

第 5 章 応答ファイル 53

応答ファイルによるインストールの基礎	53
応答ファイルに関する考慮事項	54
DB2 セットアップ・ウィザードによる応答ファイルの作成	54

第 6 章 応答ファイル・インストール (Windows) 61

DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows) 61
応答ファイル・インストールのために DB2 ファイルを使用可能にする(Windows) 62
ディレクトリー共用アクセスのセットアップ (Windows) 62
応答ファイルの作成および編集 (Windows) 63
応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows) 64
応答ファイル生成プログラム (Windows) 66
 応答ファイル生成プログラムについて (Windows) 66

第 7 章 応答ファイル・インストール (UNIX) 69

DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX) 69
サンプル応答ファイルによる応答ファイルの作成 (UNIX) 70
応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX) 71

第 8 章 応答ファイルの参照トピック . . . 73

使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX) 73
応答ファイルのキーワード (Windows および UNIX) 74
DB2 コントロール・サーバーの応答ファイルのキーワード (Windows) 78
応答ファイル・インストール・エラー・コード (Windows) 80
応答ファイル・インストール・エラー・コード (UNIX) 81
プロファイルのエクスポートとインポート 82
バッチ・ファイルによる応答ファイル・インストール (Windows) 82
対話式インストールの途中で DB2 プロセスを停止する (Windows) 83
応答ファイル・インストールの途中で DB2 プロセスを停止する (Windows) 83

第 3 部 Microsoft Systems Management Server (SMS) による分散インストール. 85

第 9 章 Microsoft Systems Management Server (SMS) による分散インストール 87

Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 製品のインストール 87
DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートする 88
SMS サーバーでの SMS パッケージの作成 88
ネットワークによる DB2 インストール・パッケージの配布 89

Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 バージョン 8 の配布 91
サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成 93
応答ファイル・インストールのための db2cli.ini の構成 95

第 4 部 DB2 Web アプリケーション 97

第 10 章 DB2 用のアプリケーション・サーバー 99

DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする 99
| DB2 用のアプリケーション・サーバーを使用可能にする 101
| DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに開始する 102
| DB2 用のアプリケーション・サーバーをリモート側で開始する 104
| DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする 104
| DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに停止する 106
| DB2 用のアプリケーション・サーバーをリモート側で停止する 107
| DB2 用のアプリケーション・サーバーから DB2 Web ツールをアンインストールする 108
| DB2 用のアプリケーション・サーバーをアンインストールする 108
| DB2 用のアプリケーション・サーバーから DB2 Web サービス・アプリケーションをアンインストールする 109

第 11 章 DB2 Web ツール. 111

DB2 Web コマンド・センター 111
DB2 Web ヘルプ・センター 112

第 12 章 アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ . . . 113

| DB2 Web ツールのデプロイ用に推奨されるアプリケーション・サーバー 113
| WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ 113
| WebLogic アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ 118
| その他のアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ 121

第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ 127

第 5 部 リファレンス 131

第 14 章 DB2 製品ライセンス・ファイル 133

DB2 製品ライセンス・ファイル 133

db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録	134	DB2 PDF 資料および印刷された資料	161
ライセンス・センターを使用した DB2 ライセンス・キーの登録	135	DB2 の基本情報	161
db2licm コマンドによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定	136	管理情報	162
ライセンス・センターによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定	137	アプリケーション開発情報	163
第 15 章 MultiFixPak によるインストール	139	ビジネス・インテリジェンス情報	164
installAltFixPak による複数レベルの DB2 のインストール (UNIX)	139	DB2 Connect 情報	164
複数の DB2 レベルのインストール	141	入門情報	164
第 6 部 付録	145	チュートリアル情報	165
付録 A. DB2 Universal Database の技術情報の概要	147	オプション・コンポーネント情報	165
DB2 資料とヘルプ	147	リリース・ノート	166
DB2 ドキュメンテーションの更新	147	PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法	167
DB2 インフォメーション・センター	148	DB2 の印刷資料の注文方法	168
DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ	150	DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す	169
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)	153	コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す	170
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)	155	コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す	170
DB2 インフォメーション・センターの呼び出し	158	コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す	171
コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール	159	DB2 チュートリアル	171
DB2 インフォメーション・センターにおいて、希望する言語でトピックを表示する	160	DB2 トラブルシューティング情報	172
		アクセス支援	173
		キーボードによる入力およびナビゲーション	173
		アクセスしやすい表示	174
		支援テクノロジーとの互換性	174
		アクセスしやすい資料	174
		ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム	174
		DB2 Universal Database 製品の共通基準認証	177
		付録 B. 特記事項	179
		商標	181
		索引	183
		IBM と連絡をとる	187
		製品情報	187

第 1 部 DB2 サーバーの手動インストールおよび構成

第 1 章 DB2 サーバーの手動インストール

DB2 製品の手動インストール

DB2 製品は、DB2 セットアップ・ウィザードまたは応答ファイルを使用してインストールすることが勧められています。DB2 セットアップ・ウィザードには、便利なグラフィカル・インターフェースとインストールのヘルプ、ユーザーおよびグループの作成、プロトコルの構成、インスタンスの作成の機能が含まれています。

応答ファイルによるインストールも、グラフィカル・インターフェースがないだけで、それ以外の点では同じメリットがあります。それに加えて、応答ファイルを使用する場合は、個々の DBM 構成パラメーターやプロファイル・レジストリー変数を設定するなど、高度な構成機能を利用できます。

それにもかかわらず、UNIX ベースのオペレーティング・システムでこれらのインストール方法を使用したくない場合は、**db2_install** スクリプトや UNIX ベースのオペレーティング・システム付属のインストール・ユーティリティーを使用して、手動で DB2 製品をインストールすることができます。

前提条件:

インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。例えば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

制約事項:

Windows オペレーティング・システムでは、DB2 製品を手動でインストールすることはできません。Windows オペレーティング・システムの場合、DB2 セットアップ・ウィザードまたは応答ファイルを使用する以外の方法で DB2 製品をインストールすることはできません。

手順:

下記のようにして、手動インストールを選択します。

- **db2_install** スクリプトを使用して DB2 をインストールする。この方式は、サポートされている UNIX ベースのオペレーティング・システムのいずれかでインストールする場合に使用できます。
- SMIT を使用して DB2 をインストールする (AIX) SMIT を使用して DB2 をインストールする (AIX)
- rpm を使用して DB2 をインストールする (Linux)
- swinstall を使用して DB2 をインストールする (HP-UX)
- pkgadd を使用して DB2 をインストールする (Solaris オペレーティング環境)

関連概念:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB のインストール方式 (Windows および UNIX)』

関連タスク:

- 4 ページの『db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール (UNIX)』
- 6 ページの『SMIT を使用して DB2 製品をインストールする (AIX)』
- 7 ページの『rpm を使用して DB2 製品をインストールする (Linux)』
- 8 ページの『swinstall を使用して DB2 製品をインストールする (HP-UX)』
- 10 ページの『pkgadd を使用して DB2 製品をインストールする (Solaris オペレーティング環境)』
- 11 ページの『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール (UNIX)

db2_install スクリプトは、UNIX 系オペレーティング・システムのネイティブ・インストール・ユーティリティーを使用して、特定の DB2 製品のすべてのコンポーネントをシステムにインストールします。db2_install スクリプトでのインストールは英語サポートのみです。つまり、ヘルプ、メッセージ、およびツールのインターフェースは英語のみです。

この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) または応答ファイルによるインストールであれば自動的に実行されるユーザーとインスタンスの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

db2_install スクリプトを使用して DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。例えば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

db2_install スクリプトを使用して DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. シェル・プロンプトに対して **./db2_install** コマンドを入力して、db2_install スクリプトを起動します。db2_install スクリプトは、DB2 バージョン 8 の製品 CD-ROM の root ディレクトリーにあります。db2_install スクリプトは、以下のキーワードのいずれかを入力するためのプロンプトを表示します (どの DB2 製品をインストールするかを示す)。

DB2.EXP

DB2 Express Edition または DB2 Express Edition プロセッサ・オプション

DB2.ESE

DB2 Enterprise Server Edition

DB2.WSE

DB2 Workgroup Server Edition および DB2 Workgroup Server Unlimited Edition

DB2.PE

DB2 Personal Edition

DB2.CONEE

DB2 Connect Enterprise Edition、DB2 Connect Unlimited Edition、および DB2 Connect Application Server Edition

DB2.CONPE

DB2 Connect Personal Edition

DB2.ADMCL

DB2 Administration Client

DB2.ADCL

DB2 Application Development Client

DB2.RTCL

DB2 Run-Time Client

DB2.DLM

DB2 Data Links Manager

DB2.GSE

DB2 Spatial Extender

DB2.WM

DB2 Warehouse Manager

DB2.QP

DB2 Query Patroller

DB2.CUBE

DB2 Cube Views

DB2.LSDC

DB2 Information Integrator 非リレーショナル・ラッパー

DB2.RCON

DB2 Information Integrator リレーショナル・ラッパー

4. インストールする製品に対応するキーワードを入力してください。複数の製品キーワードを指定する場合は、キーワードとキーワードの間をスペースで区切ります。

DB2 ソフトウェアのインストール・ディレクトリーは、次の場所にあります。

- /usr/opt/db2_08_01 (AIX の場合)
- /opt/IBM/db2/V8.1 (HP-UX、Linux、または Solaris オペレーティング環境の場合)

Solaris オペレーティング環境の場合は、DB2 のベース・ディレクトリーとして異なるディレクトリーを指定できます。Solaris オペレーティング環境の場合のデフォ

ルトのベース・ディレクトリーは、 /opt です。それとは別のベース・ディレクトリーに DB2 をインストールする場合には、データベースの DB2 インストール・ディレクトリー /opt/IBM/db2/V8.1 のためのリンクが設定されます。製品の一部は、デフォルトのインストール・ディレクトリーに依存しています。リンクを作成することによって、DB2 の物理的位置を /opt 以外のベース・ディレクトリーにすることが可能になります。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 11 ページの『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Solaris)』

SMIT を使用して DB2 製品をインストールする (AIX)

ここでは、AIX において、システム管理インターフェース・ツール (SMIT) を使用して DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールであれば自動的に実行されるユーザーとインスタンスの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

SMIT を使用して AIX に DB2 をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。例えば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

SMIT を使用して DB2 製品を AIX にインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. シェル・プロンプトに対して **smit** コマンドを入力します。smit GUI が表示されます。
4. 「システム管理 (System Management)」リストで、「ソフトウェアのインストールと保守 (Software Installation and Maintenance)」 → 「ソフトウェアのインストールと更新 (Install and Update Software)」 → 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」を選択します。

5. 「*ソフトウェアの入力装置/ディレクトリー (*INPUT device/directory for software)」テキスト・フィールドで、インストール・メディアの入力装置またはディレクトリーを指定します。または、「リスト (List)」をクリックすると、すべての入力装置またはディレクトリーが表示されます。
6. マウントされている CD-ROM ドライブをリストから選択します。インストール・メディアの入力装置またはディレクトリーが「*ソフトウェアの入力装置/ディレクトリー (*INPUT device/directory for software)」テキスト・フィールドに表示されます。「OK」をクリックします。
7. 「*インストールするソフトウェア (*SOFTWARE to install)」テキスト・フィールドで、インストールするコンポーネントを指定します。または、「リスト (List)」ボタンをクリックすると、インストール可能なソフトウェア製品が表示されます。「OK」をクリックします。

インストールする製品のうち必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2/plat ディレクトリーに含まれています (plat はインストール対象のプラットフォーム)。

インストール処理が完了すると、/usr/opt/db2_08_01 ディレクトリーに DB2 ソフトウェアがインストールされます。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 11 ページの『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

rpm を使用して DB2 製品をインストールする (Linux)

ここでは、Linux において、rpm コマンドを使用して DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールであれば自動的に実行されるユーザーとインスタンスの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

rpm コマンドを使用して Linux に DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。例えば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

rpm コマンドを使用して Linux に DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。

2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. インストールするコンポーネントを指定します。DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。そのリストを使用して、必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2/plat ディレクトリーに含まれています (plat はインストール対象のプラットフォーム)。
4. インストールするコンポーネントごとに rpm コマンドを実行します。

```
rpm -ivh component_name
```

例えば、コントロール・センターをインストールする場合には、下記のコマンドを入力することによって db2cc81-8.1.0-0.i386.rpm コンポーネントをインストールします。

```
rpm -ivh IBM_db2cc81-8.1.0-0.i386.rpm
```

インストール処理が完了すると、/opt/IBM/db2/V8.1 ディレクトリーに DB2 ソフトウェアがインストールされます。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 11 ページの『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

swinstall を使用して DB2 製品をインストールする (HP-UX)

ここでは、HP-UX において、**swinstall** ユーティリティーを使用して DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールであれば自動的に実行されるユーザーの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

swinstall ユーティリティーを使用して HP-UX に DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。例えば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

swinstall ユーティリティーを使用して HP-UX に DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. シェル・プロンプトに対して次のコマンドを入力することによって、**swinstall** ユーティリティーを実行します。

```
swinstall -x autoselect_dependencies=true
```

このコマンドを実行すると、「ソフトウェアの選択 (Software Selection)」、および「ソースの指定 (Specify Source)」ウィンドウが表示されます。必要に応じて、「ソースの指定 (Specify Source)」ウィンドウの「ソース・ホスト名 (Source Host Name)」に表示されているホスト名を変更します。

4. 「ソース・デポ・パス (Source Depot Path)」フィールドで、
/cdrom/db2/hpux と入力します (/cdrom は CD-ROM のマウント・ディレクトリー)。
5. 「OK」をクリックして、「ソフトウェアの選択 (Software Selection)」ウィンドウに戻ります。
6. 「ソフトウェアの選択 (Software Selection)」ウィンドウには、インストール可能なソフトウェアのリストが表示されます。インストールするコンポーネントを指定します。DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。そのリストを使用して、必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2 ディレクトリーに含まれています。
7. 「アクション (Actions)」メニューから「インストール用にマーク (Mark for Install)」を選択して、インストールするコンポーネントを選択します。
8. 下記のメッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。

```
In addition to the software you just marked, other software was  
automatically marked to resolve dependencies. This message will  
not appear again.
```
9. 「アクション (Actions)」メニューから「インストール (分析) (Install (analysis))」を選択します。「インストール分析 (Install Analysis)」ウィンドウが表示されます。
10. 「状況 (Status)」フィールドに「作動可能 (Ready)」というメッセージが表示されたら、「インストール分析 (Install Analysis)」ウィンドウの「OK」を選択します。
11. 確認ウィンドウで「はい (Yes)」を選択して、ソフトウェアのインストールを確認します。

ソフトウェアがインストールされる間、「インストール (Install)」ウィンドウを見て、「状況 (Status)」フィールドに「作動可能 (Ready)」が表示されるのを確認します。「メモ (Note)」ウィンドウが表示されます。swinstall プログラムによってファイル・セットがロードされ、そのファイル・セットのための制御スクリプトが実行されます。

12. 「ファイル (File)」メニューから「終了 (Exit)」を選択し、swinstall を終了します。

インストール処理が完了すると、/opt/IBM/db2/V8.1 ディレクトリーに DB2 ソフトウェアがインストールされます。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』

- 11 ページの『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

pkgadd を使用して DB2 製品をインストールする (Solaris オペレーティング環境)

ここでは、Solaris オペレーティング環境において、**pkgadd** ユーティリティーを使用して DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールであれば自動的に実行されるユーザーの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。例えば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. インストールするコンポーネントを指定します。DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。そのリストを使用して、必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2/plat ディレクトリーに含まれています (plat はインストール対象のプラットフォーム)。
4. インストールするコンポーネントごとに **pkgadd** コマンドを実行します。

```
pkgadd component_name
```

例えば、コントロール・センターをインストールする場合には、下記のコマンドを入力して db2cc81 コンポーネントをインストールします。

```
pkgadd db2cc81
```

インストール処理が完了すると、DB2 ソフトウェアは /opt/IBM/db2/V8.1 ディレクトリーにインストールされます。

関連タスク:

- 4 ページの『db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール (UNIX)』
- 11 ページの『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Solaris)』

第 2 章 手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ

クライアント・サーバー通信のシナリオ

次の表は、DB2 クライアントを DB2 サーバーに接続する際に使用できる通信プロトコルを示しています。DB2 Workgroup Server Edition と DB2 Enterprise Server Edition は、ホストまたは OS/400 クライアントからの要求を処理できます。

表 1. クライアント・サーバー通信のシナリオ

	AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境のサーバー	Windows NT/Windows 2000/Windows XP/Windows Server 2003 のサーバー
OS/400 V5R1 クライアント	TCP/IP	TCP/IP
AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境のクライアント	TCP/IP	TCP/IP
OS/390 または z/OS クライアント	TCP/IP	TCP/IP
VM V6 クライアント	TCP/IP	TCP/IP
VSE V7 オンライン・クライアント	TCP/IP	TCP/IP
VM V7 クライアント	TCP/IP	TCP/IP
Windows 98 および Windows ME のクライアント	TCP/IP	NPIPE NetBIOS TCP/IP
Windows NT/Windows 2000 のクライアント	TCP/IP	NPIPE NetBIOS TCP/IP
Windows XP/Windows Server 2003 のクライアント	TCP/IP	NPIPE NetBIOS TCP/IP

関連タスク:

- 11 ページの『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ

ここでは、UNIX オペレーティング・システムでの手動インストール後に DB2 サーバーをセットアップする方法について説明します。db2_install スクリプトまたはオペレーティング・システム付属のインストール・ユーティリティを使用した手動インストールで実行されるのは、DB2 のコンポーネントのインストールのみです。下記に示すような構成およびセットアップの作業は、手動で実行する必要があります。

手順:

手動インストール後に DB2 サーバーをセットアップするには、

1. DB2 インストールのためのグループおよびユーザー ID を作成します。
2. DB2 Administration Server (DAS) を作成します。
3. db2icrt を使用してインスタンスを作成します。db2icrt を使用してインスタンスを作成します。

4. DB2 ファイルのリンクを作成します。(オプション)
5. DB2 インスタンスのための TCP/IP 通信を構成します。
6. 製品ライセンス・キーを更新します。

タスク・センターや DB2 Administration Server スケジューラーなどの DB2 ツールを使用する場合は、DB2 ツール・カタログをセットアップすることをお勧めします。DB2 ツール・カタログには、DB2 ツールや機能スケジューラーが機能するために必要なメタデータが含まれています。

関連タスク:

- 12 ページの『DB2 UDB インストールのためのグループおよびユーザー ID の作成 (UNIX)』
- 14 ページの『DB2 Administration Server (DAS) の作成』
- 15 ページの『db2icrt によるインスタンスの作成』
- 16 ページの『DB2 ファイルのためのリンクの作成』
- 20 ページの『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』
- 134 ページの『db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録』
- 3 ページの『DB2 製品の手動インストール』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ツール・カタログ・データベースおよび DAS スケジューラーのセットアップと構成』

DB2 UDB インストールのためのグループおよびユーザー ID の作成 (UNIX)

DB2 を操作するには、3 つのユーザーおよびグループが必要です。以下の説明で使用されるユーザーおよびグループの名前は、下記の表のとおりです。システムの命名規則と DB2 の命名規則に従った名前である限り、独自のユーザー名およびグループ名を指定できます。

作成するユーザー ID は、それ以降のセットアップ作業で必要になります。

表 2. 必要なユーザーおよびグループ

必要なユーザー	サンプル・ユーザー名	サンプル・グループ名
インスタンス所有者	db2inst1	db2iadm1
fenced ユーザー	db2fenc1	db2fadm1
DB2 Administration Server のユーザー	dasusr1	dasadm1

- インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーは、DB2 インスタンスが作成される場所です。
- fenced ユーザーは、DB2 データベースで使用されるアドレス・スペースの外部にあるユーザー定義関数 (UDF) およびストアド・プロシージャを実行するために使用されます。
- DB2 Administration Server のユーザーのユーザー ID は、システムで DB2 Administration Server を実行するために使用されます。

前提条件:

ユーザーおよびグループを作成するには、root 権限が必要です。

手順:

DB2 のためのグループおよびユーザー ID を作成するには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. オペレーティング・システムごとに該当するコマンドを入力します。

注: 以下のコマンド行の例には、パスワードが含まれていません。これらは例示だけを目的としたものです。 *passwd username* パラメーターを使用して、コマンド行からパスワードを設定できます。

AIX AIX でグループを作成するには、下記のコマンドを入力します。

```
mkgroup id=999 db2iadm1
mkgroup id=998 db2fadm1
mkgroup id=997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
mkuser id=1004 pgrp=db2iadm1 groups=db2iadm1 home=/home/db2inst1
db2inst1
```

```
mkuser id=1003 pgrp=db2fadm1 groups=db2fadm1 home=/home/db2fenc1
db2fenc1
```

```
mkuser id=1002 pgrp=dasadm1 groups=dasadm1 home=/home/dasusr1
dasusr1
```

HP-UX

HP-UX でグループを作成するには、下記のコマンドを入力します。

```
groupadd -g 999 db2iadm1
groupadd -g 998 db2fadm1
groupadd -g 997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
useradd -g db2iadm1 -d /home/db2inst1 -m db2inst1
useradd -g db2fadm1 -d /home/db2fenc1 -m db2fenc1
useradd -g dbasgrp -d /home/dasusr1 -m dasusr1
```

Linux Linux でグループを作成するには、下記のコマンドを入力します。

```
groupadd -g 999 db2iadm1
groupadd -g 998 db2fadm1
groupadd -g 997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
mkuser -u 1004 -g db2iadm1 -m -d /home/db2inst1 db2inst1
mkuser -u 1003 -g db2fadm1 -m -d /home/db2fenc1 db2fenc1
mkuser -u 1002 -g dasadm1 -m -d /home/dasusr1 dasusr1
```

Solaris オペレーティング環境

Solaris オペレーティング環境でグループを作成するには、以下のコマンドを入力します。

```
groupadd -g 999 db2iadm1
groupadd -g 998 db2fadm1
groupadd -g 997 dasadm1
```

グループごとにユーザーを作成します。

```
useradd -g db2iadm1 -u 1004 -d /export/home/db2inst1 -m
db2inst1

useradd -g db2fadm1 -u 1003 -d /export/home/db2fenc1 -m
db2fenc1

useradd -g dasadm1 -u 1002 -d /export/home/dasusr1 -m
dasusr1
```

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『一般的な命名規則』

関連タスク:

- 3 ページの『DB2 製品の手動インストール』

DB2 Administration Server (DAS) の作成

このタスクは、DB2 の手動インストール のメインタスクの一部です。

DB2 Administration Server (DAS) は、コントロール・センターや構成アシスタントなどの DB2 ツール用サポート・サービスを提供します。

前提条件:

- DAS を作成するには、root 権限が必要です。
- DB2 用 DAS ユーザーが作成済みでなければなりません。

手順:

DAS を作成するには、

1. root 権限を付与されたユーザーとしてログインします。
2. 下記のいずれかのコマンドを発行して、DAS を作成します。

- AIX の場合、

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dascrt -u DASuser
```

HP-UX、Solaris オペレーティング環境、または Linux の場合、

```
/opt/IBM/db2/V8.1/instance/dascrt -u DASuser
```

-u **-u** パラメーターには、DB2 用のユーザーおよびグループを作成した時点で作成した DAS ユーザーを指定します。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 15 ページの『db2icrt によるインスタンスの作成』
- 3 ページの『DB2 製品の手動インストール』

db2icrt によるインスタンスの作成

このタスクは、手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ のメインタスクの一部です。

DB2 インスタンスは、データを保管したりアプリケーションを実行したりする環境です。 **db2icrt** コマンドを使用して、インスタンスを作成します。

前提条件:

root 権限が必要です。

手順:

db2icrt を使用してインスタンスを作成するには、

1. root 権限を付与されたユーザーとしてログインします。
2. **db2icrt** コマンドを実行します。例えば次のようにします。

```
DB2DIR/instance/db2icrt -a AuthType -u FencedID InstName
```

DB2DIR

DB2 のインストール・ディレクトリー。

- AIX の場合、DB2 のインストール・ディレクトリーは /usr/opt/db2_08_01 です。
- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合、インストール・ディレクトリーは /opt/IBM/db2/V8.1 です。

-a AuthType

インスタンスの認証タイプ。AuthType は、SERVER、CLIENT、DCS、SERVER_ENCRYPT、DCS_ENCRYPT のいずれかです。SERVER がデフォルトです。このパラメーターはオプションです。

-u fencedID

fenced ユーザー定義関数 (UDF) および fenced ストアード・プロシージャが実行されるユーザーの名前。DB2 クライアントにインスタンスを作成している場合には、このフラグは不要です。作成した fenced ユーザーの名前を指定してください。

InstName

インスタンス名。インスタンス名は、インスタンスの所有者ユーザーの名前と同じでなければなりません。作成したインスタンス所有者ユーザーの名前を指定してください。インスタンス所有者ユーザーのホーム・ディレクトリーにインスタンスが作成されます。

例えば、サーバー認証を使用していて、fenced ユーザーが db2fenc1 でインスタンス所有者ユーザーが db2inst1 の場合、AIX システムにインスタンスを作成するには、次のコマンドを使用します。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/db2icrt -a server -u db2fenc1 db2inst1
```

インスタンスの作成後、ヘルス・モニターのために通知を構成することができます。これは、ヘルス・センターまたは CLP を使用して実行できます。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『サーバーでの認証メソッド』

関連タスク:

- 3 ページの『DB2 製品の手動インストール』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2icrt - インスタンスの作成コマンド』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『health_mon - 「ヘルス・モニター」構成パラメーター』

DB2 ファイルのためのリンクの作成

DB2 ファイルのための `/usr/lib` ディレクトリーへのリンク、また、特定のバージョンおよびリリース・レベルの DB2 に関して組み込みファイルのための `/usr/include` ディレクトリーへのリンクを作成することができます。

アプリケーションを開発または実行するときに、製品ライブラリーおよび組み込みファイルの絶対パスを指定しなくて済むようにしたい場合は、このようなリンクを作成した方がよいでしょう。

このタスクは通常の DB2 操作では不要です。

前提条件:

root 権限のあるユーザーとしてログオンする必要があります。

制約事項:

以下の制限があります。

- DB2 の 1 つのバージョンのためのリンクを作成すると、DB2 の他のバージョンは動作しなくなります。リンクは、1 つのシステムにつき 1 つのバージョンの DB2 に対してしか確立できません。
- すでに DB2 の旧バージョンから `/usr/lib` および `/usr/include` ディレクトリーへのリンクが存在している場合、それらは自動的に削除されます。
- 意図的に DB2 の複数のバージョンが混在しているシステムでは、リンクを作成しないでください。

手順:

DB2 ファイルのためのリンクを作成するには、

1. root 権限のあるユーザーとしてログオンします。
2. 各オペレーティング・システムに該当するコマンドを実行します。

AIX `/usr/opt/db2_08_01/cfg/db2ln`

その他のすべての **UNIX** ベースのオペレーティング・システム

`/opt/IBM/db2/V8.1/cfg/db2ln`

すでに DB2 の旧バージョンから `/usr/lib` および `/usr/include` ディレクトリーへのリンクが存在している場合、**db2ln** コマンドを実行して、DB2 のこのバージョンのためのリンクを作成した時点で、それらは自動的に削除されます。旧バージョン

ョンのライブラリーへのリンクを再確立するには、現行バージョンの DB2 から **db2rmln** コマンドを実行した後、旧バージョンの DB2 から **db2ln** コマンドを実行してください。

関連タスク:

- 134 ページの『db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録』
- 3 ページの『DB2 製品の手動インストール』

第 3 章 クライアントとサーバーとの間の通信の構成

コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成

このタスクでは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、DB2 クライアントからリモート・データベース・サーバーへの接続を構成する方法を説明します。

構成アシスタントを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成することもできます。

前提条件:

クライアントからサーバーへの接続を構成する前に、

- DB2 サーバーおよび DB2 クライアントで、通信を構成する必要があります。ご使用のオペレーティング・システムによって、通信は名前付きパイプ、NetBIOS または TCP/IP のいずれかとなります。
- サポートされる、クライアントからサーバーへの接続シナリオの 1 つを使用する必要があります。接続シナリオは、どのオペレーティング・システムがどの通信方式またはプロトコルを使用できるかを概説しています。

制約事項:

- Windows および UNIX 上の DB2 UDB サーバーは、APPC を使用したインバウンド・クライアント接続を受け入れなくなりました。DB2 Connect がインストールされている場合は、DB2 クライアントは引き続き、APPC を使用してホスト・システムに接続することができます。
- NetBIOS を使用して Windows クライアントから、UNIX ベースのシステム上で稼働しているサーバーに接続することはできません。

手順:

以下のようにして、コマンド行プロセッサを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成します。

1. 通信パラメーター値を確認し、記録する。
2. クライアントで適切な通信プロトコルを構成する。名前付きパイプについては、構成は必要ありません。
3. 以下の方式のいずれかを使用して、DB2 クライアントからデータベース・ノードをカタログする。採用する方式は、カタログするシステム上の通信プロトコル・セットアップに基づいて決めます。
 - DB2 クライアントから TCP/IP ノードをカタログする。
 - DB2 クライアントから NetBIOS ノードをカタログする。
 - DB2 クライアントから名前付きパイプ・ノードをカタログする。
4. DB2 クライアント上でデータベースをカタログする。
5. クライアントからサーバーへの接続をテストする。

関連タスク:

- 24 ページの『DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ』
- 30 ページの『DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ』
- 33 ページの『クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ』
- 25 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』
- 34 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』
- 37 ページの『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 39 ページの『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 45 ページの『DB2 インスタンスの NetBIOS 通信の構成』
- 42 ページの『DB2 インスタンスの TCP/IP 通信の構成』
- 49 ページの『DB2 インスタンスの名前付きパイプ通信の構成』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』

関連資料:

- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

TCP/IP の構成

CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成

ここでは、CLP を使用することによって、クライアントで TCP/IP 通信を構成する方法について説明します。

前提条件:

その DB2 クライアントで TCP/IP が機能することを確認してください。クライアントからサーバーへの接続を確立するには、DB2 サーバー上でも TCP/IP が機能していなければなりません。クライアントからサーバーへの TCP/IP 機能性を検査するには、サーバー・マシンで **hostname** を入力し、クライアント・マシンからそのホスト名に対して ping します。

手順:

DB2 クライアントで TCP/IP 通信を構成するには、

1. サーバーのホスト・アドレスを解決します。
2. DB2 クライアントでサービス・ファイルを更新します。

関連タスク:

- 22 ページの『クライアント・サーバー接続の構成のためにサーバー・ホスト・アドレスを解決する』
- 23 ページの『クライアント上のサービス・ファイルの更新』
- 32 ページの『CLP によるクライアントでの名前付きパイプの構成』
- 28 ページの『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』

クライアント・サーバー接続の構成のための TCP/IP パラメータ 値ワークシート

構成ステップでは、次の表内の「使用値」列を使用してください。

表 3. TCP/IP パラメータ値ワークシート

パラメーター	説明	サンプル値	使用値
ホスト名 • ホスト名 (<i>hostname</i>) または • IP アドレス (<i>ip_address</i>)	リモート・ホストの <i>hostname</i> または <i>ip_address</i> を使用します。 このパラメーターを解決するには、次のようにします。 • サーバーで hostname コマンドを入力して、 <i>hostname</i> を取得します。 • ネットワーク管理者に <i>ip_address</i> を問い合わせるか、 ping hostname コマンドを入力します。 • UNIX システムでは、 DB2DIR/bin/hostlookup hostname コマンドも使用できます。 ここで、 DB2DIR は DB2 がインストールされているディレクトリーを表します。	myserver または 9.21.15.235	
サービス名 • 接続サービス名 (<i>svcname</i>) または • ポート番号/プロトコル (<i>port_number/tcp</i>)	サービス・ファイルに必要な値 接続サービス名は、クライアントでの接続ポート番号 (<i>port_number</i>) を表す任意の名前です。 ポート番号は、サーバー・システム上のサービス・ファイルの中で <i>svcname</i> パラメーターのマップ先になっているポート番号と同じでなければなりません。 (<i>svcname</i> パラメーターはサーバー・インスタンス上のデータベース・マネージャー構成ファイル内にあります。) この値は、他のアプリケーションで使用されてはならず、 <i>services</i> ファイル内で一意でなければなりません。 UNIX プラットフォームでは、一般的にこの値は 1024 以上でなければなりません。 サーバーを構成するために使用される値については、データベース管理者に問い合わせてください。	server1 または 3700/tcp	

表 3. TCP/IP パラメーター値ワークシート (続き)

パラメーター	説明	サンプル値	使用値
ノード名 (<i>node_name</i>)	接続の確立を試行しているノードを記述するローカル別名またはニックネーム。任意の名前を選択することができますが、ローカル・ノード・ディレクトリー内のノード名値はそれぞれ一意でなければなりません。	db2node	

関連タスク:

- 20 ページの『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』
- 19 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成』

クライアント・サーバー接続の構成のためにサーバー・ホスト・アドレスを解決する

クライアントでは、接続を確立するために DB2 サーバーのホスト・アドレスを使用します。ネットワークにネーム・サーバーがある場合、またはサーバーの IP アドレス (*ip_address*) を直接指定する場合には、TCP/IP ノードのカタログへ進んでください。ドメイン・ネーム・サーバーがネットワークに存在しない場合には、ローカル・ホスト・ファイル内のサーバーの IP アドレス (*ip_address*) にマップするホスト名を直接指定することができます。

ネットワーク情報サービス (NIS) を使用する UNIX クライアントをサポートすることを計画していて、ネットワークでドメイン・ネーム・サーバーを使用していない場合には、NIS マスター・サーバーにある *hosts* ファイルを更新しなければなりません。

ローカル・ホスト・ファイルの場所は、下記のとおりです。

表 4. ローカル・ホスト・ファイルの場所

オペレーティング・システム	ディレクトリー
Windows 98/Windows ME	windows
Windows NT/Windows 2000/Windows XP/Windows Server 2003	%SystemRoot%\system32\drivers\etc (%SystemRoot% はシステムで定義されている環境変数)
UNIX	/etc

手順:

テキスト・エディターを使用して、DB2 クライアントのホスト・ファイルに、サーバーの IP アドレスの項目を追加します。例えば、

```
9.21.15.235    myserver    # IP address for myserver
```

ここで、

```
9.21.15.235
```

ip_address を表します。

myserver

hostname (ホスト名) を表します。

この項目について説明する注釈を表します。

サーバーが DB2 クライアントと同じドメイン内にはない場合には、*myserver.spifnet.ibm.com* のような完全修飾されたドメイン・ネームを提供しなければなりません (*spifnet.ibm.com* はドメイン・ネーム)。

関連タスク:

- 23 ページの『クライアント上のサービス・ファイルの更新』
- 19 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成』

クライアント上のサービス・ファイルの更新

ポート番号 (*port_number*) を使用して TCP/IP ノードをカタログしようとしている場合、この作業は不要です。

前提条件:

ネットワーク情報サービス (NIS) を使用する UNIX クライアントを使用している場合には、NIS マスター・サーバーにある *services* ファイルを更新する必要があります。

手順:

テキスト・エディターを使用して、クライアントのサービス・ファイルに、接続サービス名およびポート番号を追加します。

サービス・ファイルの場所は、下記のとおりです。

表 5. サービス・ファイルの位置

オペレーティング・システム	ディレクトリー
Windows 98/Windows ME	windows
Windows NT/Windows 2000/Windows XP/Windows Server 2003	%SystemRoot%\system32\drivers\etc (%SystemRoot% はシステムで定義されている環境変数)
UNIX	/etc

例えば、

```
server1 50000/tcp # DB2 connection service port
```

ここで、

server1 接続サービス名を表します。

50000 接続ポート番号を表します (50000 がデフォルト)。

tcp 使用している通信プロトコルを表します。

この項目について説明するコメントの開始を示します。

関連タスク:

- 24 ページの『DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ』

DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ

TCP/IP ノードのカタログでは、DB2 クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードについて記述する項目が追加されます。この項目では、選択された別名 (*node_name*)、*hostname* (または *ip_address*)、およびクライアントがリモート・ホストにアクセスするときに使用する *svcname* (または *port_number*) を指定します。

前提条件:

- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限か、または *catalog_noauth* オプションが ON に設定されていることが必要です。root 権限を使用してノードをカタログすることはできません。

手順:

TCP/IP ノードのカタログを実行するには、

1. システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。
2. UNIX クライアントを使用している場合には、下記のようにしてインスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

3. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
4. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、ノードをカタログします。

```
db2 => catalog tcpip node node_name remote hostname|ip_address  
server service_name|port_number [remote_instance instance_name]  
[system system_name] [ostype os_type]
```

```
db2 => terminate
```

ここで、

- *node_name* は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- *remote_instance* は、データベースが存在するサーバー・インスタンス名を表します。
- *system* は、サーバーを識別するための DB2 システム名です。
- *ostype* は、サーバーのオペレーティング・システムのタイプです。

注:

- a. **terminate** コマンドは、ディレクトリー・キャッシュをリフレッシュするために必要です。
- b. `remote_instance`、`system`、および `ostype` はオプションですが、DB2 ツールを使用するユーザーの場合は必須です。
- c. クライアントで使用される `service_name` は、サーバーのものと同じである必要はありません。しかし、そのマップ先ポート番号は同じでなければなりません。

例:

ポート番号 50000 を使用しているリモート・サーバー `myserver.ibm.com` 上で `db2node` を呼び出すためのノードをカタログするには、**db2** プロンプトで次のように入力します。

```
db2 => catalog tcpip node db2node remote myservers server 50000
DB20000I The CATALOG TCP/IP NODE command completed successfully.
DB21056W Directory changes may not be effective until the directory cache is
refreshed.
```

```
db2 => terminate
DB20000I The TERMINATE command completed successfully.
```

関連タスク:

- 20 ページの『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』
- 34 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG TCP/IP NODE コマンド』

CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、DB2 クライアントからデータベースのカタログを作成する方法について説明します。

クライアント・アプリケーションからリモート・データベースにアクセスできるようにするには、クライアント上にそのデータベースのカタログを作成する必要があります。データベースを作成すると、特に指定しない限りそのデータベースは、データベース名と同じデータベース別名を使って、サーバー上で自動的にカタログされます。

DB2 クライアントとリモート・データベースの接続確立には、データベース・ディレクトリー内の情報、および (ノード不要のローカル・データベースのカタログを実行するのでない限り) ノード・ディレクトリー内の情報が使用されます。

制約事項:

DB2 では、`root` 権限によるデータベースのカタログ作成はサポートされていません。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID が必要です。

- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限か、または `catalog_noauth` オプションが ON に設定されていることが必要です。

- 下記のパラメーター値は、リモート・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - ノード名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

これらのパラメーター値、および使用する値の記録についての詳細は、データベースのカタログ用のパラメーター値ワークシートを参照してください。

- 下記のパラメーター値は、ローカル・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - ドライブ
 - データベース別名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

ローカル・データベースは、任意のときにアンカタログおよび再カタログできます。

手順:

クライアントでデータベースをカタログするには、

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. オプション。データベースのカタログ用のパラメーター値ワークシートデータベースのカタログ用のパラメーター値ワークシートの「使用値」欄を更新してください。
3. UNIX プラットフォームで DB2 UDB を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

4. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
5. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、データベースをカタログします。

```
db2 => catalog database database_name as database_alias at  
node node_name [ authentication auth_value ]
```

ここで、

- `database_name` は、カタログするデータベースの名前です。
- `database_alias` は、カタログするデータベースのローカル・ニックネームです。
- `node_name` は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- `auth_value` は、データベースへの接続のときに行われる認証のタイプを指定します。このパラメーターのデフォルトは、サーバーで指定される認証タイプになります。認証タイプを指定すると、パフォーマンスが向上することがあります。認証値として指定できるオプションは、`SERVER`、`CLIENT`、`SERVER_ENCRYPT`、および `KERBEROS` です。

例:

`sample` というリモート・データベースを、ノード `db2node` においてローカル・データベース別名 `mysample` でカタログし、認証値として `server` を使用するには、次のコマンドを入力します。

```
db2 => catalog database sample as mysample at node db2node
authentication server
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 34 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 27 ページの『データベースのカタログ用のパラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG DATABASE コマンド』

データベースのカタログ用のパラメーター値ワークシート

下記のワークシートは、データベースのカタログのために必要なパラメーター値を記録するために使用します。

表 6. データベースのカタログ用のパラメーター値ワークシート

パラメーター	説明	サンプル値	使用値
データベース名 (<code>database_name</code>)	データベース作成時に、特に指定されていない場合は、データベース別名はデータベース名に設定されます。例えば、サーバー上に <code>sample</code> データベースが作成されると、データベース別名 <code>sample</code> も作成されます。データベース名は、サーバー上のリモート・データベース別名を表します。	<code>sample</code>	

表 6. データベースのカatalog用のパラメーター値ワークシート (続き)

パラメーター	説明	サンプル値	使用値
データベース別名 (<i>database_alias</i>)	リモート・データベースを表す任意のローカル・ニックネーム。これを指定しない場合には、デフォルトはデータベース名 (<i>database_name</i>) と同じになります。クライアントからデータベースに接続する際には、その名前を使用します。	mysample	
認証 (<i>auth_value</i>)	実際の環境で必要な認証のタイプ。	サーバー	
ノード名 (<i>node_name</i>)	データベースの常駐場所を記述したノード・ディレクトリー項目の名前。ノードをカatalogするために使用したのと同じ値をノード名 (<i>node_name</i>) に使用します。	db2node	

関連タスク:

- 25 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカatalog』
- 34 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』
- 19 ページの『コマンド行プロセッサー (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成』

NetBIOS の構成

CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサー (CLP) を使用して、クライアント上で NetBIOS を構成する方法について説明します。この作業は、NetBIOS を使用して DB2 クライアントから DB2 サーバーへの接続を構成する場合に実行します。接続は、構成アシスタントを使用して構成することもできます。

前提条件:

その DB2 クライアントで NetBIOS が機能することを確認してください。接続を確立するためには、DB2 サーバー上でも NetBIOS が構成されていなければなりません。

手順:

DB2 クライアントで NetBIOS 通信を構成するには、

1. NetBIOS 接続のために使用する論理アダプター番号を決定します。
2. データベース・マネージャーの構成ファイルを更新します。

関連タスク:

- 29 ページの『NetBIOS 接続に関するクライアントの論理アダプター番号の判別 (Windows)』

- 31 ページの『NetBIOS 接続のためのデータベース・マネージャー構成ファイルの更新』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』

NetBIOS 接続に関するクライアントの論理アダプター番号の判別 (Windows)

このタスクは、CLP を使用したクライアントでの NetBIOS の構成 のメインタスクの一部です。

CLP を使用してクライアントとサーバーの NetBIOS 接続を構成するには、クライアントの論理アダプター番号が必要です。

制約事項:

この手順が必要なのは、Windows オペレーティング・システムの場合のみです。

手順:

NetBIOS 接続の論理アダプター番号を判別するには、

1. コマンド・プロンプトから **regedit** コマンドを入力してレジストリー・エディターを起動します。
2. **HKEY_LOCAL_MACHINE** フォルダを展開し、**Software/Microsoft/Rpc/NetBIOS** フォルダから、NetBIOS アダプターの割り当てを見つけます。
3. **ncacn_nb_nb x** で始まる項目をダブルクリックして、NetBIOS 接続に関連したアダプター番号を表示します。ここで、 x には 0、1、2... です (通常は **nb0** アダプターを選択します)。「**DWORD 値の編集 (Edit DWORD Value)**」ウィンドウの「**データ値 (Data value)**」の設定を記録します。

注: 接続の両端で同じエミュレーションを使用している必要があります。

CLP を使用したクライアントでの NetBIOS の構成 の次のステップは、データベース・マネージャーの構成ファイルの更新です。

関連資料:

- 29 ページの『NetBIOS パラメーター値ワークシート』

NetBIOS パラメーター値ワークシート

このワークシートは、構成ステップにおいて NetBIOS 通信を構成するために必要な値を記録するために使用します。

表 7. NetBIOS パラメーター値ワークシート

パラメーター	説明	サンプル値	使用値
論理アダプター番号 (<i>adapter_number</i>)	NetBIOS 接続に使われるローカル論理アダプター。	0	

表 7. NetBIOS パラメーター値ワークシート (続き)

パラメーター	説明	サンプル値	使用値
ワークステーション名 (<i>nname</i>) - クライアント側	クライアント・ワークステーションの NetBIOS 名 <i>nname</i> はユーザーが選択した名前です。この名前はネットワーク内のすべての NetBIOS ノードの中で一意でなければなりません。 <i>nname</i> の最大長は 8 文字です。	client1	
ワークステーション名 (<i>nname</i>) - サーバー側	サーバー・ワークステーションの NetBIOS 名 <i>nname</i> の最大長は 8 文字です。この名前は、サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルの中に含まれています。	server1	
ノード名 (<i>node_name</i>)	接続の確立を試行しているノードを記述するローカル別名またはニックネーム。任意の名前を選択することができますが、ローカル・ノード・ディレクトリー内のすべてのノード名値は一意な値でなければなりません。	db2node	

関連タスク:

- 28 ページの『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』
- 19 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成』

DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ

NetBIOS ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。ノードの項目名には、選択したノード別名 (*node_name*) を使用します。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するクライアントの論理アダプター番号 (*adapter_number*) とサーバーのワークステーション名 (*nname*) を指定します。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンする必要があります。DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムヘデータベースを追加する場合は、システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。

- これらのパラメーター値の識別については、NetBIOS パラメーター値ワークシートNetBIOS パラメーター値ワークシートを参照してください。

手順:

NetBIOS ノードのカタログを実行するには、

```
db2 => catalog netbios node node_name remote nname adapter adapter_number
```

```
db2 => terminate
```

例えば、*db2node* というノードにリモート・データベース・サーバー *server1* をカタログするには、論理アダプター番号 *0* を使用して、以下のようにします。

```
db2 => catalog netbios node db2node remote server1 adapter 0
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 28 ページの『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』
- 25 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』

関連資料:

- 29 ページの『NetBIOS パラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NETBIOS NODE コマンド』

NetBIOS 接続のためのデータベース・マネージャー構成ファイルの更新

CLP を使用してクライアントからサーバーへの NetBIOS 接続を構成するには、データベース・マネージャーの構成ファイルを更新する必要があります。

制約事項:

データベース・マネージャー構成ファイルを、クライアントのワークステーション名 (*nname*) パラメーターを使用して更新しなければなりません。

手順:

データベース・マネージャーの構成ファイルを更新するには、

1. システム管理 (SYSADM) 権限をもったユーザーとしてシステムにログオンします。
2. コマンド行プロセッサに以下のコマンドを発行して、クライアントのワークステーション名 (*nname*) でデータベース・マネージャー構成ファイルを更新します。

```
update database manager configuration using nname nname
terminate
```

例えば、クライアントのワークステーション名 (*nname*) が *client1* の場合には、次のようにします。

```
update database manager configuration using nname client1
terminate
```

関連タスク:

- 37 ページの『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 30 ページの『DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ』

名前付きパイプの構成

CLP によるクライアントでの名前付きパイプの構成

ここでは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、DB2 クライアント上で名前付きパイプを構成する方法について説明します。

前提条件:

クライアントで名前付きパイプを構成する前に、

- その DB2 クライアントで名前付きパイプを使用できることを確認してください。接続を確立するためには、DB2 サーバー上でも名前付きパイプが使用可能でなければなりません。
- 下記のパラメーター値を確認してください。
 - コンピューター名 (サーバーのコンピューター名)
 - インスタンス名 (接続先となるサーバー上のインスタンス名)
 - ノード名 (サーバー・ノードのローカル別名)

これらのパラメーター値については、『名前付きパイプ用パラメーター値ワークシート』を参照してください。

手順:

名前付きパイプを構成するには、以下の操作を行ってください。

1. DB2 クライアント上での名前付きパイプのカタログ
2. DB2 クライアント上でのデータベースのカタログ

関連タスク:

- 33 ページの『クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ』
- 25 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』

関連資料:

- 32 ページの『クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ用パラメーター値ワークシート』

クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ用パラメーター値ワークシート

名前付きパイプ通信を構成するために必要なパラメーター値に関して、下記のワークシートを使用してください。

表 8. 名前付きパイプ用パラメーター値ワークシート

パラメーター	説明	サンプル値	使用値
コンピューター名 (<i>computer_name</i>)	サーバー・マシンのコンピューター名。 サーバー・マシンで、このパラメーターの値を突き止めるには、「スタート」ボタンをクリックし、「設定」→「コントロール パネル」を選択します。「ネットワーク」フォルダーをダブルクリックし、「識別情報」タブを選択します。コンピューター名を記録します。	server1	
インスタンス名 (<i>instance_name</i>)	接続先となるサーバー上のインスタンス名。	db2	
ノード名 (<i>node_name</i>)	接続の確立を試行しているノードを記述するローカル別名またはニックネーム。任意の名前を選択することができますが、ローカル・ノード・ディレクトリー内のノード名値はそれぞれ一意でなければなりません。	db2node	

関連タスク:

- 32 ページの『CLP によるクライアントでの名前付きパイプの構成』
- 19 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成』

クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ

名前付きパイプ・ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するものとして選択された別名 (*node_name*)、リモート・サーバーのワークステーション名 (*computer_name*)、およびインスタンス名 (*instance_name*) を指定します。

手順:

DB2 クライアントで名前付きパイプ・ノードのカタログを実行するには、コマンド行プロセッサ (CLP) で以下のコマンドを入力します。

```
db2 => db2 catalog npipe node node_name /
db2 => remote computer_name instance instance_name

db2 => terminate
```

例:

server1 というサーバーにある *db2node* というリモート・ノードをカタログするには、*db2* インスタンスで以下のようにします。

```
db2 => db2 catalog npipe node db2node remote server1 instance db2

db2 => terminate
```

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NAMED PIPE NODE コマンド』
- 32 ページの『クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ用パラメーター値ワークシート』

CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト

ノードとデータベースのカタログが終了したら、データベースに接続して接続のテストを実行する必要があります。

前提条件:

- 接続をテストするためには、その前にデータベース・ノードとデータベースのカタログを実行しておく必要があります。
- *userid* および *password* の値は、この 2 つが認証されるシステムで有効なものでなければなりません。デフォルトでは、認証はサーバー上で実行されます。サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルで指定されている認証パラメーターから、認証が判別されます。クライアントで構成された認証が、サーバーで構成された認証と不一致、または互換性がない場合は、エラーを受け取ります。
- DB2COMM で定義された正しいプロトコルによってデータベース・マネージャーが開始済みでなければなりません。まだ開始されていない場合には、データベース・サーバーで **db2start** コマンドを入力すると、データベース・マネージャーを開始できます。

手順:

クライアントからサーバーへの接続をテストするには、

1. UNIX プラットフォームで DB2 を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

2. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
3. クライアント側で次のコマンドを入力して、リモート・データベースに接続します。

```
db2 => connect to database_alias user userid
```

例えば、次のコマンドを入力します。

```
connect to mysample user jtris
```

パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。

接続が正常に完了したら、接続先のデータベースの名前を示したメッセージが表示されます。下記のようなメッセージが表示されます。

```
Database Connection Information
Database server = DB2/NT 8.1.0
SQL authorization ID = JTRIS
Local database alias = mysample
```

これで、データベースを使用できるようになります。例えば、システム・カタログ表にリストされているすべての表名のリストを取り出したい場合、次のような SQL ステートメントを入力します。

```
select tabname from syscat.tables
```

db2 terminate コマンドの後で SQL ステートメントを発行すると、暗黙接続となります。デフォルト・データベースを定義するには、**db2set db2dbdft = <dbname>** コマンドを実行します。このコマンドを実行した後、データベースに接続せずに、例えば **db2 select * from <table>** コマンドを実行します。このコマンドは、**db2dbdft** で定義されている値を使用します。デフォルト以外のデータベースに接続するには、**CONNECT** コマンドを使用して、選択したデータベースに明示的に接続しなければなりません。

データベース接続の使用が終了したら、**connect reset** コマンドを入力してデータベース接続を終了します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

第 4 章 DB2 サーバー通信の構成

コントロール・センターを使用した DB2 サーバー通信の構成

リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成

ここでは、コントロール・センターを使用して DB2 サーバー上のリモート・インスタンスのための通信プロトコルを構成する方法について説明します。DB2 サーバーがリモート DB2 クライアントからのインバウンド要求を受け入れるようにするには、その DB2 サーバー上に通信プロトコルを構成する必要があります。

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする場合には、ほとんどのプロトコルが自動的に検出および構成されます。この作業は、次の場合に実行します。

- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする際に、検出された通信プロトコルの選択を解除した場合。
- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップした後に、ネットワークに通信プロトコルを追加した場合。
- DB2 セットアップ・ウィザードによって検出できなかった通信プロトコルを使用している場合。
- UNIX ベースのシステムで、オペレーティング・システムのネイティブ・インストール・ツール・ツールを使用して DB2 を手動でインストールした場合。

制約事項:

以下の制限があります。

- コントロール・センターを使用してパーティション DB2 サーバーの通信プロトコルを構成することはできません。
- あるインスタンスの通信プロトコルの設定値を変更すると、クライアント側のデータベース接続カタログの更新 (クライアント・サーバー通信の再構成) が必要になる場合があります。

手順:

リモート・インスタンス用に DB2 通信を構成するには、以下のステップを実行します。

1. コントロール・センターを立ち上げます。
2. 必要なりモート・インスタンスを含むシステムがリストされたら、システム名の横の **[+]** 符号をクリックし、「インスタンス (Instances)」フォルダーに移動します。「インスタンス (Instances)」フォルダーの横の **[+]** をクリックし、システムのインスタンスのリストを表示します。その後、ステップ 13 へ進んでください。必要なりモート・インスタンスを含むシステムがリストされても、そのシステムの下に必要なインスタンスが表示されない場合、ステップ 8 へ進んでください。

3. 構成するリモート・インスタンスを含むシステムがリストされない場合、「システム (Systems)」フォルダーを選択し、右マウス・ボタンをクリックして「追加 (Add)」オプションを選択します。「システムの追加 (Add System)」ウィンドウが表示されます。
 4. コントロール・センターへシステムを追加するには、以下を実行します。
 - システム名が空なら、「発見 (Discover)」をクリックします。ネットワーク上の TCP/IP システムのリストが表示されます。システムを選択し、「OK」を押します。「システムの追加 (Add System)」ウィンドウにシステム情報が入れられます。
 - システム名が入力されている場合には、「発見 (Discover)」をクリックします。既知の発見が呼び出されます。それが正常に実行されたら、「システムの追加 (Add System)」ウィンドウにシステム情報が入れられます。
- 注: ディスカバリーが動作するのは、リモート TCP/IP システムのみです。
5. 「適用 (Apply)」をクリックし、「コントロール・センター (Control Center)」ウィンドウにシステムを追加します。
 6. 「閉じる」をクリックします。
 7. 追加したばかりのシステム名の横の **[+]** 符号をクリックし、「インスタンス (Instances)」フォルダーに移動します。
 8. 新しいシステムの「インスタンス (Instances)」フォルダーを選択し、右マウス・ボタンをクリックをクリックします。
 9. 「追加 (Add)」オプションを選択します。「インスタンスの追加 (Add Instance)」ウィンドウがオープンします。
 10. 「発見 (Discover)」をクリックします。システム上のリモート・インスタンスのリストを表示するために有効なインスタンスのリストが表示されます。
 11. 追加するインスタンスを選択し、「OK」をクリックします。「インスタンスの追加 (Add Instance)」ウィンドウに、リモート・インスタンス情報が入れられます。
 12. 「閉じる」をクリックします。
 13. 構成するインスタンスを選択し、右マウス・ボタンをクリックします。
 14. ポップアップ・メニューから、「通信の設定 (Setup communications)」オプションを選択します。「通信の設定 (Setup Communications)」ウィンドウがオープンします。
 15. 「通信の設定 (Setup Communications)」ウィンドウを使用して、インスタンスの通信プロトコルを構成します。詳細については、「ヘルプ (Help)」ボタンをクリックしてください。
 16. これらの変更内容を有効にするには、インスタンスを停止してから開始します。
 - a. インスタンスを停止するには、そのインスタンスを選択し、右マウス・ボタンをクリックして、「停止 (Stop)」オプションを選択します。
 - b. インスタンスを開始するには、そのインスタンスを選択し、右マウス・ボタンをクリックして、「開始 (Start)」オプションを選択します。

関連タスク:

- 39 ページの『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』

- 45 ページの『DB2 インスタンスの NetBIOS 通信の構成』
- 42 ページの『DB2 インスタンスの TCP/IP 通信の構成』
- 49 ページの『DB2 インスタンスの名前付きパイプ通信の構成』

関連資料:

- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成

ここでは、コントロール・センターを使用してローカル DB2 インスタンスのための通信プロトコルを構成する方法について説明します。DB2 サーバーがリモート DB2 クライアントからのインバウンド要求を受け入れるようにするには、その DB2 サーバー上に通信プロトコルを構成する必要があります。

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする場合には、ほとんどのプロトコルが自動的に検出および構成されます。この作業は、次の場合に実行します。

- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする際に、検出された通信プロトコルの選択を解除した場合。
- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップした後に、ネットワークに通信プロトコルを追加した場合。
- DB2 ウィザードによって検出できなかった通信プロトコルを使用している場合。
- UNIX ベースのシステムで、オペレーティング・システムのネイティブ・インストール・ツール・ツールを使用して DB2 を手動でインストールした場合。

通信プロトコルは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用しても構成できます。

制約事項:

以下の制限があります。

- コントロール・センターを使用してパーティション DB2 サーバーの通信プロトコルを構成することはできません。
- あるインスタンスの通信プロトコルの設定値を変更すると、クライアント側のデータベース接続カタログの更新 (クライアント・サーバー通信の再構成) が必要になる場合があります。

手順:

ローカル・インスタンス用に通信を構成するには、以下のステップを実行します。

1. コントロール・センターを立ち上げます。
2. システムの名前の横の **[+]** をクリックし、インスタンスのフォルダーに移動します。
3. 「データベース (Databases)」または「ゲートウェイ接続 (Gateway Connections)」フォルダーを選択し、「インスタンス (Instances)」フォルダーの横の **[+]** をクリックして、特定システムのインスタンスのリストを表示します。
4. 構成するインスタンスを選択し、右マウス・ボタンをクリックします。

5. ポップアップ・メニューから、「通信の設定 (Setup communications)」オプションを選択します。「通信の設定 (Setup communications)」ウィンドウがオープンします。
6. 「通信の設定 (Setup communications)」ウィンドウを使用して、選択したインスタンスの通信プロトコルを構成します。「ヘルプ (Help)」をクリックするか、**F1** キーを押すとオンライン・ヘルプを呼び出すことができます。
7. これらの変更内容を有効にするには、インスタンスを停止してから開始します。
 - a. データベース・マネージャーのインスタンスを停止するには、そのインスタンスを選択し、右マウス・ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから「停止 (Stop)」オプションを選択します。
 - b. データベース・マネージャーのインスタンスを開始するには、そのインスタンスを選択し、右マウス・ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから「開始 (Start)」オプションを選択します。

関連タスク:

- 37 ページの『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 45 ページの『DB2 インスタンスの NetBIOS 通信の構成』
- 42 ページの『DB2 インスタンスの TCP/IP 通信の構成』
- 49 ページの『DB2 インスタンスの名前付きパイプ通信の構成』

関連資料:

- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

コントロール・センターを使用した DB2 サーバー通信の構成

コントロール・センターとは、DB2[®] データベースを管理するとき使用する、グラフィック・ツールのことです。コントロール・センターの通信設定機能を使用すると、サーバー・インスタンスで使用するようになるプロトコルや構成パラメーターを表示できます。さらに、構成したプロトコルのパラメーター値を変更するだけでなく、プロトコルを追加したり削除することも可能になります。

サーバー・システムへ新しいプロトコルのサポートを追加する場合、通信設定機能は、新しいプロトコル用のサーバー・インスタンス・パラメーター値を検出して生成します。使用する前に、これらの値を受け入れるか変更することができます。サーバー・システムから既存のプロトコルのサポートを除去する場合、通信設定機能は、削除されたプロトコルを検出し、サーバー・インスタンスによって使われることがないようにします。

検出されていないプロトコルを追加することもできますが、先に進む前に、必要なすべてのパラメーター値を指定する必要があります。

サーバー・システム上で Administration Server が稼働している場合には、通信設定機能を使用して、ローカルおよびリモート・サーバー・インスタンス両方の通信を保守することができます。

すでに構成されているインスタンスの通信設定を変更すると、クライアントのデータベース接続カタログを更新しなければならない場合があります。その場合、次のようにします。

- クライアントで構成アシスタントを使用します。変更するデータベース接続を選択します。「**選択済み (Selected)**」メニューで、「**データベースの変更 (Change database)**」を選択します。これで表示されるウィザードで、変更作業を実行できます。
- サーバーで変更した値に応じ、クライアント上でコマンド行プロセッサを使用して、ノードをアンカタログおよび再カタログします。

関連タスク:

- 37 ページの『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 39 ページの『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』

関連資料:

- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

コマンド行プロセッサを使用した DB2 サーバー通信の構成

DB2 インスタンスの通信プロトコルの設定

DB2 インスタンスの通信プロトコルの設定は、次のメインタスクの一部です。

- DB2 インスタンスの NetBIOS 通信の構成
- DB2 インスタンスの名前付きパイプ通信の構成
- DB2 インスタンスの TCP/IP 通信の構成

現在の DB2 インスタンスの通信プロトコルは、DB2COMM レジストリー変数によって設定します。DB2COMM レジストリー変数を定義していないか NULL に設定されている場合、データベース・マネージャーの始動時にプロトコル接続管理機能は開始しません。

DB2COMM には、以下のキーワードの任意の組み合わせをコンマで区切って指定できます。

netbios

NetBIOS サポートを開始する

npipe

名前付きパイプ (NAMED PIPE) サポートを開始する

tcPIP TCP/IP サポートを開始する

前提条件:

sysadm 権限が必要です。

手順:

インスタンスのための通信プロトコルを設定するには、

- DB2 コマンド・ウィンドウで、**db2set DB2COMM** コマンドを入力します。

```
db2set DB2COMM=protocol_names
```

例えば、データベース・マネージャーが名前付きパイプおよび TCP/IP 通信プロトコルで接続管理機能を開始するよう設定するには、次のようなコマンドを入力します。

```
db2set DB2COMM=npipe,tcpip
db2stop
db2start
```

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』
- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

DB2 サーバー通信の構成 (TCP/IP)

DB2 インスタンスの TCP/IP 通信の構成

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、クライアント上で TCP/IP 通信を構成する方法について説明します。DB2 サーバーがリモート DB2 クライアントからのインバウンド要求を受け入れるようにするには、その DB2 サーバー上に通信プロトコルを構成する必要があります。

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする場合には、ほとんどのプロトコルが自動的に検出および構成されます。この作業は、次の場合に実行します。

- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする際に、TCP/IP 通信プロトコルの選択を解除した場合。
- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップした後、ネットワークに TCP/IP 通信プロトコルを追加した場合。
- DB2 セットアップ・ウィザードによって TCP/IP 通信が検出されなかった場合。
- UNIX ベースのシステムで、オペレーティング・システムのネイティブ・インストール・ツール・ツールを使用して DB2 を手動でインストールした場合。

前提条件:

DB2 インスタンスのために TCP/IP 通信を構成する前に、

- その DB2 サーバーで TCP/IP が機能していることを確認してください。接続を確立するために、DB2 クライアント上でも TCP/IP が機能していなければなりません。
- 接続サービス名と接続ポートの 2 つ、または接続ポートのみを確認してください。

接続サービス名と接続ポート

接続サービス名は、サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルで、サービス名 (*svccname*) パラメーターを更新するときに使用されます。接続サービス名を指定する場合、その同じサービス名、ポート番号、およびプロトコルにより、サービス・ファイルを更新する必要があります。サービス名には任意の名前を指定できますが、サービス・ファイル内

で一意でなければなりません。サービス名としては、例えば `server1` を使用できます。DB2 Enterprise Server Edition を使用している場合は、ポート番号が、高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) で使用しているポート番号と競合しないことを確認してください。接続ポートは、サービス・ファイル内で一意なものでなければなりません。ポート番号とプロトコルには、例えば `3700/tcp` を使用できます。

接続ポート

サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルの中のサービス名 (`svccname`) パラメーターは、そのポート番号を更新できます。その場合、サービス・ファイルの更新は不要です。DB2 Enterprise Server Edition を使用している場合は、ポート番号が、高速コミュニケーション・マネージャー (FCM) またはそのシステム上の他のアプリケーションで使用しているポート番号と競合しないことを確認してください。ポート番号には、例えば `3700` を使用できます。

手順:

DB2 インスタンスのために TCP/IP 通信を構成するには、

1. サーバー上のサービス・ファイルを更新します。
2. サーバー上でデータベース・マネージャーの構成ファイルを更新します。
3. 通信プロトコルを設定します。

関連タスク:

- 44 ページの『TCP/IP 通信のためのサーバー上のサービス・ファイルの更新』
- 43 ページの『TCP/IP 通信のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新』
- 41 ページの『DB2 インスタンスの通信プロトコルの設定』
- 37 ページの『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 39 ページの『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』

関連資料:

- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

TCP/IP 通信のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新

このタスクは、DB2 インスタンスのための TCP/IP 通信の構成 のメインタスクの一部です。

データベース・マネージャー構成ファイルを、サービス名 (`svccname`) パラメーターを使用して更新する必要があります。

手順:

データベース・マネージャーの構成ファイルを更新するには、

1. システム管理 (SYSADM) 権限をもったユーザーとしてシステムにログオンします。
2. UNIX サーバーを使用している場合には、下記のようにしてインスタンス環境をセットアップします。

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile (Bash、 Bourne、 または Korn シェルの場合)
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc (C シェルの場合)
```

3. DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を起動します。
4. 以下のコマンドを入力して、データベース・マネージャー構成ファイルを、サービス名 (*svcname*) パラメーターを使用して更新します。

```
update database manager configuration using svcname
[service_name|port_number]
db2stop
db2start
```

サービス名を指定する場合、使用する *svcname* は、サービス・ファイルで指定されている接続サービス名と一致している必要があります。

例えば、サービス・ファイルの接続サービス名を、 *server1* として入力した場合、以下のコマンドを入力します。

```
update database manager configuration using svcname server1|3100
db2stop
db2start
```

データベース・マネージャーの停止および再始動後に、データベース・マネージャー構成ファイルを表示して、これらの変更が有効になっていることを確認してください。データベース・マネージャー構成ファイルを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
get database manager configuration
```

関連資料:

- ・ 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- ・ 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』

TCP/IP 通信のためのサーバー上のサービス・ファイルの更新

このタスクは、DB2 インスタンスのための TCP/IP 通信の構成のメインタスクの一部です。

TCP/IP サービス・ファイルは、サーバー・アプリケーションがクライアント要求を受け取る際のポートを指定します。DBM 構成ファイルの *svcname* フィールドにサービス名を指定した場合、そのサービス名からポート番号/プロトコルへのマッピングによってサービス・ファイルを更新する必要があります。DBM 構成ファイルの *svcname* フィールドにポート番号を指定した場合、サービス・ファイルの更新は不要です。

サービス・ファイルを更新し、サーバーが着信クライアント要求を受け取るポートを指定します。サービス・ファイルのデフォルトの位置は、オペレーティング・システムによって異なります。

UNIX /etc

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003

%SystemRoot%\system32\drivers\etc

Windows 98 および Windows ME

%windows

前提条件:

ネットワーク上でネットワーク情報サービス (NIS) を使用する場合 (UNIX サーバーの場合のみ)、マスター・サーバーにあるサービス・ファイルを更新しなければなりません。

手順:

テキスト・エディターを使用して、サービス・ファイルに接続 (Connection) の項目を追加します。例えば、

```
server1 3700/tcp # DB2 connection service port
```

ここで、

server1

接続サービス名を表します。

3700 接続ポート番号を表します。

tcp 使用している通信プロトコルを表します。

関連タスク:

- 47 ページの『DB2 インスタンス起動時に起動するように NetBIOS を構成する (Windows NT)』
- 43 ページの『TCP/IP 通信のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新』

DB2 サーバー通信の構成 (NetBIOS)

DB2 インスタンスの NetBIOS 通信の構成

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、DB2 インスタンスのための NetBIOS 通信を構成する方法について説明します。DB2 サーバーがリモート DB2 クライアントからのインバウンド要求を受け入れるようにするには、その DB2 サーバー上に通信プロトコルを構成する必要があります。

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする場合には、ほとんどのプロトコルが自動的に検出および構成されます。この作業は、次の場合に実行します。

- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップする際に、NetBIOS 通信プロトコルの選択を解除した場合。
- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 をセットアップした後、ネットワークに NetBIOS 通信プロトコルを追加した場合。
- DB2 セットアップ・ウィザードによって NetBIOS が検出されなかった場合。

前提条件:

DB2 クライアントと DB2 サーバーの間の NetBIOS 接続を構成するには、下記のことを確認してください。

- サーバー・マシン上で NetBIOS が機能していること。
- 下記のパラメーター値を確認してください。

アダプター番号 (adapter_number)

NetBIOS 接続に使われるローカル論理アダプター。このパラメーターを構成しないと、サーバーはアダプター 0 を使用します。

ワークステーション名 (nname)

サーバー・ワークステーションの NetBIOS 名。nname はユーザーが選択した名前です。この名前はネットワーク内のすべての NetBIOS ノードの中で一意でなければなりません。DB2 Enterprise Server Edition をパーティション構成で使用している場合、最後の 4 文字が、ネットワーク内のすべての NetBIOS ノードの中で一意であることを確認してください。

手順:

DB2 インスタンスのために NetBIOS 通信を構成するには、

1. インスタンスの通信プロトコルを設定します。
2. サーバー上で NetBIOS インターフェースを構成します。
3. サーバー上でデータベース・マネージャーの構成ファイルを更新します。
4. (Windows NT のみ) DB2 インスタンス起動時に自動開始するよう NetBIOS を構成します。

関連タスク:

- 41 ページの『DB2 インスタンスの通信プロトコルの設定』
- 46 ページの『DB2 サーバーでの通信セットアップのための NetBIOS インターフェースの構成』
- 48 ページの『NetBIOS のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新』
- 47 ページの『DB2 インスタンス起動時に起動するように NetBIOS を構成する (Windows NT)』
- 37 ページの『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 39 ページの『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』

関連資料:

- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

DB2 サーバーでの通信セットアップのための NetBIOS インターフェースの構成

このタスクは、DB2 インスタンスのための NetBIOS の構成 のメインタスクの一部です。

前提条件:

DB2 は、レジストリー・パラメーターを使用して、サーバー上での NetBIOS リソースの使用状況を制御します。論理アダプター番号としてデフォルト (0) 以外の値を指定する場合は、db2nbadapters レジストリー・パラメーターを使用する必要があります。db2nbadapters パラメーターを設定するには、**db2set db2nbadapters=adapter_number** コマンドを入力します。adapter_number には、複数のアダプター番号をコンマで区切ったリストを指定することも可能です。

手順:

サーバーにおいてアダプター番号として使用できる値を判別するには、

1. Windows の「コントロール パネル」を開きます。
2. 「ネットワーク」アイコンをダブルクリックし、「サービス」タブを選びます。
3. 「ネットワーク サービス (Network Services)」ウィンドウで「**NetBIOS インターフェイス (NetBIOS Interface)**」アイコンを選択し、「**プロパティ (Properties)**」ボタンをクリックします。
4. 論理アダプター番号が見つかるまでネットワーク経路をスクロールし、それをワークシートに記録します。このアダプター番号を変更したくない場合は、ステップ 7 に進んでください。
5. 論理アダプター番号を変更するには、対応する LAN 番号を選択してから、「**編集 (Edit)**」ボタンをクリックします。新しいアダプター番号 (または db2nbadapters レジストリー変数に設定する値) を入力します。
6. 新しいアダプター番号をワークシートに記録します。
7. 「**OK**」をクリックします。
8. 「閉じる」をクリックします。「ネットワーク設定の変更 (Network Settings Change)」ウィンドウがオープンします。
9. システムをシャットダウンしてからリブートし、これらの変更内容を有効にします。すぐにシステムをシャットダウンしてリブートする場合は、「**はい (Yes)**」ボタンを選択します。後でシステムをシャットダウンしてリブートする場合は、「**いいえ (No)**」ボタンを選択します。

各アダプター番号は、ネットワーク経路に関連付けられた固有番号でなければなりません。Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003 には、別々のネットワーク経路に同じアダプター番号を指定させないための検査機能が備わっています。アダプター番号 0 を使用するネットワーク経路がすでに存在する場合、その経路に別の番号を割り当てます。「**OK**」をクリックして変更内容を承認します。

DB2 インスタンスのための NetBIOS 通信の構成での次のステップは、データベース・マネージャー構成ファイルの更新です。

関連タスク:

- 48 ページの『NetBIOS のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

DB2 インスタンス起動時に起動するように NetBIOS を構成する (Windows NT)

このタスクは、DB2 インスタンスのための NetBIOS 通信の構成 のメインタスクの一部です。

サーバー (または DB2 Enterprise Server Edition のインスタンス所有マシン) のインストール時に、NetBIOS プロトコルを構成した場合、セットアップ・プログラムにより、サーバーのために NetBIOS 従属関係が自動的に作成されます。新しいインス

タンスに対して、NetBIOS での従属関係を手動で作成するには、ここで示す手順を実行する必要があります。この従属関係により、DB2 インスタンスの起動時に NetBIOS が起動するようになります。

手順:

DB2 インスタンスの起動時に NetBIOS が起動するように構成するには、

1. `x:\Program Files\IBM\SQLLIB\bin` ディレクトリーに移動します (x: はサーバーのインストール先ドライブ)。
2. **db2depnb** コマンドを次のように入力します。

```
db2depnb instance_name
```

instance_name は、従属関係を作成するときのインスタンス名です。

ここでは、従属関係が始動順に記録されるので、NetBIOS は DB2 インスタンスの始動前に始動します。

ネットワークから NetBIOS プロトコルを除去する場合、インストール時に作成した従属関係、そして他のインスタンスのために作成した従属関係があれば、それらも除去する必要があります。これらの従属関係の除去に失敗すると、ネットワークから NetBIOS プロトコルを除去した後で DB2 を実行するときに、問題が生じる可能性があります。

従属関係を除去するには、**db2depnb** コマンドを次のように入力します。

```
db2depnb instance_name /r
```

instance_name は、従属関係を除去するときのインスタンス名です。

関連タスク:

- 46 ページの『DB2 サーバーでの通信セットアップのための NetBIOS インターフェースの構成』
- 48 ページの『NetBIOS のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新』

NetBIOS のためのサーバー上のデータベース・マネージャー構成ファイルの更新

このタスクは、DB2 インスタンスのための NetBIOS 通信の構成のメインタスクの一部です。

ここでは、コマンド行プロセッサー (CLP) を使用して、サーバーのワークステーション名 (*nname*) によりデータベース・マネージャー構成ファイルを更新する手順について説明します。

前提条件:

システム管理 (SYSADM) 権限が必要です。

手順:

データベース・マネージャーの構成ファイルを更新するには、

1. システムにログオンします。
2. コマンド行プロセッサに以下のコマンドを発行して、サーバーのワークステーション名 (*nname*) でデータベース・マネージャー構成ファイルを更新します。

```
update database manager configuration using nname nname
db2stop
db2start
```

例えば、サーバーのワークステーション名 (*nname*) が `server1` の場合には、次のようにします。

```
update database manager configuration using nname server1
db2stop
db2start
```

データベース・マネージャーの停止および再始動後に、データベース・マネージャー構成ファイルを表示して、これらの変更が有効になっていることを確認してください。データベース・マネージャー構成ファイルを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
get database manager configuration
```

次に示す、DB2 インスタンスに対する NetBIOS 通信の構成時のステップを実行すると、DB2 インスタンス起動時に NetBIOS が自動起動するように構成されます。このステップはオプションであり、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、または Windows Server 2003 の場合のみ実行します。

関連タスク:

- 46 ページの『DB2 サーバーでの通信セットアップのための NetBIOS インターフェースの構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』

DB2 サーバー通信の構成 (名前付きパイプ)

DB2 インスタンスの名前付きパイプ通信の構成

ここでは、CLP を使用して DB2 インスタンスのための名前付きパイプを構成する方法について説明します。

前提条件:

DB2 インスタンスの名前付きパイプを構成する前に、

- サーバー上で名前付きパイプが機能していなければなりません。接続を構成するには、DB2 クライアント上でも名前付きパイプが機能していなければなりません。

手順:

DB2 インスタンスの名前付きパイプを構成するには、DB2COMM レジストリー変数を設定します。

関連タスク:

- 37 ページの『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 39 ページの『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』

関連資料:

- 11 ページの『クライアント・サーバー通信のシナリオ』

第 2 部 応答ファイルによるインストール

第 5 章 応答ファイル

応答ファイルによるインストールの基礎

DB2® 応答ファイル・インストールは、DB2 セットアップ・ウィザードとは異なり、ユーザーが入力しなくても DB2 をインストールできます。この方式は、DB2 の大規模配置の場合だけでなく、カスタマイズ・インストールと構成の手順に DB2 インストール・プロセスを透過的に組み込む場合にも便利です。応答ファイル・インストールは、ユーザー生成の応答ファイルを使用した DB2 セットアップで実行されます。

応答ファイルは、セットアップ情報および構成情報を入れた ASCII テキスト・ファイルです。このファイルは、DB2 ユーティリティを使用するか、または手動で編集して生成できます。対話式のインストールでは、セットアップ・データと構成データを入力しなければなりません。応答ファイルを使用すると、何の介入もなくインストールを実行することができます。

応答ファイルは、宛先ディレクトリー (Windows のみ)、インストールする製品、およびコンポーネントなどの構成パラメーターとセットアップ・パラメーターを指定します。応答ファイルは次のような目的で使用することもできます。

- インスタンスを作成する
- グローバル DB2 レジストリー変数をセットアップする
- インスタンス変数をセットアップする
- インスタンス・データベース・マネージャー構成設定値をセットアップする

応答ファイルを作成するには、次の方法があります。

- 付属のサンプル応答ファイルを変更する。
- 応答ファイル生成プログラムを使用する (Windows のみ)。
- DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、セットアップおよび構成のデータを保管する。

関連概念:

- 66 ページの『応答ファイル生成プログラムについて (Windows)』

関連資料:

- 73 ページの『使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX)』
- 74 ページの『応答ファイルのキーワード (Windows および UNIX)』
- 78 ページの『DB2 コントロール・サーバーの応答ファイルのキーワード (Windows)』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

応答ファイルに関する考慮事項

応答ファイル・インストールを実行する前に、以下の考慮事項を知っておく必要があります。

- 応答ファイルのフォーマットは DB2[®] バージョン 7 から DB2 バージョン 8 の間に変更されました。その結果、応答ファイルの使用可能範囲について、バージョンの制限があります。例えば、DB2 バージョン 8 で生成された応答ファイルは、DB2 バージョン 8.1 のインストールだけに使用可能で、DB2 バージョン 7 のインストールには使用できません。その逆も同様で、DB2 バージョン 7 で生成された応答ファイルは DB2 バージョン 8 のインストールには使用できません。
- インストール中に、「DB2 セットアップ」ウィザードの「**インストール・アクションの選択 (Select the installation action)**」パネルで、応答ファイル中にご使用の設定を保管できます。このオプションは、カスタム・インストールの場合のみ使用できます。
- インストール・プロセスを完了できる場合のみ、インストール中に生成された応答ファイルを使用できます。インストールを取り消した場合や、インストールが失敗した場合は、応答ファイルは作成されません。
- 応答ファイル生成プログラムを使用する場合 (Windows のみ) には、既存のインストール内容に基づいて応答ファイルを作成することになります。手動で構成したなどの理由で構成が比較的複雑な場合には、この方式をお勧めします。
- DB2 セットアップ・ウィザードを使用する場合は、現在実行中のインストール内容に基づいて応答ファイルを作成することになります。構成が比較的単純な場合や、作成した応答ファイルを後でカスタマイズするつमりの場合は、この方法をお勧めします。
- 応答ファイルを使用すると、ネットワーク上のすべてのワークステーションで同じ構成をインストールしたり、DB2 製品の複数の構成をインストールしたりできます。その後、この製品をインストールする各ワークステーションに、そのファイルを配布できます。

関連概念:

- 53 ページの『応答ファイルによるインストールの基礎』

関連タスク:

- 87 ページの『Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 製品のインストール』
- 69 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)』
- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードによる応答ファイルの作成

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、実行中のインストール内容に基づいて応答ファイルを作成できます。この応答ファイルは、DB2 セットアップ・ウィザードの選択項目に基づいて生成されます。次に、その応答ファイルを使用して、同じ設定の無人インストールを実行できます。

前提条件:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して応答ファイルを作成できるのは、カスタム・インストールを実行している場合に限りです。

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して応答ファイルを作成するには、次のようになります。

1. 「DB2 ランチパッド (DB2 Launchpad)」から、「製品のインストール (**Install Product**)」を選択します。
2. インストールしたい製品を選択し、「次へ (**Next**)」をクリックして、「DB2 セットアップ」ウィザードを起動します。
3. 「次へ (**Next**)」をクリックします。
4. 「インストール・タイプの選択 (**Select the installation type**)」ウィンドウで、「カスタム」オプションを選択します。
5. 「インストール・アクションの選択 (**Select the installation action**)」ウィンドウで、「ご使用の設定を応答ファイル中に保管 (**Save your setting in a response file**)」オプションを選択します。
6. ご希望のオプションを選択して、残りのインストール・パネルをすべて実行します。
7. 「ファイルのコピーを開始して応答ファイルを作成する (**Start copying files and create response file**)」ウィンドウの、「応答ファイル名 (**Response file name**)」フィールドに、DB2 セットアップ・ウィザードが生成済みの応答を入れるパスを入力します。
8. 「完了 (**Finish**)」をクリックしてインストールします。
9. インストールが完了すると、DB2 セットアップ・ウィザードによって、生成済みの応答ファイルが指定したパスの中に入れられます。

例えば、英語、アラビア語、日本語、ロシア語、および中国語 (繁体字) 版の DB2 Run-Time Client をインストールした場合は、以下のような応答ファイルが生成されます。

```
PROD=RUNTIME_CLIENT
LIC_AGREEMENT=ACCEPT
FILE=C:\Program Files\IBM\SQLLIB\
INSTALL_TYPE=CUSTOM
```

```
COMP=BASE_CLIENT
COMP=SYSTEM_BIND_FILES
COMP=CLIENT_TOOLS
COMP=JDBC_SUPPORT
COMP=LDAP_EXPLOITATION
COMP=MDAC
COMP=ODBC_SUPPORT
COMP=OLE_DB_SUPPORT
COMP=SQLJ_SUPPORT
COMP=APPC_DB2_CLIENT_SUPPORT
COMP=NETBIOS_DB2_CLIENT_SUPPORT
COMP=NPIPE_DB2_CLIENT_SUPPORT
COMP=TCPIP_DB2_CLIENT_SUPPORT
```

```
LANG=EN
LANG=AR
LANG=JP
```

```
LANG=RU
LANG=TW
```

```
INSTANCE=DB2
DB2.NAME=DB2
DEFAULT_INSTANCE=DB2
DB2.TYPE=CLIENT
DB2_USERSGROUP_NAME=DB2USERS
DB2_ADMININGROUP_NAME=DB2ADMNS
```

DB2 Run-Time Client のサンプル応答ファイルを以下に示します。

```
* Sample response file for IBM DB2 Run-Time Client
* -----
*
* Comments are made by placing either a * or a # at the start of a line, or by
* placing ** or ## after the start of a line to comment out the rest of that
* line.
*
* For descriptions of DB2 registry variables, please see Appendix A in the
* "Administration Guide: Performance".
*
* For descriptions of configuration parameters, please see Chapter 13 in the
* "Administration Guide: Performance".
*
* For introduction of performing a response file installation, please see
* Chapter 6 in the "DB2 Installation and Configuration Supplement".
*
* Do not uncomment selected components (the COMP keywords) unless you change
* the INSTALL_TYPE to CUSTOM.
* =====
```

```
* General Options
* -----
```

```
PROD = RUNTIME_CLIENT
*LIC_AGREEMENT = DECLINE or ACCEPT (default=DECLINE)
*FILE = C:¥Program Files¥IBM¥SQLLIB
*INSTALL_TYPE = TYPICAL, COMPACT, or CUSTOM (default=TYPICAL)
*LANG = AR (default=Operating System Language)
*LANG = BG (default=Operating System Language)
*LANG = BR (default=Operating System Language)
*LANG = CN (default=Operating System Language)
*LANG = CZ (default=Operating System Language)
*LANG = DE (default=Operating System Language)
*LANG = DK (default=Operating System Language)
*LANG = FI (default=Operating System Language)
*LANG = FR (default=Operating System Language)
*LANG = EL (default=Operating System Language)
*LANG = EN (default=Operating System Language)
*LANG = ES (default=Operating System Language)
*LANG = HR (default=Operating System Language)
*LANG = HU (default=Operating System Language)
*LANG = IW (default=Operating System Language)
*LANG = IT (default=Operating System Language)
*LANG = JP (default=Operating System Language)
*LANG = KR (default=Operating System Language)
*LANG = NL (default=Operating System Language)
*LANG = NO (default=Operating System Language)
*LANG = PL (default=Operating System Language)
*LANG = PT (default=Operating System Language)
*LANG = RO (default=Operating System Language)
*LANG = RU (default=Operating System Language)
*LANG = SE (default=Operating System Language)
*LANG = SL (default=Operating System Language)
*LANG = SK (default=Operating System Language)
*LANG = TR (default=Operating System Language)
```

```

*LANG = TW (default=Operating System Language)
*COMP = SYSTEM_BIND_FILES
*COMP = MDAC
*COMP = ODBC_SUPPORT
*COMP = OLE_DB_SUPPORT
*COMP = JDBC_SUPPORT
*COMP = SQLJ_SUPPORT
*COMP = LDAP_EXPLOITATION
*COMP = CLIENT_TOOLS
*COMP = TCPIP_DB2_CLIENT_SUPPORT
*COMP = NETBIOS_DB2_CLIENT_SUPPORT
*COMP = NPIPE_DB2_CLIENT_SUPPORT
*COMP = APPC_DB2_CLIENT_SUPPORT
*COMP = COMMAND_CENTER
*CREATE_ICONS = YES or NO (default=YES)
*AUTOSTART_CONFIG_ASSISTANT = YES or NO (default=NO)
*REBOOT = YES or NO (default=NO)
*KILL_PROCESSES = YES or NO (default=NO)

```

* Global DB2 Registry Variables

```

* -----
*DB2ACCOUNT = BLANK or char(199)
*DB2BQTIME = BLANK or 1 - MAX
*DB2BQTRY = BLANK or 0 - MAX
*DB2CHKPTR = BLANK, ON or OFF
*DB2CLIINIPATH = BLANK or char(260)
*DB2CODEPAGE = BLANK or 0 - MAX
*DB2COUNTRY = BLANK or 1 - 999
*DB2DBDFT = BLANK or char(8)
*DB2DEFPREP = BLANK, ALL, YES or NO
*DB2DISCOVERYTIME = BLANK or 20 - MAX
*DB2DMNBCKCTLR = BLANK, ? or char()
*DB2_ENABLE_LDAP = BLANK, YES or NO
*DB2IQTIME = BLANK or 1 - MAX
*DB2JD_PORT_NUMBER = BLANK or 1024-65536
*DB2JVIEW = BLANK, ON or OFF
*DB2LDAPHOST = BLANK or host name
*DB2LDAP_BASEDN = BLANK or char()
*DB2LDAPCACHE = BLANK or char()
*DB2LDAP_CLIENT_PROVIDER = BLANK, MICROSOFT or IBM
*DB2LOCK_TO_RB = BLANK or STATEMENT
*DB2NBDISCOVERRCVBUFS = BLANK or 16 - MAX
*DB2NOEXITLIST = BLANK, ON or OFF
*DB2OPTIONS = BLANK or char(): -/[a,c,e[c|s],n,o,p,s,t,v,w,x]
* and/or -[f,l,r,z]filename
*DB2RQTIME = BLANK or 1 - MAX
*DB2SORCVBUF = BLANK or 1024-65536
*DB2SOSNDBUF = BLANK or 1024-65536
*DB2_GRP_LOOKUP = BLANK or char()

```

* General information for instance to be created

```

* -----
INSTANCE = DB2
DEFAULT_INSTANCE = DB2
DB2.NAME = DB2
*DB2.TYPE = CLIENT

```

* Default Instance Client Import Profile file

```

* -----
*DB2.CLIENT_IMPORT_PROFILE = filename

```

* Default Instance DBM CFG settings

```

* -----
*DB2.AUTHENTICATION          = CLIENT, DCS, DCS_ENCRYPT, SERVER, SERVER_ENCRYPT,
*                             KERBEROS(Windows 2000 only) or
*                             KRB_SERVER_ENCRYPT(Windows 2000 only)
*DB2.CATALOG_NOAUTH          = YES or NO
*DB2.DFT_CLIENT_COMM         = BLANK or APPC, NETBIOS, TCPIP, NPIPE
*DB2.DIAGLEVEL                = 0 - 4
*DB2.DIAGPATH                 = BLANK or char(215)
*DB2.DIR_CACHE                = YES or NO
*DB2.DIR_OBJ_NAME             = BLANK or char(255) (length of DIR_OBJ_NAME +
*                             DIR_PATH_NAME < = 255)
*DB2.DIR_PATH_NAME            = BLANK or char(255) (length of DIR_OBJ_NAME +
*                             DIR_PATH_NAME < = 255)
*DB2.DISCOVER                 = DISABLE, KNOWN or SEARCH
*DB2.DISCOVER_COMM           = BLANK or NETBIOS, TCPIP
*DB2.DRDA_HEAP_SZ             = 16 - 60000
*DB2.NNAME                    = BLANK or char(8)
*DB2.NOTIFYLEVEL              = 0 - 4
*DB2.ROUTE_OBJ_NAME           = BLANK or char(255) (length of SQL_DIR_NAME_SZ)
*DB2.RQRIOBJLK                = 4096 - 65535
*DB2.SYSADM_GROUP             = BLANK or char(30)
*DB2.SYSCTRL_GROUP           = BLANK or char(30)
*DB2.SYSMAINT_GROUP           = BLANK or char(30)
*DB2.TM_DATABASE              = BLANK or char(8)
*DB2.TP_MON_NAME              = BLANK or char(19)

```

* Default Instance DB2 Registry Variables

```

* -----
*DB2.DB2ACCOUNT               = BLANK or char(199)
*DB2.DB2BQTIME                = BLANK or 1 - MAX
*DB2.DB2BQTRY                 = BLANK or 0 - MAX
*DB2.DB2CHKPTR                = BLANK, ON or OFF
*DB2.DB2CLIINIPATH            = BLANK or char(260)
*DB2.DB2CODEPAGE               = BLANK or 0 - MAX
*DB2.DB2COUNTRY                = BLANK or 1 - 999
*DB2.DB2DBDFT                 = BLANK or char(8)
*DB2.DB2DEFPREP                = BLANK, ALL, YES or NO
*DB2.DB2DISCOVERYTIME         = BLANK or 20 - MAX
*DB2.DB2DMNBCKCTLR            = BLANK, ? or char()
*DB2.DB2IQTIME                 = BLANK or 1 - MAX
*DB2.DB2JD_PORT_NUMBER         = BLANK or 1024-65536
*DB2.DB2JVIEW                  = BLANK, ON or OFF
*DB2.DB2LOCK_TO_RB             = BLANK or STATEMENT
*DB2.DB2NBDISCOVERRCVBUFS     = BLANK or 16 - MAX
*DB2.DB2NOEXITLIST            = BLANK, ON or OFF
*DB2.DB2OPTIONS                = BLANK or char(): -/[a,c,e[c|s],n,o,p,s,t,v,w,x]
*                             and/or -[f,l,r,z]filename
*DB2.DB2RQTIME                 = BLANK or 1 - MAX
*DB2.DB2SORCVBUF               = BLANK or 1024-65536
*DB2.DB2SOSNDBUF               = BLANK or 1024-65536
*DB2.DB2_GRP_LOOKUP            = BLANK or char()

```

* Information Center Server Information

```

* -----
* These keywords are applicable to setting up information center server information.
* DB2_DOCHOST                  = host name (default=localhost)
* DB2_DOCPORT                   = 51000 - 65535

```

* Enhanced security settings

```

* -----
* DB2_EXTSECURITY              = YES or NO (default=YES)
* DB2_USERSGROUP_NAME          = char(30) (Default=DB2USERS)
* DB2_ADMINGROUP_NAME          = char(30) (default=DB2ADMNS)

```

関連概念:

- 53 ページの『応答ファイルによるインストールの基礎』

関連タスク:

- 69 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)』
- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』

第 6 章 応答ファイル・インストール (Windows)

DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)

ここでは、Windows での応答ファイル・インストールの実行方法について説明します。

前提条件:

インストールを開始する前に、下記のことを確認してください。

- ご使用のシステムが、DB2 製品をインストールするために必要なメモリー、ハードウェア、およびソフトウェア要件をすべて満たしていること。
- インストールの実行に必要なすべてのユーザー・アカウントをもっていなければなりません。

手順:

1 台のマシンで DB2 製品の応答ファイル・インストールを実行するには、下記のようにします。

1. サンプル応答ファイルから、応答ファイルを作成してカスタマイズします。
2. カスタマイズした応答ファイルを指定して **setup -u** コマンドを実行します。例えば次のようにします。

```
setup -u my.rsp
```

複数のマシンで DB2 製品の応答ファイル・インストールを実行するには、下記のようにします。

1. DB2 ファイルをインストールのために使用可能にします。
2. ディレクトリーへの共有アクセスをセットアップします。
3. サンプル応答ファイルを使用して応答ファイルを作成します。
4. 応答ファイルを使用して、DB2 製品をインストールします。

関連タスク:

- 62 ページの『応答ファイル・インストールのために DB2 ファイルを使用可能にする(Windows)』
- 62 ページの『ディレクトリー共有アクセスのセットアップ (Windows)』
- 63 ページの『応答ファイルの作成および編集 (Windows)』
- 64 ページの『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- 87 ページの『Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 製品のインストール』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』

- 73 ページの『使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX)』

応答ファイル・インストールのために DB2 ファイルを使用可能にする (Windows)

応答ファイル・インストールのために DB2 ファイルを使用可能にするには、CD-ROM から別のドライブに必須ファイルをコピーする必要があります。

手順:

製品 CD-ROM から別のドライブに必須ファイルをコピーするには、以下のようになります。

1. 該当する DB2 製品の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. ディレクトリーを作成します (c:\db2prods など)。
3. **cpyssetup.bat** コマンドを使用して、DB2 インストール・ファイルをコピーします。このコマンドは、x:\db2\windows\utilities ディレクトリー (x: は CD-ROM ドライブ) にあります。

コマンド構文は次のとおりです。

```
cpyssetup.bat directory
```

ここで、*directory* はファイルのコピー先を示します。

関連タスク:

- 62 ページの『ディレクトリー共用アクセスのセットアップ (Windows)』

ディレクトリー共用アクセスのセットアップ (Windows)

この作業では、インストール・サーバーのディレクトリーへのアクセス権をネットワーク・ワークステーションに付与します。

手順:

インストール・サーバーのディレクトリーの共用アクセスをセットアップするには、

1. Windows エクスプローラーを開きます。
2. 共用するインストール・サーバーのディレクトリーを選択します。例えば、c:\db2prods を選びます。
3. メニュー・バーから「ファイル」→「プロパティ」を選択します。ディレクトリー用の「プロパティ」ウィンドウが表示されます。
4. 「共有」タブをクリックします。
5. 「このフォルダを共有する」ボタンを選択します。
6. 「共有名」フィールドに、共有名を入力します。例えば、db2nt と入力します。
7. 全利用者 (Everyone) に対して読み取りアクセス を指定するには、次のようにします。

- a. 「アクセス許可 (Permissions)」 プッシュボタンをクリックします。「共有許可によるアクセス (Access Through Share Permissions)」 ウィンドウが表示されます。
- b. 「名前 (Name)」 ボックスで、「全利用者 (Everyone)」 オプションを選択します。
- c. 「アクセスのタイプ (Type of Access)」 ドロップダウン・ボックスをクリックし、「読み取り (Read)」 オプションを選択します。
- d. 「OK」 をクリックします。共有アクセスを設定するディレクトリーの「プロパティ」 ウィンドウに戻ります。
- e. 「OK」 をクリックします。

関連タスク:

- 63 ページの『応答ファイルの作成および編集 (Windows)』
- 62 ページの『応答ファイル・インストールのために DB2 ファイルを使用可能にする(Windows)』

応答ファイルの作成および編集 (Windows)

ここでのトピックは、以下のシナリオのいずれかが適用されるものとします。

- すでに DB2 製品をセットアップして構成し終わっており、応答ファイル生成プログラムによって生成された応答ファイルを使用して、ネットワーク全体にそれとまったく同じ構成を配布したいというシナリオ。このシナリオを適用する場合は、このトピックをスキップしてください。
- サンプル応答ファイル (db2/windows/samples/db2exp.rsp) に基づいて応答ファイルを作成したいというシナリオ。
- DB2 セットアップ・ウィザードでご使用のインストール内容に基づいて応答ファイルを作成しており、このファイルに変更を加えたいというシナリオ。

手順:

応答ファイルを作成して編集するには、以下のようになります。

1. サンプル応答ファイルを使用する場合は、このファイルのコピーを作成してテキスト・エディターで開きます。DB2 セットアップ・ウィザードで作成した応答ファイルを使用する場合は、テキスト・エディターでこのファイルを開きます。
2. 応答ファイルをカスタマイズします。

応答ファイル内の項目を活動化するには、キーワードの左のアスタリスク (*) を削除します。次に、値の右の現在の設定値を、別の値に置き換えます。設定可能な設定値は、等号の右側にリストされています。

一部の製品の応答ファイルには、値の指定を省略できない必須キーワードがあります。必須キーワードについては、各応答ファイル内のコメントで示されています。

インストールに一意なキーワードは、応答ファイル・インストール時に応答ファイルに指定するのみです。

3. 共有ネットワーク・ドライブ上にファイルを保管し、インストール・サーバーで使用できるようにします。変更を加えた場合は、新規ファイル名でファイルを保

管し、元のサンプル応答ファイルを保存します。 CD-ROM から直接インストールしている場合は、名前変更後の応答ファイルを他のドライブに格納してください。

例えば、以下に示す応答ファイルは、 DB2 Administration Client を c:\sql11ib ディレクトリーにインストールしますが、 REBOOT およびカタログ NO AUTHORIZATION オプションは有効になっています。

注: COMP キーワードが有効なのは、 *Install_Type* が CUSTOM の場合のみです。

```
FILE                = c:\sql11ib
INSTALL_TYPE       = CUSTOM
PROD               = ADMIN_CLIENT
REBOOT             = YES
INSTANCE           = DB2
DB2.NAME           = DB2
DB2.CATALOG_NOAUTH = YES
```

DB2.CATALOG_NOAUTH=YES キーワードを指定すると、データベースのカタログに、システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限は必要ありません。 DB2.CATALOG_NOAUTH=YES は DB2 クライアントおよび DB2 Connect Personal Edition の応答ファイルではデフォルトの設定です。

DB2 製品のインストールは、ターゲット・ワークステーションにローカルなドライブでのみ実行してください。ローカルではないドライブでインストールすると、パフォーマンスおよび可用性の点で問題が生じます。

関連タスク:

- 64 ページの『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- 62 ページの『ディレクトリー共用アクセスのセットアップ (Windows)』

関連資料:

- 73 ページの『使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX)』
- 74 ページの『応答ファイルのキーワード (Windows および UNIX)』

応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)

前提条件:

インストールを実行するときに使用するユーザー・アカウントで、 DB2 製品をインストールしたいシステムにログオンします。

手順:

DB2 製品をインストールするワークステーションからインストールを実行するには、

1. コマンド・プロンプトに次のようなコマンドを入力して、 DB2 インストール・ファイルのあるネットワーク・ドライブまたは CD-ROM ドライブの共有ディレクトリーに接続します。

```
net use x: %%computer_name%directory_sharename /USER:domain%username
```

ここで、

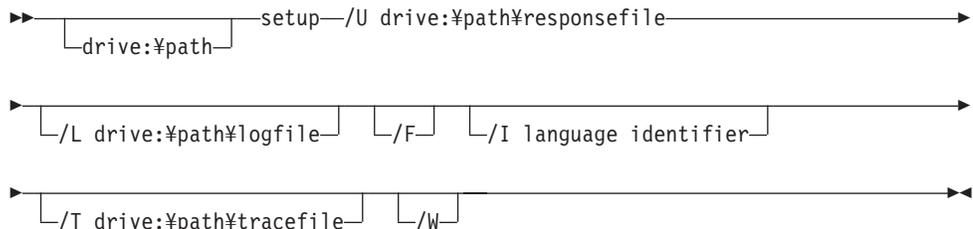
- *x:* は、ローカル・ドライブ上の共有ディレクトリーを表します。
- *computer_name* は、DB2 インストール・ファイルがあるリモート・マシンのコンピューター名を表します。
- *directory_sharename* は、DB2 インストール・ファイルがあるネットワーク・ドライブまたは CD-ROM ドライブのディレクトリーの共有名を表します。
- *domain* は、アカウントが定義されているドメインを表します。
- *username* は、このシステムにアクセスできるユーザーを表します。

例えば、db2nt として共有され、リモート・サーバー codesrv に置かれているリモート db2prods ディレクトリーを、ローカルの *x:* ドライブとして使用するには、次のようなコマンドを入力します。

```
net use x: %codesrv%db2nt
```

ネットワーク全体でのセキュリティのセットアップ方法によっては、*/USER* パラメーターを指定しなければならない場合があります。

2. コマンド・プロンプトから次のコマンドを出して、セットアップ・プログラムを実行します。



ここで、

- /U** 完全修飾応答ファイル名を指定します。サンプルの応答ファイルの内容および名前を変更する場合、このパラメーターが新規の名前と一致することを確認してください。このパラメーターは必須です。
- /L** 完全修飾ログ・ファイル名を指定します。このファイルには、設定情報および設定中に生じたエラーが記録されます。このパラメーターはオプションです。
ログ・ファイル名を指定しない場合、DB2 は db2.log という名前を付けます。db2.log ファイルは、My Documents%db2log フォルダーにあります。
- /F** インストール前にすべての DB2 プロセスを強制的に停止させます。このパラメーターはオプションです。
- /I** 使用言語を表す 2 文字の国別コードを指定します。言語を指定しない場合、セットアップ・プログラムはシステムの言語を判別し、その言語に適切な DB2 のインストールを行います。このパラメーターはオプションです。
- /T** インストール・トレース情報を含むファイルを作成します。このパラメーターはオプションです。
- /W** インストールの起動プロセスが、インストールが終わるまで待機してから終了するよう指定します。このパラメーターはオプションです。

例えば、`admin.rsp` (DB2 インストール・ファイルと同じディレクトリーにある) という名前で作成したカスタム応答ファイルを使って、`DB2 Administration Client` をインストールするには、次のようなコマンドを入力します。

```
x:%setup /U admin.rsp
```

応答ファイル生成プログラムを使って作成した応答ファイルを使用する場合は、すべてのインスタンス・プロファイルが、必ず指定した応答ファイルと同じドライブとディレクトリー内にあるようにします。

3. インストール完了後、ログ・ファイルのメッセージをチェックします。

ローカル・コンピューターか、ネットワーク上の別のコンピューターにある DB2 資料に DB2 製品からアクセスできるようにする場合は、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database と DB2 関連製品の資料が収録されています。

関連概念:

- 66 ページの『応答ファイル生成プログラムについて (Windows)』
- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 63 ページの『応答ファイルの作成および編集 (Windows)』
- 83 ページの『応答ファイル・インストールの途中で DB2 プロセスを停止する (Windows)』
- 155 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

応答ファイル生成プログラム (Windows)

応答ファイル生成プログラムについて (Windows)

応答ファイル生成プログラム・ユーティリティーは、Windows® 32 ビットおよび 64 ビット・オペレーティング・システムで利用可能であり、すでにインストールと構成が済んでいる DB2® 製品から応答ファイルを作成します。生成した応答ファイルを使って、まったく同じセットアップを他のマシンで再生することができます。

例えば、ネットワークを介してさまざまなデータベースに接続するように、DB2 Run-Time Client をインストールおよび構成することができます。この DB2 クライアントをインストールして、すべてのユーザーがアクセス権を持っているすべてのデータベースにアクセスするように構成し終えたら、応答ファイル生成プログラムを実行して、各 DB2 インスタンスごとに応答ファイルと構成プロファイルを作成することができます。

応答ファイル生成プログラムは、インストール用の応答ファイルと、指定した各インスタンスごとのインスタンス・プロファイルを作成します。次に、その応答ファイルを使用して、ネットワークのどこにでも同じクライアントを作成することができます。

また、応答ファイル生成プログラムを使って、インストール応答ファイルだけ（インスタンス・プロファイルを除く）を作成することもできます。このオプションにより、構成情報がなくても、インストール済みのクライアントの同一コピーを作成できます。

関連タスク:

- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』
- 82 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

第 7 章 応答ファイル・インストール (UNIX)

DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)

ここでは、UNIX において応答ファイル・インストールを実行する方法について説明します。初回インストール後も、追加のコンポーネントや製品をインストールするために応答ファイルを使用できます。

制約事項:

応答ファイルによる方法で DB2 を UNIX プラットフォームにインストールするときは、以下に示す制限に注意しなければなりません。

- インスタンスまたはグローバル・プロファイルのレジストリー・キーワードを BLANK ("BLANK" という語) に設定すると、現在設定されているキーワードのリストからそのキーワードが削除されてしまいます。
- インストールの前に、ディスク・スペースが十分あることを確認してください。十分な空きスペースがないと、インストールが失敗したときに手操作でクリーンアップをしなければならなくなる可能性があります (一部しかインストールされなかった RPM を削除するなど)。
- 複数インストールを実行する場合は、CD-ROM ドライブではなくネットワーク・ファイル・システムからインストールすることをお勧めします。ネットワーク・ファイル・システムからインストールすると、インストールの実行にかかる時間がかかり短縮されます。複数のクライアントをインストールする場合は、コード・サーバー上にマウント済みのファイル・システムをセットアップして、パフォーマンスを向上させる必要があります。

前提条件:

インストールを開始する前に、下記のことを確認してください。

- ご使用のシステムが、DB2 製品をインストールするために必要なメモリー、ハードウェア、およびソフトウェア要件をすべて満たしていること。
- NIS を使用するシステムの場合、応答ファイル・インストールを実行する前に、すべてのユーザー ID/グループをセットアップする必要があります。

手順:

1. ご使用の CD-ROM をマウントします。
2. サンプル応答ファイルを使用して応答ファイルを作成します。
3. 応答ファイルを使用して、DB2 をインストールします。

関連タスク:

- 70 ページの『サンプル応答ファイルによる応答ファイルの作成 (UNIX)』
- 71 ページの『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』

サンプル応答ファイルによる応答ファイルの作成 (UNIX)

この時点で、以下のシナリオのうち 1 つを適用します。

- サンプル応答ファイルに基づいて応答ファイルを作成したいというシナリオ。
- DB2 セットアップ・ウィザードでご使用のインストール内容に基づいて応答ファイルを作成しており、このファイルに変更を加えたいというシナリオ。

DB2 CD-ROM には、すぐに使用できるサンプルの応答ファイルが含まれており、そこにはデフォルト項目も用意されています。サンプルの応答ファイルは、次の場所にあります。

```
<cd-rom>/db2/platform/samples
```

<cd-rom> は、インストール可能な DB2 バージョンの位置です。

各 DB2 製品ごとに、サンプル応答ファイルが用意されています。

手順:

サンプル応答ファイルに基づいて応答ファイルを作成して編集するには、以下のようになります。

1. 応答ファイルのキーワード・トピックをガイドとして使用し、サンプル応答ファイルをローカル・ファイル・システムにコピーしてから編集します。DB2 セットアップ・ウィザードで作成した応答ファイルを使用する場合は、このステップをスキップします。
2. サンプル応答ファイルをカスタマイズします。

応答ファイル内の項目を活動化するには、キーワードの左のアスタリスク (*) を削除します。次に、値の右の現在の設定値を、別の値に置き換えます。設定可能な設定値は、等号の右側にリストされています。

一部の製品の応答ファイルには、値の指定を省略できない必須キーワードがあります。必須キーワードについては、各応答ファイル内のコメントで示されています。

インストールに一意なキーワードは、応答ファイル・インストール時に応答ファイルに指定するのみです。

3. ネットワーク上の誰でも使えるエクスポート・ファイル・システムに、そのファイルを保管します。

CD-ROM から直接インストールしている場合、名前が変更された応答ファイルを他のドライブに格納してください。

注: 応答ファイルに、インスタンス所有者名を指定することができます。そのユーザーが存在していない場合は、システム上にそのユーザーが作成されます。

関連タスク:

- 71 ページの『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 73 ページの『使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX)』
- 74 ページの『応答ファイルのキーワード (Windows および UNIX)』

応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)

前提条件:

root 権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

手順:

応答ファイル・インストールを実行するには、下記のようにします。

1. **db2setup** コマンドを次のように入力します。

```
<cd-rom>/db2setup -r <responsefile_directory>/<response_file>
```

ここで、

- <cd-rom> は、DB2 インストール可能イメージの場所です。
 - <responsefile_directory> は、カスタマイズ済み応答ファイルの含まれているディレクトリーです。
 - <response_file> は、応答ファイルの名前です。
2. インストール完了後、ログ・ファイルのメッセージをチェックします。ログ・ファイルの位置は /tmp/db2setup.log です。

| ローカル・コンピューターか、ネットワーク上の別のコンピューターにある DB2
| 資料に DB2 製品からアクセスできるようにする場合は、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database と DB2 関連製品の資料が収録されています。

関連概念:

- 54 ページの『応答ファイルに関する考慮事項』
- 53 ページの『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 153 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 74 ページの『応答ファイルのキーワード (Windows および UNIX)』

第 8 章 応答ファイルの参照トピック

使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX)

DB2 CD-ROM には、すぐに使用できるサンプルの応答ファイルが含まれており、そこにはデフォルト項目も用意されています。

サンプルの応答ファイルは、次の場所にあります。

`db2/platform/samples`

ここで、*platform* は該当するハードウェア・プラットフォームです。

次に示すサンプル応答ファイルを使って、サポートされているワークステーションで DB2 製品をインストールすることができます。

- DB2 Application Deveopment Client - db2adcl.rsp
- DB2 Administration Client - db2admcl.rsp
- DB2 Connect Enterprise Edition - db2conee.rsp
- DB2 Connect Personal Edition - db2conpe.rsp
- DB2 Cube Views - db2cube.rsp
- DB2 Data Links Manager - db2dlm.rsp
- DB2 Enterprise Server Edition - db2ese.rsp (単一パーティション)
- DB2 Enterprise Server Edition - db2eseio.rsp (マルチ・パーティションを抱えるインスタンス) (Windows)
- DB2 Enterprise Server Edition - db2esenn.rsp (新規ノードのマルチ・パーティション) (Windows)
- DB2 Personal Edition - db2pe.rsp
- DB2 Query Patroller - db2qp.rsp
- DB2 Run-Time Client - db2rtcl.rsp
- DB2 Spatial Extender Server - db2gse.rsp
- DB2 UDB Express Edition - db2exp.rsp
- DB2 Warehouse Manager - db2wm.rsp
- DB2 Workgroup Server Edition - db2wse.rsp
- Information Integrator Relational Wrappers - db2relc.rsp (Windows) または db2iirw.rsp (UNIX)
- Information Integrator Non-Relational Wrappers - db2lsdc.rsp (Windows) または and db2iinw.rsp (UNIX)

関連概念:

- 53 ページの『応答ファイルによるインストールの基礎』

関連タスク:

- 69 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)』

- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』

関連資料:

- 74 ページの『応答ファイルのキーワード (Windows および UNIX)』
- 78 ページの『DB2 コントロール・サーバーの応答ファイルのキーワード (Windows)』

応答ファイルのキーワード (Windows および UNIX)

このトピックでは、応答ファイル・インストールを実行する際に指定するキーワードの一部について説明します。初回インストール後も、追加のコンポーネントや製品をインストールするために応答ファイルを使用できます。以下の応答ファイルのキーワードは、サンプル応答ファイルに関連して説明されています。その後、編集した応答ファイルを、インストール・サーバーによって使用される共有ネットワーク・ドライブまたはネット作業ファイル・システムにコピーしなければなりません。

PROD インストールする製品を指定します。オプションは以下のとおりです。

- ADMINISTRATION_CLIENT (DB2 Administration Client)
- APPLICATION_DEVELOPMENT_CLIENT (DB2 Application Development Client)
- CONNECT_APPLICATION_SERVER_EDITION (DB2 Connect Application Server Edition)
- CONNECT_ENTERPRISE_EDITION (DB2 Connect Enterprise Edition)
- CONNECT_PERSONAL_EDITION (DB2 Connect Personal Edition)
- CONNECT_UNLIMITED_EDITION (DB2 Connect Unlimited Edition)
- CUBE_VIEWS (DB2 Cube Views)
- DATA_LINKS_MANAGER (DB2 Data Links Manager)
- DB2_HTML_DOCUMENTATION (DB2 HTML ドキュメンテーション CD)
- ENTERPRISE_SERVER_EDITION (DB2 Enterprise Server Edition)
- II_RELATIONAL_WRAPPERS (Information Integrator Relational Wrappers)
- II_NONRELATIONAL_WRAPPERS (Information Integrator Non-Relational Wrappers)
- PERSONAL_EDITION (DB2 Personal Edition)
- QUERY_PATROLLER (DB2 Query Patroller)
- RUNTIME_CLIENT (DB2 Run-Time Client)
- RUNTIME_CLIENT_LITE (DB2 Run-Time Client Lite)
- SPATIAL_EXTENDER (DB2 Spatial Extender Server)
- WAREHOUSE_MANAGER (DB2 Data Warehouse Manager)
- WAREHOUSE_MANAGER_CONNECTORS (DB2 Data Warehouse Manager Connector)
- WORKGROUP_SERVER_EDITION (DB2 Workgroup Server Edition)

注: 正常な応答ファイルのインストールであったとしても、いくつかのコンポーネントがインストールされていない場合があるので、**PROD** キーワードはコメント化するべきではありません。

FILE Windows プラットフォーム専用。DB2 製品の宛先ディレクトリーを指定します。

INSTALL_TYPE

インストールのタイプを指定します。

オプションは以下のとおりです。

- COMPACT
- TYPICAL
- CUSTOM

簡略または標準のインストールでは、カスタム・キーワード (COMP) はすべて無視されます。

TYPICAL_OPTION

製品のユーザーの大半に適用される機能を含む標準インストール。標準 (TYPICAL) オプションの場合、その機能に加え、データウェアハウジング環境またはサテライト環境をインストールするユーザーにとって標準的な追加機能がインストールされます。それらのオプションは、INSTALL_TYPE キーワードが TYPICAL の場合にのみ有効です。例えば、次の部分から * を削除します (コメント解除)。

```
*TYPICAL_OPTION = DATA_WAREHOUSE  
*TYPICAL_OPTION = SATELLITE_ADMIN
```

COMP インストールするコンポーネントを指定します。セットアップ・プログラムは製品の必須コンポーネントを自動的にインストールし、使用できないコンポーネントが要求されたら無視します。

カスタム・インストールの場合は、コンポーネントを個々に選択する必要があります。これは、インストールするコンポーネントの COMP キーワードをコメント解除することによって可能です (製品ごとに異なります)。例えば、CA をインストールするには、次の部分から * を削除します (コメント解除)。

```
*COMP = CONFIGURATION_ASSISTANT
```

注: INSTALL_TYPE が CUSTOM でない場合、このキーワードは無視されます。

LANG 言語選択キーワード。言語を追加インストールする場合は、それをコメント解除してください。英語は必須であり、常に選択されます。例えば、フランス語をインストールするには、次の部分から * を削除します (コメント解除)。

```
*LANG=FR
```

REBOOT

Windows プラットフォーム専用。インストールが完了したらシステムを再始動するかどうかを指定します。

KILL_PROCESSES

Windows プラットフォーム専用。DB2 の既存のバージョンが動作中の場合、このキーワードが YES に設定されていると、その動作中の DB2 プロセスが通知なしで終了します。

DB2 Administration Server の設定値

下記の DAS 設定値を有効にするには、対応する * を削除してください (コメント解除)。この設定は、以下の Windows および UNIX 環境の両方に適用されます。

- UNIX の場合:

```
*DAS_USERNAME = dasuser
*DAS_PASSWORD = dasp
*DAS_GID = 100
*DAS_UID = 100
*DAS_GROUP_NAME = dasgroup
*DAS_SMTP_SERVER = jsmith.torolab.ibm.com
```

- Windows の場合:

```
*DAS_USERNAME = dasuser
*DAS_DOMAIN = domain
*DAS_PASSWORD = dasp
*DAS_SMTP_SERVER = jsmith.torolab.ibm.com
```

下記のオプションは、DAS 連絡先リストの場所を指定します。連絡先リストがリモート位置にある場合には、システムに連絡先を追加する権限の付与されているユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

```
*DAS_CONTACT_LIST = LOCAL または REMOTE (DEFAULT = LOCAL)
*DAS_CONTACT_LIST_HOSTNAME = hostname
*DAS_CONTACT_LIST_USERNAME = username
*DAS_CONTACT_LIST_PASSWORD = password
```

特殊なインスタンスの指定

これらのすべては、インスタンス名ではなく、インスタンス・セクションを取ります。インスタンス・セクションは、応答ファイル内になければなりません。

- Windows の場合:

- DEFAULT_INSTANCE - これはデフォルト・インスタンスです。
- CTLSRV_INSTANCE - これはサテライト・コントロール・サーバーとして動作するように構成されるインスタンスです。

- UNIX の場合:

- WAREHOUSE_INSTANCE - このキーワードはインストール・システムに、どのインスタンスをデータウェアハウスを使用するようにセットアップするかを示します。IWH.environment ファイルは、セクションがここに表示されるインスタンス名で更新されます。

インスタンスの指定

応答ファイルを使用すると、インスタンスをいくつでも必要なだけ作成できます。新しいインスタンスを作成するには、INSTANCE キーワードを使用してインスタンス・セクションを指定する必要があります。その後は、INSTANCE の中に指定されている値を含むキーワードは、すべてそのインスタンスに属するものになります。

以下に示すのは、Windows および UNIX 環境の両方に対するインスタンスの指定の例です。

- UNIX の場合:

```
*INSTANCE=DB2_INSTANCE
*DB2_INSTANCE.NAME = db2inst1
*DB2_INSTANCE.TYPE = ESE
*DB2_INSTANCE.PASSWORD = PASSWORD
*DB2_INSTANCE.UID = 100
*DB2_INSTANCE.GID = 100
*DB2_INSTANCE.GROUP_NAME = db2grp1
*DB2_INSTANCE.HOME_DIRECTORY = /home/db2inst1
*DB2_INSTANCE.SVCENAME = db2cdb2inst1
*DB2_INSTANCE.PORT_NUMBER = 50000
*DB2_INSTANCE.FCM_PORT_NUMBER = 60000
*DB2_INSTANCE.MAX_LOGICAL_NODES = 4
*DB2_INSTANCE.AUTOSTART = YES
*DB2_INSTANCE.DB2COMM = TCPIP
*DB2_INSTANCE.WORDWIDTH = 32
*DB2_INSTANCE.FENCED_USERNAME = USERNAME
*DB2_INSTANCE.FENCED_PASSWORD = PASSWORD
*DB2_INSTANCE.FENCED_UID = 100
*DB2_INSTANCE.FENCED_GID = 100
*DB2_INSTANCE.FENCED_GROUP_NAME = db2grp1
*DB2_INSTANCE.FENCED_HOME_DIRECTORY = /home/db2inst1
```

- Windows の場合:

```
*INSTANCE = DB2_INSTANCE
*DB2_INSTANCE.NAME = db2inst1
*DB2_INSTANCE.TYPE = ESE
*DB2_INSTANCE.PASSWORD = PASSWORD
*DB2_INSTANCE.USERNAME = db2admin
*DB2_INSTANCE.SVCENAME = db2cdb2inst1
*DB2_INSTANCE.PORT_NUMBER = 50000
*DB2_INSTANCE.FCM_PORT_NUMBER = 60000
*DB2_INSTANCE.MAX_LOGICAL_NODES = 4
*DB2_INSTANCE.AUTOSTART = YES
*DB2_INSTANCE.DB2COMM = TCPIP, NETBIOS, NPIPE
```

DATABASE (データベース) セクション

これらのキーワードは、インストール・システムに、インストール先のマシン上でデータベースを作成またはカタログさせるために使用できます。

```
DATABASE = DATABASE_SECTION
DATABASE_SECTION.INSTANCE = DB2_INSTANCE
DATABASE_SECTION.DATABASE_NAME = TOOLSDB
DATABASE_SECTION.LOCATION = LOCAL
DATABASE_SECTION.ALIAS = TOOLSDB
DATABASE_SECTION.USERNAME = username
DATABASE_SECTION.PASSWORD = password
```

これらのキーワードは、カタログされているREMOTE データベース用にのみ使用されます。
DATABASE_SECTION.SYSTEM_NAME = *hostname*
DATABASE_SECTION.SVCENAME = db2cdb2inst1

WAREHOUSE_CONTROL_DATABASE

このキーワードの値は、応答ファイルで指定されたデータベース・セクション・キーワードの1つでなければなりません。例えば、

```
*WAREHOUSE_CONTROL_DATABASE = DATABASE_SECTION
```

このキーワードで指定されたデータベース・セクションは、**USERNAME** および **PASSWORD** キーワードを指定しなければなりません。

WAREHOUSE_SCHEMA

例えば、ウェアハウス・スキーマを設定するには、次の部分から * を削除します (コメント解除)。

```
*WAREHOUSE_SCHEMA = wm_schema
```

ICM_DATABASE

インフォメーション・カタログの保存に使用するデータベース。このキーワードの値は、応答ファイルで指定されたデータベース・セクション・キーワードの 1 つでなければなりません。

```
*ICM_DATABASE = DATABASE_SECTION
```

ICM_SCHEMA

インフォメーション・カタログ・スキーマを設定するには、次の部分から * を削除します (コメント解除)。

```
*ICM_SCHEMA = icm_schema
```

TOOLS_CATALOG_DATABASE

ツール・カタログの保存に使用するデータベース。このキーワードの値は、応答ファイルで指定されたデータベース・セクション・キーワードの 1 つでなければなりません。

```
*TOOLS_CATALOG_DATABASE = DATABASE_SECTION
```

TOOLS_CATALOG_SCHEMA

ツール・カタログ・スキーマを設定するには、次の部分から * を削除します (コメント解除)。

```
*TOOLS_CATALOG_SCHEMA = toolscat_schema
```

CONTACT (連絡先) セクション

これは、インストール・プロセスによって作成される連絡先セクションを (それが存在しない場合に) 定義します。指定されたインスタンスのヘルス通知はこの連絡先に送信されます。

```
CONTACT = contact_section
contact_section.CONTACT_NAME = contact name
contact_section.INSTANCE = DB2_INSTANCE
contact_section.EMAIL = Email address
contact_section.PAGER = NO
```

関連概念:

- 53 ページの『応答ファイルによるインストールの基礎』

関連資料:

- 73 ページの『使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX)』
- 78 ページの『DB2 コントロール・サーバーの応答ファイルのキーワード (Windows)』

DB2 コントロール・サーバーの応答ファイルのキーワード (Windows)

このトピックでは、Windows オペレーティング・システム (Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003) で DB2 コントロール・サーバーの応答ファイル・インストールを実行する際に指定するキーワードの一部について説明します。DB2 コントロール・サーバーは、サテライト制御デー

データベース SATCTLDB を利用することにより、サテライトに対する管理および状況報告のサポートを提供します。このデータベースは、コントロール・サーバー・コンポーネントのインストール時に自動的に作成されます。

これらのキーワードは、データベース・マネージャー構成パラメーターの値や DB2 レジストリー変数の値を指定するときに使用することができます。

コントロール・サーバーをインストールするには、CONTROL_SERVER コンポーネント (COMP=CONTROL_SERVER) を選択します。このコンポーネントは DB2 Enterprise Server Edition でのみ使用可能です。ご使用のコントロール・サーバーのインスタンスを作成し (INSTANCE=CTLSRV)、このインスタンス名を付ける (CTLSRV.NAME=DB2CTLSV) 必要もあります。

CTLSRV.AUTOSTART

DB2 コントロール・サーバー・インスタンス (DB2CTLSV) をシステムの毎回のリブート時に自動的に開始するかどうかを指定します。

デフォルトは YES (DB2CTLSV インスタンスを自動的に開始) です。

CTLSRV.SVCENAME

DB2 コントロール・サーバー・インスタンスの TCP/IP サービス名を指定します。これを使用して、インストール・プログラムが生成したデフォルトのサービス名を変更できます。CTLSRV.PORT_NUMBER キーワードを併用してデフォルトのポート番号を変更すれば、DB2 コントロール・サーバー・インスタンスの TCP/IP 構成を完全に制御することになります。

CTLSRV.PORT_NUMBER

DB2 コントロール・サーバー・インスタンスの TCP/IP サービス名を指定します。これを使用して、インストール・プログラムが生成したデフォルトのサービス名を変更できます。CTLSRV.SVCENAME キーワードを併用してデフォルトのポート番号を変更すれば、DB2 コントロール・サーバー・インスタンスの TCP/IP 構成を完全に制御することになります。

SATELITE_CONTROL_DATABASE

このキーワードには、サテライト・コントロール・サーバーとして使用するデータベースを指定します。このキーワードの値は、応答ファイルで指定されたデータベース・セクション・キーワードの 1 つでなければなりません。

*SATELITE_CONTROL_DATABASE = DATABASE_SECTION

関連概念:

- 53 ページの『応答ファイルによるインストールの基礎』

関連タスク:

- 70 ページの『サンプル応答ファイルによる応答ファイルの作成 (UNIX)』
- 63 ページの『応答ファイルの作成および編集 (Windows)』

関連資料:

- 73 ページの『使用可能なサンプル応答ファイル(Windows および UNIX)』

応答ファイル・インストール・エラー・コード (Windows)

以下の表は、応答ファイルのインストール中に検出される可能性のあるエラー戻りコード (1 次および 2 次) を表しています。

表 9. 1 次応答ファイル・インストール・エラー・コード

エラー・コード値	説明
0	アクションは正常に完了しました。
1	アクションは警告を返しました。
1603	インストール中に致命的エラーが発生しました。
3010	インストールは正常に実行されましたが、インストールを完了するにはリブートする必要があります。これには、ForceReboot が実行されるインストールは含まれていません。Windows Installer バージョン 1.0 では、このエラー・コードは利用できません。

表 10. 2 次応答ファイル・インストール・エラー・コード

エラー・コード値	説明
3	パスが見つかりませんでした。
5	アクセスが拒否されました。
10	環境エラーが発生しました。
13	データが無効です。
87	パラメーターのうちのいずれかが無効です。
1602	インストールはユーザーによって取り消されました。
1610	構成データが壊れています。サポート担当者に連絡してください。
1612	この製品のインストール・ソースが使用不可です。ソースが存在し、アクセス可能であることを確認してください。
1618	別のインストールが既に進行中です。このインストールを続ける前に、前のインストールを完了してください。
1622	インストール・ログ・ファイルを開いているときにエラーが発生しました。指定されたログ・ファイルのロケーションが存在し、書き込み可能かどうかを確認してください。
1632	Temp フォルダがフルか、またはアクセス不可能です。 Temp フォルダが存在し、書き込み可能かどうかを確認してください。
1633	このインストール・パッケージは、このプラットフォームではサポートされていません。
1638	この製品の別のバージョンがすでにインストールされています。このバージョンのインストールを継続できません。
1639	コマンド行引き数が無効です。

応答ファイルの戻りコードについては、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

関連タスク:

- 82 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 64 ページの『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』

応答ファイル・インストール・エラー・コード (UNIX)

以下の表は、応答ファイルのインストール中に検出される可能性のあるエラー戻りコード (1 次および 2 次) を表しています。

表 11. 1 次応答ファイル・インストール・エラー・コード

エラー・コード値	説明
0	アクションは正常に完了しました。
1	アクションは警告を返しました。
67	インストール中に致命的エラーが発生しました。
3010	インストールは正常に実行されましたが、インストールを完了するにはリポートする必要があります。

表 12. 2 次応答ファイル・インストール・エラー・コード

エラー・コード値	説明
3	パスが見つかりませんでした。
5	アクセスが拒否されました。
10	環境エラーが発生しました。
13	データが無効です。
87	パラメーターのうちのいずれかが無効です。
66	インストールはユーザーによって取り消されました。
74	構成データが壊れています。サポート担当者に連絡してください。
76	この製品のインストール・ソースが使用不可です。ソースが存在し、アクセス可能であることを確認してください。
82	別のインストールが既に進行中です。このインストールを続ける前に、前のインストールを完了してください。
86	インストール・ログ・ファイルを開いているときにエラーが発生しました。指定されたログ・ファイルのロケーションが存在し、書き込み可能かどうかを確認してください。
96	Temp フォルダがフルか、またはアクセス不可能です。 Temp フォルダが存在し、書き込み可能かどうかを確認してください。
97	このインストール・パッケージは、このプラットフォームではサポートされていません。
102	この製品の別のバージョンがすでにインストールされています。このバージョンのインストールを継続できません。
103	コマンド行引き数が無効です。
143	システムにはインストールを続行するために十分なフリー・スペースがありません。

関連タスク:

- 82 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 71 ページの『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』

プロファイルのエクスポートとインポート

手順:

応答ファイル生成プログラムによって作成された応答ファイルを使って DB2 製品をインストールする際に、構成プロファイルを使わなかった場合には、**db2cfexp** コマンドを入力することによって、構成プロファイルを作成することができます。後で、**db2cfimp** コマンドを使用して、構成プロファイルをインポートできます。

また、CA を使用することによって、構成をエクスポートしたりインポートしたりすることもできます。

関連概念:

- 66 ページの『応答ファイル生成プログラムについて (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfimp - 接続構成インポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfexp - 接続構成エクスポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

バッチ・ファイルによる応答ファイル・インストール (Windows)

バッチ・ファイルを使用して、応答ファイル・インストールを起動できます。

手順:

バッチ・ファイルを使用して応答ファイル・インストールを起動するには、

1. 応答ファイルを編集するか作成します。
2. テキスト・エディターを使用して、バッチ・ファイルを作成します。例えば、以下の内容の **ese.bat** というバッチ・ファイルを作成し、DB2 Enterprise Server Edition をインストールします。

```
c:¥db2ese¥setup /U c:¥PROD_ESE.rsp
echo %ERRORLEVEL%
```

/U は応答ファイルの場所を指定し、**echo %ERRORLEVEL%** はバッチ処理でインストール戻りコードを表示したいことを指定します。

3. **ese.bat** コマンドをコマンド・プロンプトから実行して使用し、バッチ・ファイルを実行します。

関連概念:

- 54 ページの『応答ファイルに関する考慮事項』
- 53 ページの『応答ファイルによるインストールの基礎』

関連タスク:

- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』

関連資料:

対話式インストールの途中で DB2 プロセスを停止する (Windows)

DB2 セットアップ・コマンドを実行した時点で DB2 プロセスが実行中だと、DB2 のインストールが実行できません。

例えば、対話式インストールのときは DB2 は現在実行中で、次のプロセスによってロックされています というメッセージが表示されます。その後、インストールを続行できるようにその DB2 プロセスを停止するよう要求されます。

インストールを実行可能にするためにアクティブな DB2 プロセスを停止するときは、細心の注意を払ってください。DB2 プロセスを終了するとデータが失われてしまうことがあります。以降、それらのプロセスを停止する方法について説明します。

手順:

対話式インストールで DB2 プロセスをすべて停止するには、セットアップ・コマンドに **/F** オプションを指定します。**/F** オプションは実行中のプロセスを停止し、メッセージやプロンプトは表示しません。

さらに、DB2 サービスは「サービス」ウィンドウに表示されるので、停止したかどうかをそこで確認できます。

注: データが失われる危険性を小さくするため、インストールの前に、各インスタンスごとに **db2stop** コマンドを発行することをお勧めします。

関連タスク:

- 83 ページの『応答ファイル・インストールの途中で DB2 プロセスを停止する (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』

応答ファイル・インストールの途中で DB2 プロセスを停止する (Windows)

DB2 セットアップ・コマンドを実行した時点で DB2 プロセスが実行中だと、DB2 のインストールが実行できません。インストールを続行するためには、その DB2 プロセスを停止する必要があります。インストールを実行可能にするためにアクティブな DB2 プロセスを停止するときは、細心の注意を払ってください。DB2 プロセスを終了するとデータが失われてしまうことがあります。以降、それらのプロセスを停止する方法について説明します。

制約事項:

DB2 セットアップ・コマンドの発行時に実行中の DB2 プロセスを停止するよう指定する機能を利用できるのは、Windows 32 ビットおよび 64 ビット・オペレーティング・システムの場合のみです。UNIX 上でインストール作業を実行する場合、この処理は不要です。

手順:

応答ファイルによるインストールの場合は、アクティブな DB2 プロセスを停止するために以下のいずれかの方法を使います。これらのオプションのいずれかを指定すると、アクティブな DB2 プロセスを停止してからインストールが続行します。

- セットアップ・コマンドに **/F** オプションを指定する。このオプションの他に **/U**、**/L**、**/I** といったオプションもすでに使用可能です。
- **KILL_PROCESSES** キーワードを **YES** に設定する (デフォルトは **NO**)。

注: データが失われる危険性を小さくするため、インストールの前に、各インスタンスごとに **db2stop** コマンドを発行することをお勧めします。

関連タスク:

- 71 ページの『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 64 ページの『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- 83 ページの『対話式インストールの途中で DB2 プロセスを停止する (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』

第 3 部 Microsoft Systems Management Server (SMS) による分散インストール

第 9 章 Microsoft Systems Management Server (SMS) による分散インストール

Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 製品のインストール

Microsoft Systems Management Server (SMS) を使用して、ネットワークの任意の場所に DB2 をインストールし、中央設置場所からインストールをセットアップすることができます。SMS インストールの場合、ユーザーが実行しなければならない作業は最小限で済みます。このインストール方法は、すべて同じセットアップに基づいて多数のクライアントにインストールをロールアウトしようとする場合には理想的です。

前提条件:

SMS サーバーと SMS ワークステーションの両方について、ネットワーク上に少なくとも SMS バージョン 2.0 をインストールして構成しておく必要があります。下記の作業の方法については、プラットフォームごとの「*Microsoft's Systems Management Server Administrator's Guide*」を参照してください。

- SMS を設定する方法 (1 次および 2 次サイトの設定も含む)
- クライアントを SMS システムに追加する方法
- クライアントのインベントリー・コレクションをセットアップする方法

手順:

SMS を使用して DB2 製品をインストールするには、

1. DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートします。
2. SMS サーバー上に SMS パッケージを作成します。
3. ネットワークを通じて DB2 インストールを配布します。

SMS を使用すると、どの応答ファイルを使用するかを制御することができます。数種類の別々のインストール・オプションを使用すると、数種類の別々の応答ファイルが作成されます。SMS インストール・パッケージを構成する際に、どの応答ファイルを使用するかを指定することができます。

関連タスク:

- 88 ページの『DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートする』
- 88 ページの『SMS サーバーでの SMS パッケージの作成』
- 89 ページの『ネットワークによる DB2 インストール・パッケージの配布』
- 95 ページの『応答ファイル・インストールのための db2cli.ini の構成』
- 93 ページの『サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成』
- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』
- 82 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』

DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートする

DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートする作業は、SMS による DB2 製品のインストール作業の一部です。

SMS を介してパッケージをセットアップするには、サンプル SMS パッケージ記述 (db2.pdf) ファイルと、カスタマイズ応答ファイルおよびインスタンス・プロファイルを使用します。応答ファイル・ジェネレーターを使って作成した応答ファイルを使用する場合、すべてのインスタンス・プロファイルが、必ず指定した応答ファイルと同じドライブとディレクトリー内にあるようにしなければなりません。

手順:

DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートするには、

1. 適切な CD-ROM をドライブに挿入します。
2. 「Microsoft SMS Administrator」を起動します。「Microsoft SMS Administrator ログオン (Microsoft SMS Administrator Logon)」ウィンドウが表示されます。
3. ログオン ID とパスワードを入力して、「OK」をクリックします。「SMS を開く (Open SMS)」ウィンドウが表示されます。
4. 「パッケージ (Packages)」ウィンドウのタイプを選んでから、「OK」をクリックします。「パッケージ (Packages)」ウィンドウがオープンします。
5. メニュー・バーから「ファイル (File)」→「新規 (New)」を選択します。「パッケージのプロパティ (Package Properties)」ウィンドウがオープンします。
6. 「インポート (Import)」ボタンをクリックします。「ファイル・ブラウザー (File Browser)」がオープンします。x:¥db2¥common¥ にある db2.pdf ファイルを見つけます。ここで、x: は CD-ROM ドライブを表します。
7. 「OK」をクリックします。

関連タスク:

- 88 ページの『SMS サーバーでの SMS パッケージの作成』
- 61 ページの『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』

SMS サーバーでの SMS パッケージの作成

SMS サーバーにおける SMS パッケージの作成は、SMS による DB2 製品のインストールの作業の一部です。

SMS パッケージは、SMS サーバーから SMS クライアントに送られる情報をまとめたものです。このパッケージは、クライアント・ワークステーションで実行できる一連のコマンドで構成されています。これらのコマンドは、システム保守、クライアント構成パラメーターの変更、またはソフトウェアのインストールに使用できます。

手順:

SMS パッケージを作成するには、

1. 「パッケージのプロパティ (Package Properties)」ウィンドウで、「ワークステーション (Workstations)」ボタンを選択します。「ワークステーション用パッケージのセットアップ (Setup Package For Workstations)」ウィンドウがオープンします。ここには、すぐに使えるインポート済みの応答ファイルとインスタンス・プロファイルが示されます。
2. 「ソース・ディレクトリー (Source Directory)」フィールドで、コピーした DB2 ファイルを入れた親ディレクトリー名を入力します。例えば、x:%db2prods と入力します。x: は、CD-ROM ドライブを表します。
3. インストールする製品名を「ワークステーション・コマンド行 (Workstation Command Lines)」ウィンドウから選択します。
4. サンプルの応答ファイルの内容や名前を変更した場合、「プロパティ」ボタンをクリックします。「コマンド行プロパティ (Command Line Properties)」ウィンドウがオープンします。新規の応答ファイル名とパスに一致するように、「コマンド行 (Command Line)」パラメーターを変更します。応答ファイル生成プログラムを使って作成した応答ファイルを使用する場合は、すべてのインスタンス・プロファイルが、必ず指定した応答ファイルと同じドライブとディレクトリー内にあるようにします。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「クローズ (Close)」ボタンをクリックします。
7. 「OK」をクリックし、オープンしたウィンドウをクローズします。「パッケージ (Packages)」ウィンドウに、新規 SMS パッケージの名前が表示されます。

関連タスク:

- 89 ページの『ネットワークによる DB2 インストール・パッケージの配布』
- 88 ページの『DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートする』

ネットワークによる DB2 インストール・パッケージの配布

ネットワークによる DB2 インストール・パッケージの配布は、SMS による DB2 製品のインストール の作業の一部です

以上でパッケージの作成が終わり、次のような 3 つのオプションを使用できます。

- SMS パッケージを配布してから、クライアント・ワークステーションにローカルにログオンしてパッケージを実行することができます。このオプションの場合、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、そのアカウントが定義されているローカル管理者 グループに属している必要があります。
- SMS パッケージを配布してから、クライアント・ワークステーションにリモートにログオンしてパッケージを実行することができます。このオプションの場合、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、ドメイン管理者 グループに属している必要があります。
- 自動インストール機能を使って SMS パッケージをセットアップすることができます。

オプション 1 と 2 を使ってもかまいませんが、たいいていのインストールの場合には、このステップで重点が置かれているオプション 3 をお勧めします。

SMS パッケージは、クライアント・ワークステーションに送られた後、実行するコード、およびそのコードの SMS サーバー上での位置をクライアント・ワークステーションに指示します。

手順:

コードをクライアント・ワークステーションに送るには、

1. 「**サイト (Sites)**」 ウィンドウをオープンします。
2. 「**パッケージ (Packages)**」 ウィンドウをオープンします。
3. 「**パッケージ (Packages)**」 ウィンドウで、該当するパッケージを選択し、それを「**サイト (Sites)**」 ウィンドウ内のターゲット・クライアントにドラッグします。「**ジョブの詳細 (Job Details)**」 ウィンドウがオープンします。このウィンドウには、クライアント・マシン (マシン・パス) に送られるパッケージと、ワークステーションで実行されるコマンドが示されます。
4. 「**ワークステーション・コマンドの実行 (Run Workstation Command)**」 チェック・ボックスを選択し、使用したいインストール・パッケージを選択します。
5. 「**ジョブの詳細 (Job Details)**」 ウィンドウの「**実行段階 (Run Phase)**」 ボックスで、「**事後実行 (Mandatory After)**」 チェック・ボックスを選択します。デフォルトでは、当日の日付から 1 週間後に事後実行の日付が設定されます。必要に応じてこの日付を調整します。
6. 「**スロー・リンクでは必須実行は不要 (Not Mandatory over Slow Link)**」 チェック・ボックスの選択を解除します。この機能は、多数のワークステーションにインストールする場合に重要です。サーバーが過負荷にならないよう、インストールを時差式で行うことをお勧めします。例えば、夜間にインストールする予定の場合は、都合のつく数のクライアント・ワークステーションの数に合わせてインストール時間を延ばします。「**ジョブの詳細 (Job Details)**」 ウィンドウについては、各プラットフォームに対応する「*Microsoft's Systems Management Server Administrator's Guide*」を参照してください。
7. ジョブの指定が完了したら、「**OK**」をクリックします。「**ジョブ・プロパティ (Job Properties)**」 ウィンドウに戻ります。
8. ジョブが何を行うかを説明する注釈を付けます。例えば、DB2 Run-Time Client のインストールなどとしてします。
9. 「**スケジュール (Schedule)**」 ボタンをクリックすると、「**ジョブ・スケジュール (Job Schedule)**」 ウィンドウがオープンします。このウィンドウで、該当するジョブの優先順位を調整します。デフォルトでは、そのジョブの優先順位は低く、その他のジョブが先に実行されます。中間または高い優先順位を選択することをお勧めします。また、ジョブの開始時刻を選択することもできます。
10. 「**OK**」をクリックして、「**ジョブ・スケジュール (Job Schedule)**」 ウィンドウをクローズします。
11. 「**OK**」をクリックします。

ジョブが作成され、パッケージが SMS クライアント・ワークステーションに送られます。

SMS クライアントでインストールを実行するには、以下のステップを実行します。

1. ターゲット SMS クライアント・ワークステーションで、ユーザー・アカウント (それが定義されているローカル管理者 グループに属しているもの) を使って、ワークステーションにログインします。このレベルの権限が必要とされるのは、ユーザー・プログラム・インストールではなく、システム・プログラム・インストールを実行するためです。
2. 「パッケージ・コマンド・マネージャー (Package Command Manager)」を起動します。「パッケージ・コマンド・マネージャー (Package Command Manager)」ウィンドウが表示されます。
3. SMS クライアントが SMS サーバーからパッケージを受け取ると、このウィンドウの「パッケージ名 (Package Name)」セクションに示されます。パッケージを選択して、「実行 (Execute)」ボタンをクリックします。インストールが自動的に行われます。
4. インストール後、SMS クライアント・ワークステーションをリポートしてから DB2 を使用してください。**重要:** 応答ファイルで REBOOT = YES と指定した場合、SMS クライアントは自動的にリポートします。
5. 「スタート」をクリックし、「プログラム」→「SMS Client」→「パッケージ・コマンド・マネージャー (Package Command Manager)」の順に選択します。「パッケージ・コマンド・マネージャー (Package Command Manager)」ウィンドウが表示されます。
6. 「実行済みコマンド (Executed Commands)」フォルダーをクリックし、パッケージが実行されたことを確認します。同様に、ジョブの状況を調べて、それがペンディングまたはアクティブから完了に変わっていることを確かめて、SMS サーバーでの完了を確認することもできます。

SMS クライアントで、「パッケージ・コマンド・マネージャー (Package Command Manager)」をもう一度オープンします。作成してクライアントに送ったパッケージが「実行済みコマンド (Executed Commands)」フォルダーの下に表示されていたら、インストールは完了しています。

関連タスク:

- 88 ページの『SMS サーバーでの SMS パッケージの作成』
- 91 ページの『Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 バージョン 8 の配布』

Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 バージョン 8 の配布

このセクションでは、Microsoft Systems Management Server (SMS) を使用して DB2 バージョン 8 を配布する方法を説明します。

前提条件:

SMS を使用して DB2 バージョン 8 を配布するには、以下のことを確認します。

- SMS 環境がすでにセットアップされていること。
- DB2 バージョン 8 インストール・メディアが、インストール・メディアの内容を編集できるロケーションにコピーされていること。

注: SMS 環境をセットアップする方法については、その製品の資料をお調べください。

手順:

SMS を使用して DB2 バージョン 8 を配布するには、以下のようにします。

1. DB2 インストール・メディアにあるサンプル応答ファイルを、実行したい DB2 インストールのタイプ用に準備します。サンプル応答ファイルは **db2*.rsp** であり、DB2 インストール・メディアの `db2\windows\samples` ディレクトリーにあります。
2. ご使用の SMS 環境の SMS Distribution Point コンピューターで、SMS Administrator Console をオープンします。「**サイト・データベース (Site Database)**」ドロップダウン・メニューをクリックしてから、「**パッケージ (Packages)**」を右マウス・ボタンでクリックします。
3. 「**新規作成 (New)**」 → 「**定義からパッケージを作成 (Package From Definition)**」を選択します。「**定義からパッケージを作成 (Create Package from Definition)**」ウィザードがオープンします。
4. 「**次へ (Next)**」をクリックします。「**パッケージの定義 (Package Definition)**」ウィンドウがオープンします。DB2 インストール・メディアのある `db2\windows\samples` ディレクトリーから希望するパッケージ・ファイルを見付けます。このファイルの名前は **db2*.pdf** の形式です。「**開く (Open)**」をクリックします。
5. 表示されたリストから適切なパッケージ定義を選択します。「**次へ (Next)**」をクリックします。「**ソース・ファイル (Source Files)**」ウィンドウがオープンします。
6. 「**ソースの圧縮バージョンを作成する (Create a compressed version of the source)**」ラジオ・ボタンを選択し、「**次へ (Next)**」をクリックします。「**ソース・ディレクトリー (Source Directory)**」ウィンドウをオープンします。
7. DB2 インストール・メディアのロケーション・タイプとディレクトリーを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
8. 「**完了 (Finish)**」をクリックして、SMS パッケージの作成を完了します。
9. SMS Administrator Console の内部から、「**サイト・データベース (Site Database)**」ドロップダウン・メニューをオープンして、「**パッケージ (Packages)**」 → 「**すべてのタスク (All Tasks)**」 → 「**ソフトウェアの配布 (Distribute Software)**」を選択します。「**ソフトウェアの配布 (Distribute Software)**」ウィザードがオープンします。
10. 「**次へ (Next)**」をクリックします。「**パッケージ (Package)**」ウィンドウがオープンします。
11. 「**既存のパッケージを配布する (Distribute an existing package)**」ラジオ・ボタンを選択して、表示されるリストから適切なパッケージを選択します。「**次へ (Next)**」をクリックします。「**配布ポイント (Distribute Points)**」ウィンドウがオープンします。配布を計画しているパッケージの配布ポイントを 1 つまたは複数選択します。
12. 「**次へ (Next)**」をクリックします。「**プログラムの公示 (Advertise a Program)**」ウィンドウがオープンします。

13. プログラムをコレクションに公示したいことを示すラジオ・ボタンを選択して、表示されるリストから実行するプログラムを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。「公示ターゲット (Advertisement Target)」ウィンドウがオープンします。
14. 既存のコンピューターのコレクションを選択するか、または公示して選択したプログラムをインストールするコンピューターの新規コレクションを作成することを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。「公示名 (Advertisement Name)」ウィンドウをオープンします。
15. 新規公示の名前および追加したい任意のコメントを入力します。「次へ (Next)」をクリックします。「サブコレクションへの公示 (Advertise to Subcollections)」ウィンドウがオープンします。
16. 対応する DB2 プログラムを実行させたい場所を、SMS 環境の SMS コンピューターの階層セットアップを基準として指定します。「次へ (Next)」をクリックします。「公示スケジュール (Advertisement Schedule)」ウィンドウをオープンします。
17. 指定したコンピューター・コレクション上で DB2 プログラムを実行する日時を選択します。プログラムの公示の有効期限を選択することも可能です。「次へ (Next)」をクリックします。「プログラムの割り当て (Assign Program)」ウィンドウがオープンします。
18. 指定されたコレクションのコンピューターで DB2 プログラムを必須要件にするには、プログラムを自動実行する日時を指定します。「次へ (Next)」をクリックします。
19. 「完了 (Finish)」をクリックして、「ソフトウェアの配布 (Distribute Software)」ウィザードを完了します。

関連タスク:

- 88 ページの『SMS サーバーでの SMS パッケージの作成』
- 87 ページの『Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 製品のインストール』
- 88 ページの『DB2 インストール・ファイルを SMS にインポートする』

サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成

DB2 製品をインストールし終わったら、構成アシスタントまたはコマンド行プロセッサを使って各クライアント・ワークステーションのリモート・データベースに個別にアクセスできるように、その製品を構成することができます。DB2 は、次のようにして、**CATALOG** コマンドを使って、リモート・データベースのアクセス情報のカタログを作成します。

- **CATALOG NODE** コマンドは、ホストまたはサーバーへの接続方法に関するプロトコル情報を指定します。
- **CATALOG DATABASE** コマンドは、リモート・データベース名をカタログし、それをローカル別名に割り当てます。
- **CATALOG DCS** コマンドは、リモート・データベースがホストまたは OS/400 データベースであることを指定します。(このコマンドが必要なのは、DB2 Connect Personal Edition または Enterprise Edition の場合のみです。)

- **CATALOG ODBC DATA SOURCE** コマンドは、DB2 データベースをデータ・ソースとして ODBC Driver Manager に登録します。

前提条件:

同一の構成の DB2 クライアントの複数コピーをロールアウトする予定の場合は、カスタマイズしたスクリプトを実行するバッチ・ファイルを作成することができます。

例えば、スクリプト・ファイルを実行するために、次のようなサンプル・バッチ・ファイル `myscript.bat` を使用することを検討してください。

```
@echo off
cls
db2cmd catmvs.bat
```

DB2CMD コマンドは、DB2 環境を初期化し、`catmvs.bat` ファイルは、同じ名前の付いたバッチ・ジョブを呼び出します。

以下に、サンプルのカタログ・スクリプト・ファイル `catmvs.bat` を示します。これを使って、DB2 Connect Personal Edition ワークステーションにデータベースを追加することができます。

```
db2 catalog tcpip node tcptst1 remote mvshost server 446
db2 catalog database mvbdb at node tcptst1 authentication dcs
db2 catalog dcs database mvbdb as mvs_locator
db2 catalog system odbc data source mvbdb
db2 terminate
exit
```

手順:

これらのファイルを手動でクライアント・ワークステーションに送ることができますが、SMS を使って、インストールとリブートの完了後に、スクリプトを自動的に実行させることもできます。カタログ・スクリプトで別の SMS パッケージを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 「**SMS Administrator**」を起動します。「**SMS を開く (Open SMS)**」ウィンドウが表示されます。
2. 「**パッケージ (Packages)**」ウィンドウのタイプを選んでから、「**OK**」をクリックします。「**パッケージ (Packages)**」ウィンドウがオープンします。
3. メニュー・バーから「**ファイル (File)**」→「**新規 (New)**」を選択します。「**パッケージのプロパティ (Package Properties)**」ウィンドウがオープンします。
4. 新規パッケージの名前を入力します。例えば、`batchpack` などとします。
5. そのパッケージについての注釈を入力します。例えば、バッチ・ファイル用パッケージなどとします。
6. 「**ワークステーション (Workstations)**」ボタンをクリックします。「**ワークステーション用パッケージのセットアップ (Setup Package for Workstations)**」ウィンドウがオープンします。
7. ソース・ディレクトリーを入力します。そのソース・ディレクトリーはサーバーとクライアントの両方がアクセスできるロケーションであること、およびそこにはクライアント・ワークステーションから実行するバッチ・ファイルが入っていることを確認します。

8. 「ワークステーション・コマンド行 (Workstation Command Lines)」セクションの下の「新規 (New)」をクリックします。「コマンド行プロパティ (Command Line Properties)」ウィンドウがオープンします。
9. コマンド名を入力します。
10. コマンド行を入力します。
11. 「サポートされているプラットフォーム (Supported Platforms)」セクションの下で、サポートする必要があるプラットフォームのチェック・ボックスをクリックします。
12. 「OK」をクリックします。
13. 「閉じる」をクリックします。
14. 「OK」をクリックします。

インストール・パッケージの場合と同じようにして、このパッケージを配布します。

関連タスク:

- 95 ページの『応答ファイル・インストールのための db2cli.ini の構成』
- 87 ページの『Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 製品のインストール』
- 89 ページの『ネットワークによる DB2 インストール・パッケージの配布』

応答ファイル・インストールのための db2cli.ini の構成

db2cli.ini ファイルは ASCII ファイルですが、これは、DB2 CLI 構成を初期化します。このファイルは、参考用として含まれており、x:%sqllib ディレクトリーに入っています (x:%sqllib は DB2 のインストール・パス)。

手順:

特定の CLI 最適化値または CLI パラメーターを使用する必要がある場合、DB2 クライアント・ワークステーション用にカスタマイズされた db2cli.ini ファイルを使用することができます。そのためには、db2cli.ini ファイルを、各 DB2 クライアント・ワークステーションの DB2 インストール・ディレクトリーにコピーします (例えば c:%Program Files%IBM%SQLLIB)。

関連タスク:

- 93 ページの『サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成』
- 87 ページの『Microsoft Systems Management Server (SMS) による DB2 製品のインストール』

第 4 部 DB2 Web アプリケーション

第 10 章 DB2 用のアプリケーション・サーバー

DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする

DB2 用のアプリケーション・サーバーは、組み込みアプリケーション・サーバーを備えています。これにより、DB2 で提供される Web アプリケーションは、別々にインストールされているアプリケーション・サーバーに依存せずに実行することができます。

DB2 用のアプリケーション・サーバーは、以下の 2 つの CD のいずれかから入手できます。

- CD1 DB2 組み込みアプリケーション・サーバーおよびアプリケーション (XML レジストリー、Web 管理ツール、および Java 分散デバッガー) : Linux (x86、32 ビット)、Linux (iSeries および pSeries)、Linux (S/390、zSeries)、および Windows 32 ビットの場合。
- CD2 DB2 組み込みアプリケーション・サーバーおよびアプリケーション (XML レジストリー、Web 管理ツール、および Java 分散デバッガー) : AIX (32 ビット)、HP-UX、および Solaris オペレーティング環境の場合。

組み込みアプリケーション・サーバーは AIX 4.3.3 ではサポートされていません。

DB2 アプリケーション・サーバーがインストールされると、`AppServer_install_path/bin` 内で、**startServer** および **stopServer** コマンドを使用して、DB2 とは独立して DB2 アプリケーション・サーバーを開始および停止することができます。DB2 で提供されている Web Administration Tools は、組み込まれたアプリケーション・サーバーを使用することができます。

前提条件:

DB2 アプリケーション・サーバーをインストールする前に、以下のことを確認します。

- DB2 ESE バージョン 8.2 以降
- 少なくとも 1 つの DB2 インスタンスが存在する。

制約事項:

以下の制約事項は、Red Hat Linux だけにに関するものです。

デフォルトの Red Hat インストールでは、マシンのホスト名とループバック・アドレス 127.0.0.1 との関連を作成します。加えて、`/etc/nsswitch.conf` ファイルがセットアップされ、ネーム・サーバー (DNS) を使ってサーバーを検索しようとする前に、`/etc/hosts` が使用されます。このループバック処理は、`startServer.sh` などのサーバー開始/停止ユーティリティをハングさせる可能性があります。それでも、サーバーは正常に開始または停止すると思われる。

ホスト名が適切に定義されていることを確認してください。デフォルトの構成では、`/etc/hosts` ファイルにローカル・ホストが定義されています。デフォルトの `/etc/nsswitch.conf` はホスト・ファイルだけを調べ、DNS サーバーは調べません。

この問題を訂正するには、`/etc/hosts` ファイル内の `127.0.0.1` マッピングを除去するか、または、ネーム・サーバーを使用して適切なホスト名の解決が行われるように、ネーム・サービス構成ファイル `/etc/nsswitch.conf` を編集します。例えば、`/etc/hosts` ファイルから下記のような `127.0.0.1` マッピングを除去します。

```
# IP Address name of machine
n.n.n.n hostname.domain.com
127.0.0.1 localhost
```

あるいは、ホスト・ファイルを検索するよりも前に DNS を検索するように `etc/nsswitch.conf` ファイルを変更します。例えば、`hosts : dns files` とします。

手順:

DB2 アプリケーション・サーバーをインストールするには、以下を実行します。

1. UNIX オペレーティング・システムでは **root** として、Windows オペレーティング・システムでは **管理者** 特権を持つユーザーとして、DB2 サーバーにログインします。

2. UNIX ベースのオペレーティング・システムでは、以下のコマンドを実行します。

```
. /db2instance_path/sql1lib/db2profile
```

ここで、`db2instance_path` は、DB2 インスタンスが作成された場所です。

3. 次のコマンドを実行します。

```
db2appserverinstall
-asroot absolute_path_for_App_Server_install
-hostname hostname
```

ここで、`absolute_path_for_App_Server_install` は、DB2 アプリケーション・サーバーをインストールする場所で、`hostname` は、マシンのホスト名です。

4. インストールが成功すると、以下のメッセージが戻されます。

```
EAS001 installation successful.
```

インストールが失敗すると、エラー・メッセージが戻されます。すべてのメッセージは、以下のようにログ・ファイルに書き込まれます。

- UNIX オペレーティング・システムでは、ログ・ファイルは、`/tmp/easInstall.log` 内にあります。
- Windows オペレーティング・システムでは、ログ・ファイルは、`c:%TEMP%easInstall.log` 内にあります。

注:

1. インストールで使用されるデフォルト・ポートは、**20000** です。ただし、代わりに別のポートを使用する場合、使用するポート番号を持つ

`UpdateExpressDB2Ports.bat` または `UpdateExpressDB2Ports.sh` ファイルを編集し、**UpdateExpressPorts** コマンドを実行してください。

2. ポート番号の変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

3. ポートの値を変更した場合、リモート管理はサポートされなくなります。

DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールすると、DB2 Web ツールをインストールしたり、データベースをリモート管理に使用可能にしたり、それら両方を行うこともできます。DB2 Web ツールをインストールする場合、DB2 用のアプリケーション・サーバーはローカルに開始する必要があります。DB2 用のアプリケーション・サーバーを使用可能にした場合、アプリケーション・サーバーは自動的に開始します。

ローカル・コンピューターか、ネットワーク上の別のコンピューターにある DB2 資料に DB2 製品からアクセスできるようにする場合は、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database と DB2 関連製品の資料が収録されています。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルプ・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 108 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをアンインストールする』
- 102 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに開始する』
- 106 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに停止する』
- 101 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーを使用可能にする』
- 104 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをリモート側で開始する』

DB2 用のアプリケーション・サーバーを使用可能にする

DB2 用のアプリケーション・サーバーがインストールされた後に、リモート管理用にデータベースを使用可能にすることができます。

リモート管理フィーチャーを使用したり、ストアド・プロシージャ呼び出しを通してリモート操作を実行するためには、まず、DB2 データベースが使用可能になっている必要があります。

以下のようにして、データベースを使用可能にします。

- 指定したデータベースに接続する
- メタデータ表を作成してデータを追加する
- 管理ストアド・プロシージャを作成する
- DBM CFG パラメーターの JDK_PATH と JAVA_HEAP_SZ を更新する
- DB2 Web サービス・アプリケーションをインストールする

手順:

DB2 用のアプリケーション・サーバーを使用可能にするには、以下を実行します。

1. UNIX オペレーティング・システムでは **root** として、Windows オペレーティング・システムでは **管理者** 特権を持つユーザーとして、DB2 サーバーにログインします。

2. UNIX ベースのオペレーティング・システムでは、以下のコマンドを実行します。

```
. /db2instance_path/sqllib/db2profile
```

ここで、*db2instance_path* は、DB2 インスタンスが作成された場所です。

3. 以下のコマンドを実行します。

- UNIX オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path/bin/enable.sh
-db db_alias
-user db_user
-password db_password
-db2path path_to_sqllib
-instance instance_name
-easpath path_to_eas
-fencedid fenced_userid
```

- Windows オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path%bin%enable
-db db_alias
-user db_user
-password db_password
-db2path path_to_sqllib
-instance instance_name
-easpath path_to_eas
```

各要素の意味は以下のとおりです。

- *db_alias* は、使用可能にするデータベースの別名です。
- *db_user* は、データベースに接続するときに使用するユーザー ID です。
- *db_password* は、データベースへの接続の際にユーザー ID と一緒に使用するパスワードです。
- *path_to_sqllib* は、DB2 インスタンスの `SQLLIB` ディレクトリーへのパスです。このパスは、必要な JAR ファイルとともに `DB2EAS` を更新するために使用します。
- *instance_name* は DB2 インスタンス名です。
- *path_to_eas* は、組み込みアプリケーション・サーバーへのパスです。
- *fenced_userid* は、`fenced` ユーザー用のユーザー ID です。

DB2 用のアプリケーション・サーバーが使用可能にされると、アプリケーション・サーバーは自動的に開始します。

関連タスク:

- 99 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする』
- 104 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする』

DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに開始する

DB2 クライアントは、ネイティブのオペレーティング・システム・コマンド行か、「DB2 コマンド行プロセッサ」ウィンドウのどちらからでも、DB2 用のアプリケーション・サーバーを開始することができます。

リモート管理が構成されているシステムでは、 `fenced` ユーザー ID を使用してアプリケーション・サーバーを開始してください。

手順:

DB2 アプリケーション・サーバーを開始するには、以下を実行します。

1. UNIX オペレーティング・システムでは **root** として、 Windows オペレーティング・システムでは **管理者** 特権を持つユーザーとして、 DB2 サーバーにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

- UNIX オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path/bin/startServer.sh serverName
```

- Windows オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path%bin%startServer serverName
```

ここで、

- `AppServer_install_path` は、 DB2 アプリケーション・サーバーがインストールされたパスです。
 - `serverName` は、 DB2 アプリケーション・サーバーの名前です。
3. サーバーが正常に開始されると、以下のメッセージが表示されます。

```
Server serverName open for e-business; process id is xxxx.
```

このメッセージが表示されない場合は、ログを確認してください。すべてのメッセージは、以下のようにログ・ファイルに書き込まれます。

- UNIX オペレーティング・システムでは、ログ・ファイルは、
`AppServer_install_path/logs/serverName/startServer.log` 内にあります。
- Windows オペレーティング・システムでは、ログ・ファイルは、
`AppServer_install_path%logs%serverName%startServer.log` 内にあります。

ここで、

- `AppServer_install_path` は、 DB2 アプリケーション・サーバーがインストールされたパスです。
- `serverName` は、 DB2 アプリケーション・サーバーの名前です。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルプ・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 99 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする』
- 108 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをアンインストールする』
- 106 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに停止する』

DB2 用のアプリケーション・サーバーをリモート側で開始する

DB2 クライアントは、ネイティブのオペレーティング・システム・コマンド行か、「DB2 コマンド行プロセッサ」ウィンドウのどちらからでも、DB2 用のアプリケーション・サーバーを開始することができます。

手順:

DB2 アプリケーション・サーバーをリモート側で開始するには、以下を実行します。

1. ストアド・プロシージャを実行するために、データベース管理者として定義されている特権を持って、使用可能なデータベースにすでに接続している必要があります。リモート管理ストアド・プロシージャを実行し、基礎となるメタデータ表を更新するための、必要な特権を持っている必要があります。
2. 次のコマンドを実行します。

```
db2 "call db2eas.server('start',?,?)"
```

ここで、

- ? は、エラー・メッセージや警告などの通知を戻すために使用される出力パラメーター・メッセージです。
 - ? は、呼び出し側アプリケーションのエラー検査で使用される整数戻りコードを戻すために使用される、出力パラメーター戻りコードです。
3. サーバーが正常に開始されると、出力パラメーター値が表示されます。例えば、

```
Value of output parameters
-----
Parameter Name : OUTMSG
Parameter Value : Server started
Parameter Name : OUTRC
Parameter Value : 0
Return Status = 0
```

関連タスク:

- 104 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする』

DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする

DB2 Web ツールは、DB2 アプリケーション・サーバー上に自動的にデプロイすることができます。DB2 アプリケーション・サーバーは、DB2 に組み込まれたアプリケーション・サーバーとして機能し、別にインストールされているアプリケーション・サーバーに頼らずに DB2 Web アプリケーションを実行できるようにします。DB2 用のアプリケーション・サーバーは、以下の 2 つの CD のいずれかから入手できます。

- CD1 *DB2 組み込みアプリケーション・サーバーおよびアプリケーション (XML レジストリー、Web 管理ツール、および Java 分散デバッガー)* : Linux (x86、32 ビット)、Linux (iSeries および pSeries)、Linux (S/390、zSeries)、および Windows 32 ビットの場合。

- CD2 DB2 組み込みアプリケーション・サーバーおよびアプリケーション (XML レジストリー、Web 管理ツール、および Java 分散デバッガー) : AIX (32 ビット)、HP-UX、および Solaris オペレーティング環境の場合。

組み込みアプリケーション・サーバーは AIX 4.3.3 ではサポートされていません。

前提条件:

DB2 アプリケーション・サーバーをインストールする前に、以下のことを確認します。

- DB2 ESE バージョン 8.2 以降を実行している。
- 少なくとも 1 つの DB2 インスタンスが存在する。

手順:

DB2 アプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイするには、以下を実行します。

1. 以下のいずれかのコマンドを実行します。

- UNIX オペレーティング・システムの場合は、ディレクトリーを `/bin` (`<AS_root>/bin`) に移動してから、次のコマンドを実行します。

```
db2wa_deploy.sh -db2path db2path -instance instanceName
```

- Windows オペレーティング・システムの場合は、ディレクトリーを `%bin` (`<AS_root>%bin`) に移動してから、次のコマンドを実行します。

```
db2wa_deploy -db2path db2path -instance instanceName
```

ここで、

- `<AS_root>` は、DB2 アプリケーション・サーバーのインストール・パスです。
- `db2path` は、DB2 のインストール・パスです。Windows の場合でも、`db2path` は、円記号ではなくスラッシュを使って入力します。例えば、`C:/Program Files/IBM/SQLLIB` などです。
- `instanceName` は DB2 インスタンス名です。

例えば次のようにします。

```
db2wa_deploy.sh -db2path /home/db2v8/sqlib -instance db2v8
```

2. 以下を入力して、ブラウザから DB2 Web ツールのエンタープライズ・アプリケーションを呼び出します。

```
http://hostname:port_number/db2wa
```

ここで、

- `hostname` は、DB2 サーバーの名前です。
- `port_number` は、アプリケーション・サーバーのインストール後に変更がない限り、デフォルトで **20000** (HTTP 接続の場合)、または **20010** (SSL 接続の場合) です。SSL (Secure Sockets Layer) 接続については、`https://<hostname>:<SSL_port_number>/db2wa` を参照してください。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルプ・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 127 ページの『第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ』

DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに停止する

DB2 クライアントは、ネイティブのオペレーティング・システム・コマンド行か、「DB2 コマンド行プロセッサ」ウィンドウのどちらからでも、DB2 用のアプリケーション・サーバーを停止することができます。

リモート管理が構成されているシステムでは、`fenced` ユーザー ID を使用してアプリケーション・サーバーを停止してください。

手順:

DB2 アプリケーション・サーバーを停止するには、以下を実行します。

1. UNIX オペレーティング・システムでは **root** として、Windows オペレーティング・システムでは **管理者** 特権を持つユーザーとして、DB2 サーバーにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

- UNIX オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path/bin/stopServer.sh serverName
```

- Windows オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path%bin%stopServer serverName
```

ここで、

- `AppServer_install_path` は、DB2 アプリケーション・サーバーがインストールされたパスです。
- `serverName` は、DB2 アプリケーション・サーバーの名前です。

注: DB2 用のアプリケーション・サーバーのためのグローバル・セキュリティが有効になっている場合、サーバーを停止するにはユーザー ID とパスワードが必要です。

3. サーバーが正常に停止されると、以下のメッセージが戻されます。

```
Server serverName stop completed.
```

このメッセージが表示されない場合には、詳細について

`AppServer_install_path/logs/serverName/stopServer.log` を参照してください。

- `AppServer_install_path` は、DB2 アプリケーション・サーバーがインストールされたパスです。
- `serverName` は、DB2 アプリケーション・サーバーの名前です。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルス・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 99 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする』
- 108 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをアンインストールする』
- 102 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに開始する』
- 104 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする』
- 108 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーから DB2 Web ツールをアンインストールする』

DB2 用のアプリケーション・サーバーをリモート側で停止する

DB2 クライアントは、ネイティブのオペレーティング・システム・コマンド行か、「DB2 コマンド行プロセッサ」ウィンドウのどちらからでも、DB2 用のアプリケーション・サーバーを停止することができます。

手順:

DB2 アプリケーション・サーバーをリモート側で停止するには、以下を実行します。

1. ストアード・プロシージャを実行するために、データベース管理者として定義されている特権を持って、使用可能なデータベースにすでに接続している必要があります。リモート管理プロシージャを実行するため、また基礎となるメタデータ表を更新するための、必要な特権を持っている必要があります。
2. 次のコマンドを実行します。

```
db2 "call db2eas.server('stop',[user_id,password],?,?)"
```

ここで、

- *user_id* は、DB2 Global Security 用のアプリケーション・サーバーが使用可能な場合のみ使用されます (オプション)。
 - *password* は、DB2 Global Security 用のアプリケーション・サーバーが使用可能な場合のみ使用されます (オプション)。
 - ? は、エラー・メッセージや警告などの通知を戻すために使用される出力パラメーター・メッセージです。
 - ? は、呼び出し側アプリケーションのエラー検査で使用される整数戻りコードを戻すために使用される、出力パラメーター戻りコードです。
3. サーバーが正常に開始されると、出力パラメーター値が表示されます。

関連タスク:

- 104 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする』
- 108 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーから DB2 Web ツールをアンインストールする』

DB2 用のアプリケーション・サーバーから DB2 Web ツールをアンインストールする

DB2 Web ツールの必要がなくなったら、システムから除去することができます。

手順:

DB2 用のアプリケーション・サーバーから DB2 Web ツールをアンインストールするには、以下を実行します。

1. UNIX オペレーティング・システムでは **root** として、Windows オペレーティング・システムでは **管理者** 特権を持つユーザーとして、DB2 サーバーにログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

- UNIX オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path/bin/db2wa_uninstall.sh
```

- Windows オペレーティング・システムの場合

```
AppServer_install_path\bin\db2wa_uninstall.bat
```

関連タスク:

- 108 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをアンインストールする』
- 106 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに停止する』
- 107 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをリモート側で停止する』

DB2 用のアプリケーション・サーバーをアンインストールする

アプリケーション・サーバーが DB2 で提供される Web アプリケーションを必要としなくなる場合、インストール後にシステムから除去することができます。

制約事項:

アプリケーション・サーバーのアンインストール・プログラムは DB2 を参照します。したがって、DB2 のアンインストールの前にそれを呼び出す必要があります。

手順:

DB2 アプリケーション・サーバーをアンインストールするには、以下を実行します。

1. UNIX オペレーティング・システムでは **root** として、Windows オペレーティング・システムでは **管理者** 特権を持つユーザーとして、DB2 サーバーにログインします。
2. UNIX ベースのオペレーティング・システムでは、以下のコマンドを実行します。

```
./db2instance_path/sql/lib/db2profile
```

ここで、*db2instance_path* は、DB2 インスタンスが作成された場所です。

3. 次のコマンドを実行します。

```
AppServer_install_path/bin/db2appserveruninstall
```

ここで、*AppServer_install_path* は、DB2 アプリケーション・サーバーがインストールされたパスです。

DB2 用のアプリケーション・サーバーから DB2 Web サービス・アプリケーションをアンインストールする

DB2 Web サービス・アプリケーションは、DB2 用のアプリケーション・サーバーが使用可能にされたときに自動的にインストールされています。

DB2 Web サービス・アプリケーションをアンインストールするには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 "call db2eas.uninstallapp('DB2WebServices',[user_id,password],?,?)"
```

ここで、

- *user_id* は、DB2 用のアプリケーション・サーバー内でグローバル・セキュリティが使用可能にされたときに、アプリケーション・サーバーにログオンするために必要なユーザー ID です。
- *password* は、DB2 用のアプリケーション・サーバー内でグローバル・セキュリティが使用可能にされたときに、アプリケーション・サーバーにログオンするために必要なパスワードです。
- ? は、エラー・メッセージや警告などの通知を戻すために使用される出力パラメーター・メッセージです。
- ? は、呼び出し側アプリケーションのエラー検査で使用される整数戻りコードを戻すために使用される、出力パラメーター戻りコードです。

DB2 Web サービス・アプリケーションがアンインストールされた場合、後で再インストールするためには次のコマンドを入力します。

```
db2 "call db2eas.installApp('DB2WebServices',[user_id,password],?,?)"
```

ここで、

- *user_id* は、DB2 用のアプリケーション・サーバー内でグローバル・セキュリティが使用可能にされたときに、アプリケーション・サーバーにログオンするために必要なユーザー ID です。
- *password* は、DB2 用のアプリケーション・サーバー内でグローバル・セキュリティが使用可能にされたときに、アプリケーション・サーバーにログオンするために必要なパスワードです。
- ? は、エラー・メッセージや警告などの通知を戻すために使用される出力パラメーター・メッセージです。
- ? は、呼び出し側アプリケーションのエラー検査で使用される整数戻りコードを戻すために使用される、出力パラメーター戻りコードです。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルプ・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』

- 99 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする』
- 102 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに開始する』
- 106 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに停止する』

第 11 章 DB2 Web ツール

DB2 Web コマンド・センター

DB2[®] Web コマンド・センターは、DB2 Web ヘルス・センターとともに DB2 Web ツールのひとそろいの一部であり、これにより、DB2 データベース・サーバーのリモート管理が可能になります。これらのツールは、Web サーバー上の Web アプリケーション・サーバーとして実行され、Web ブラウザーを介して DB2 サーバーへのアクセスを提供します。

DB2 Web コマンド・センターは 3 層のアーキテクチャーに基づいています。最初の層は Web クライアント HTTP ブラウザーです。真ん中の層は、ビジネス・ロジックおよびアプリケーションのセットが入れられる、アプリケーション・サーバーです。この真ん中の層は、最初の層 (Web クライアント・ブラウザ) および 3 番目の層 (データベースまたはトランザクション・サーバー) との (HTTP/HTTPS) 通信に関する基礎的な機構を提供します。このアーキテクチャーでは、Web (HTTP) サーバーおよびサーブレット・コンテナ (Sun[™] のサーブレット仕様によって定義される) の存在を暗黙指定します。このタイプのサーバーとサーブレット・コンテナの組み合わせは、サーブレット対応 Web サーバーとも呼ばれ、BEA WebLogic や IBM[®] WebSphere[®] などの、商用アプリケーション・サーバーの基本的な機能を構成します。3 つの層から成るアーキテクチャーであるため、クライアント HTTP ブラウザー (最初の層) と DB2 サーバー (3 番目の層) があれば、コードは真ん中の層にインストールするだけで済みます。

DB2 Web コマンド・センターは、DB2 コマンド・センターの既存の機能の多くをインプリメントしていますが、SQL Assist および Visual Explain は備えていません。

DB2 Web コマンド・センターは、Web 対応 PDA や Palm デバイスだけでなく、モバイルのラップトップやノートブック上で使用できる HTTP クライアント (ブラウザ) と共に使用することを意図しています。

関連概念:

- 112 ページの『DB2 Web ヘルス・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 118 ページの『WebLogic アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 121 ページの『その他のアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 127 ページの『第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ』

DB2 Web ヘルス・センター

DB2[®] Web ヘルス・センターは、DB2 Web コマンド・センターとともに DB2 Web ツールのひとそろいの一部であり、これにより、DB2 データベース・サーバーのリモート管理が可能になります。これらのツールは、Web サーバー上の Web アプリケーション・サーバーとして実行され、Web ブラウザーを介して DB2 サーバーへのアクセスを提供します。

DB2 Web ヘルス・センターを使用して、DB2 インスタンスのヘルスに関連したデータを Web に外部化できます。この内部データは、サーバー・サイドのヘルス・モニター・プロセスによって提供されます。サーバー・サイドのプロセスは UNIX[®] および Windows[®] でしかサポートされていませんが、DB2 Web ヘルス・センターは任意の HTML 4.0 対応 Web ブラウザーからアクセスできます。

このツールの主な機能は、インスタンス、データベース、およびデータベース・オブジェクトのヘルス・モニター・データのリモート検索をサポートし、問題の発生時に行う、解決のための推奨処置を提供することです。

ヘルス・モニター・プロセスでは、アラートまたは警告 (あるいはその両方) の E メール通知が生成されます。インストール中に、通知の送信先になるデフォルトの連絡先 (つまり、E メール・アドレス) を設定しなければなりません。これらの通知には、Web ヘルス・センター (WHC) へのアクセス方法に関する情報が含まれません。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 118 ページの『WebLogic アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 121 ページの『その他のアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 127 ページの『第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ』

第 12 章 アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ

DB2 Web ツールのデプロイ用に推奨されるアプリケーション・サーバー

DB2 Web ツールのデプロイ用に推奨されるアプリケーション・サーバーは、DB2 用の組み込みアプリケーション・サーバーです。推奨される方式は、用意されている自動化スクリプトを使用することです。

DB2 用の組み込みアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイは、以下の順序で行うようお勧めします。

1. DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする
2. DB2 用のアプリケーション・サーバーを開始する
3. DB2 用のアプリケーション・サーバー上で自動的にデプロイする

関連タスク:

- 99 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをインストールする』
- 102 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバーをローカルに開始する』
- 104 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする』

WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ

ここでは、WebSphere 4.0 で DB2 Web ツール (Web コマンド・センターおよび Web ヘルス・センター) をデプロイおよび構成する方法について説明します。これらのツールは、Web サーバー上の Web サーバーとして実行され、Web ブラウザーを介して DB2 サーバーへのアクセスを提供します。

DB2 アプリケーション・サーバー (*Java Application Development and Web Administration Tools Supplement for DB2 CD-ROM* から入手できます) は、DB2 に組み込まれたアプリケーション・サーバーとして機能し、別にインストールされているアプリケーション・サーバーに頼らずに DB2 Web アプリケーションを実行できるようにします。

注: DB2 アプリケーション・サーバーを使用すれば、以下に詳述されている手順に従って DB2 Web ツールの自動デプロイメントを行えます。

前提条件:

WebSphere に DB2 Web ツールをインストールする場合、以下が必要です。

- IBM WebSphere Application Server 4.0 以降。IBM WebSphere 4.0 は、`prereq.properties` ファイルを変更した後で、DB2 バージョン 8 データベースを Administration Server データベース (WAS40) として使用してインストールできま

す。 `prereq.properties` は、IBM WebSphere 4.0 のインストールを開始する `Setup.exe` と同じパスにあり、以下のように変更する必要があります。

```
[WAS]: prereq_checker=0
```

これは、変更前は以下のようになっています。

```
[WAS]: prereq_checker=1
```

これにより、データベース・バージョン・チェックの検査を通過できます。

- IBM DB2 Administration Client バージョン 8。
- HTML 4.0 と互換性のある Web ブラウザー。

注: DB2 Web ツールは、Netscape 4.x、Netscape 6.x、Netscape 7.x、Mozilla 1.x、Internet Explorer 5.x、Opera 6.x、Konqueror 3.x (Linux)、および EudoraWeb 2.x (Palm OS) を使ってテスト済みです。テスト済みでない Web ブラウザーを使用する場合は、サーブレット構成に対して明示的に参照を追加する必要がある場合があります。

制約事項:

Web 環境の DB2 Web ツールには、以下の制限が適用されます。

1. DB2 Web ツールのエンタープライズ・アプリケーションで使用するために、新しい仮想ホストおよびアプリケーション・サーバーを作成するようにお勧めします。 `classpath` を変更することにより変更できるデフォルト・サーバーおよび `default_host` が WebSphere に含まれている場合、新しい仮想ホストまたはアプリケーション・サーバーの作成は必須ではありません。
2. 複数言語および中間層 (middle tier) と DB2 サーバー間のコード・ページ変換は、サポートされていません。サーバーの言語は表示されているとおりですが、文字が正しく表示されない場合があります。
3. データベース、表スペース、および Web ヘルス・センター内の表スペース・コンテナのヘルス・アラートを表示するには、データベースが Web アプリケーション・サーバー上でカタログされている必要があります。
4. Web ブラウザーのボタンの使用 (「中止」、「戻る」、「履歴」) は、DB2 Web ツールの使用中はサポートされていません。
5. Netscape Navigator 4 で DB2 Web ツールを使用している場合は、ブラウザー表示が正常に更新されない場合があります。この問題が起こった場合は、ウィンドウを最小化して、再び元に戻すことで表示を最新表示できます。他のウィンドウにブラウザー・ウィンドウを隠し、再び前面に戻すことでも、表示を最新表示できます。
6. DB2 システム、インスタンス・ノード、またはデータベースに独自の別名を割り当てるには、DB2 構成アシスタントまたは DB2 コントロール・センターを使用して、アプリケーション・サーバーでそれらを明示的にカタログする必要があります。
7. DB2 Web ツールの最初の始動には、その後の始動に比べて初期化に非常に長い時間が必要です。待ち時間のほとんどは、自動カタログ処理によるものです。自動カタログ機能を使用したくない場合は、サーブレット構成でカタログをオフにすることで、待ち時間を短くすることができます。

注: サブレット構成パラメーターは、デプロイメント記述子ファイル `web.xml` にあります。パラメーター名およびデフォルト値は、リリースによって変更される場合があります。アプリケーション・サーバーでは、`web.xml` ファイルを直接編集してこれらのパラメーターを変更することができます。アプリケーション・サーバーによっては、編集用のグラフィカル・インターフェースを備えているものもあります。

8. デスクトップまたはラップトップ・ブラウザの使用時の出力 (結果) バッファは、1MB 以上に構成されていたとしても、絶対最大サイズは 1MB になります。PDA Web ブラウザーの場合、その上限は 1KB です。
9. Windows および UNIX オペレーティング・システムでは、DB2 Web ツールはアプリケーション・サーバーと同じ TCP/IP ネット上のすべてのシステムを自動的に検出してカタログします。同じ TCP/IP ネット上のシステムの場合、それぞれの IP アドレスの最初の 3 桁は同じです。このツールは、元のリモート TCP/IP ホスト名を使って、DB2 システム・ノードのカタログを試みます。名前が重複している場合、ツールによってランダムで一意的な名前が割り当てられます。アプリケーション・サーバー上の他の DB2 管理サーバーの場合はすべて、アクセス可能にしたければ明示的にカタログする必要があります。それには、アプリケーション・サーバーと同じ TCP/IP ネット上にない、TCP/IP を使用するすべてのサーバーと、TCP/IP を使用しないすべてのサーバーが含まれます。
10. Windows および UNIX オペレーティング・システムでは DB2 Web ツールは、カタログ済みの DB2 システムに置かれているすべての DB2 インスタンス・ノードとデータベースの自動検出とカタログを試みます。複数の通信プロトコル用に 1 つのリモート・インスタンスを構成することは可能なので、カタログでは、自動的にカタログされたインスタンスでサポートされているプロトコルごとに、別々のノード項目が入れます。名前が重複している場合、ツールによってランダムで一意的な名前が割り当てられます。

手順:

WebSphere Application Server に DB2 Web ツールをインストールするために、以下を実行します。

1. 以下のようにして、WebSphere 管理コンソールから DB2 Web ツールのアプリケーションを準備します。
 - a. WebSphere Application Server を開始して、WebSphere 管理コンソールをオープンします。
 - b. 「**WebSphere 管理可能ドメイン (WebSphere Administrative Domain)**」をクリックし、ウィンドウの左側のペインから「**仮想ホスト (Virtual Hosts)**」をクリックして、新しい仮想ホストを作成します。
 - c. 「**仮想ホスト (Virtual Hosts)**」を選択して右マウス・ボタンをクリックし、「**新規 (New)**」を選択します。
 - d. 「**名前 (Name)**」フィールドに `db2tools_host` を入力し、「**追加 (Add)**」をクリックします。
 - e. 「**ホスト別名 (Host Aliases)**」見出しの下に、ポート 9090 が使用可能であるという前提で、値 `<*:9090>` を入力するか、またはその他の使用可能な TCP/IP ポートを使用します。

- f. 「**WebSphere 管理可能ドメイン (WebSphere Administrative Domain)**」をクリックし、ウィンドウの左側のペインから「**ノード**」を拡張して、新しいアプリケーション・サーバーを作成します。任意の名前を使用できますが、セットアップ手順のあとの方でこれを再び使用するのを忘れないでください。「**ノード (Nodes)**」ディレクトリーの下の適当なサーバー名を拡張します。「**アプリケーション・サーバー (Application Servers)**」を右マウス・ボタンをクリックし、「**新規 (New)**」を選択します。値を以下のようにします。

1) 「**一般 (General)**」タブで、WebSphere/AppServer/bin に、インストール・ディレクトリーを使用する作業ディレクトリー の値を入力します。例えば [...]¥WebSphere¥AppServer¥bin がインストール・ディレクトリーの場合は、「作業ディレクトリー」フィールドに入力します。

2) 「**ファイル (File)**」:

- ¥WebSphere¥AppServer/logs/DB2Tools_stdout.txt に、インストール・ディレクトリーを使用する標準出力 を入力します。
- ¥WebSphere¥AppServer/logs/DB2Tools_stderr.txt に、インストール・ディレクトリーを使用する標準エラー を入力します。

注: そのほかのデフォルト値は、セットアップ手順で使用できます。ただし、正常にデプロイメントおよび実行が行われた後で、必要に応じて値を変更することができます。

2. DB2 コマンド・ウィンドウから DB2 Web ツールの構成をインポートします。

a. 以下の DB2 Web ツールの構成ファイルから db2wa.war を抜き出します (unzip ユーティリティを使用して)。

- ImportDB2WebTools.xml、および
- ImportDB2WebTools.bat

そして、これらを WebSphere¥AppServer¥bin に置きます。

注:

1) Windows でのデプロイメントの場合、構成ファイルは web-inf ディレクトリーに置かれます。AIX、Linux、またはその他の UNIX プラットフォームの場合、このファイルは web-inf¥aix ディレクトリーに置かれます。

2) **ImportDB2WebTools.bat** は、その暗黙的なフォルダー・パスなしでアーカイブから抽出する必要があります (デフォルトでは、このファイルは web-inf ディレクトリーの下にあります)。これは、WinZip GUI の「**Use folder names**」を選択解除するか、または後でファイルが ¥bin¥web-inf から ¥bin に移動されることを確認することで、解凍できます。

b. 「**スタート**」 → 「**プログラム**」 → 「**IBM DB2**」 → 「**コマンド行ツール**」 → 「**コマンド・ウィンドウ**」 をクリックして、DB2 コマンド・ウィンドウをオープンします。ディレクトリー WebSphere¥AppServer¥bin に移動します。

c. 以下のコマンドを実行します。

```
ImportDB2WebTools.bat [server_name][application_server_name]
```

server_name はサーバーのホスト名です。 application_server_name は以前に WebSphere Administrator のコンソールで作成されたアプリケーション・サーバーの名前です。管理コンソールを使用する前に、このコマンドを実行してください。

注: すべてのスクリプト・パラメーターには大文字小文字の区別があります。一致しない場合、新しいアプリケーション・サーバーが作成されません。

- d. WebSphere 管理コンソールに戻ります。
3. 次のようにして、 WebSphere 管理コンソールから DB2 Web ツールのエンタープライズ・アプリケーションをインストールします。
 - a. 「**WebSphere 管理可能ドメイン (WebSphere Administrative Domain)**」で「**エンタープライズ・アプリケーション (Enterprise Applications)**」を右マウス・ボタンをクリックし、「**エンタープライズ・アプリケーションのインストール (Install Enterprise Application)**」メニュー項目を選択します。「**エンタープライズ・アプリケーションのインストール・ウィザード (Install Enterprise Application Wizard)**」ウィンドウが開きます。
 - b. 「**スタンドアロン・モジュール (*.war, *.jar) のインストール (Install stand-alone module (*.war, *.jar))**」ラジオ・ボタンを選択します。
 - c. `SQLLIB\tools\web\db2wa.war` ファイル (つまり、 Web アプリケーションの DB2 Web ツールのセット) を見つけてブラウズします。アプリケーション名およびコンテキスト・ルートには、以下の値を入力しなければなりません。
 - アプリケーション名: DB2 Web Tools
 - コンテキスト・ルート: /db2wa

注: /db2wa は必須名です。これを指定しないと、アプリケーションが失敗します。

- d. 「**仮想ホストの選択 (Select Virtual Host)**」が表示されるまで「**次へ (Next)**」をクリックし、すでにすでに作成または判別されている仮想ホストを選択します。
 - e. 「**サーバーの選択 (Select Server)**」が表示されるまで「**次へ (Next)**」をクリックし、すでにすでに作成または判別されているアプリケーションを選択します。「**完了 (Finish)**」をクリックします。
 - f. DB2 Web ツールのインストールでを使用したアプリケーション・サーバーを開始します。イベント・メッセージで、仮想ホストに選択した適切な HTTP ポートが報告されているか確認します。例えば、
Transport http is listening on port 9,090.
- 注:** ポートが一致していなければ、アプリケーション・サーバーを停止して、仮想ホスト・ポートを、イベント・メッセージに報告した値に変更しなければなりません。

4. WebSphere Application Server を停止します。
5. 以下を入力して、ブラウザから DB2 Web ツールのエンタープライズ・アプリケーションを呼び出します。

`http://localhost:port_number/db2wa`

ここで、localhost は新しいアプリケーション・サーバーの作成に使用したノード名、port number はアプリケーション・サーバーの開始後にイベント・メッセージで報告されている値です。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルス・センター』

関連タスク:

- 118 ページの『WebLogic アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 121 ページの『その他のアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 127 ページの『第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ』
- 104 ページの『DB2 用のアプリケーション・サーバー上に DB2 Web ツールを自動的にデプロイする』

WebLogic アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ

ここでは、BEA WebLogic 7.0 で DB2 Web ツール (Web コマンド・センターおよび Web ヘルス・センター) をデプロイおよび構成する方法について説明します。これらのツールは、Web サーバー上の Web サーバーとして実行され、Web ブラウザーを介して DB2 サーバーへのアクセスを提供します。

前提条件:

WebSphere に DB2 Web ツールをインストールする場合、以下が必要です。

- BEA WebLogic 7.0 アプリケーション・サーバー。
- IBM DB2 Administration Client バージョン 8。
- HTML 4.0 と互換性のある Web ブラウザー。

注: DB2 Web ツールは、Netscape 4.x、Netscape 6.x、Netscape 7.x、Mozilla 1.x、Internet Explorer 5.x、Opera 6.x、Konqueror 3.x (Linux)、および EudoraWeb 2.x (Palm OS) を使ってテスト済みです。テスト済みでない Web ブラウザーを使用する場合は、サブレット構成に対して明示的に参照を追加する必要がある場合があります。

制約事項:

DB2 Web ツール・デプロイメントには、以下の制約事項が適用されます。

1. 複数言語および中間層 (middle tier) と DB2 サーバー間のコード・ページ変換は、サポートされていません。サーバーの言語は表示されているとおりで、文字が正しく表示されない場合があります。
2. データベース、表スペース、および Web ヘルス・センター内の表スペース・コンテナのヘルス・アラートを表示するには、データベースが Web アプリケーション・サーバー上でカタログされている必要があります。

3. Web ブラウザーのボタンの使用（「中止」、「戻る」、「履歴」）は、DB2 Web ツールの使用中はサポートされていません。
4. Netscape Navigator 4 で DB2 Web ツールを使用している場合は、ブラウザー表示が正常に更新されない場合があります。この問題が起こった場合は、ウィンドウを最小化して、再び元に戻すことで表示を最新表示できます。他のウィンドウにブラウザー・ウィンドウを隠し、再び前面に戻すことでも、表示を最新表示できます。
5. DB2 システム、インスタンス・ノード、またはデータベースに独自の別名を割り当てるには、DB2 構成アシスタントまたは DB2 コントロール・センターを使用して、アプリケーション・サーバーでそれらを明示的にカタログする必要があります。
6. DB2 Web ツールの最初の始動には、その後の始動に比べて初期化に非常に長い時間が必要です。待ち時間のほとんどは、自動カタログ処理によるものです。自動カタログ機能を使用したくない場合は、サブレット構成でカタログをオフすることで、待ち時間を短くすることができます。

注: サブレット構成パラメーターは、デプロイメント記述子ファイル `web.xml` にあります。パラメーター名およびデフォルト値は、リリースによって変更される場合があります。アプリケーション・サーバーの中には、インターフェースを通じて、または直接 `web.xml` ファイルを編集することで、これらのパラメーターの変更を許可するものがあります。

7. デスクトップまたはラップトップ・ブラウザーの使用時の出力（結果）バッファは、1MB 以上に構成されていたとしても、絶対最大サイズは 1MB になります。PDA Web ブラウザーの場合、その上限は 1KB です。
8. Windows および UNIX オペレーティング・システムでは、DB2 Web ツールはアプリケーション・サーバーと同じ TCP/IP ネット上のすべてのシステムを自動的に検出してカタログします。同じ TCP/IP ネット上のシステムの場合、それぞれの IP アドレスの最初の 3 桁は同じです。このツールは、元のリモート TCP/IP ホスト名を使って、DB2 システム・ノードのカタログを試みます。名前が重複している場合、ツールによってランダムで一意的な名前が割り当てられます。アプリケーション・サーバー上の他の DB2 管理サーバーの場合はすべて、アクセス可能にしたければ明示的にカタログする必要があります。それには、アプリケーション・サーバーと同じ TCP/IP ネット上にない、TCP/IP を使用するすべてのサーバーと、TCP/IP を使用しないすべてのサーバーが含まれます。
9. Windows および UNIX オペレーティング・システムでは DB2 Web ツールは、カタログ済みの DB2 システムに置かれているすべての DB2 インスタンス・ノードとデータベースの自動検出とカタログを試みます。複数の通信プロトコル用に 1 つのリモート・インスタンスを構成することは可能なので、カタログでは、自動的にカタログされたインスタンスでサポートされているプロトコルごとに、別々のノード項目が入れます。名前が重複している場合、ツールによってランダムで一意的な名前が割り当てられます。

手順:

WebLogic アプリケーション・サーバーに DB2 Web ツールをインストールするために、以下を実行します。

1. 以下を完了させて、WebLogic アプリケーション・サーバーへの DB2 Web ツールの JVM classpath を構成します。

- a. WebLogic インストール・パス `weblogic700¥server¥bin` 内の **startWLS.cmd** を探します。例えば、
`D:¥BEA¥weblogic700¥server¥bin¥`
- b. 以下の行を探します。

```
set CLASSPATH=%JAVA_HOME¥lib¥tools.jar;
    %WL_HOME¥server¥lib¥weblogic_sp.jar;
    %WL_HOME¥server¥lib¥weblogic.jar;%CLASSPATH%
```
- c. 上記の行の後に、以下を挿入します。 `set CLASSPATH` の行は、改行を使わずに 1 行のテキスト行内に入力する必要があります。

```
set DB2PATH=DB2_install_path
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;%DB2PATH¥tools¥web¥webtools.jar;
    %DB2PATH¥tools¥databasean.jar;%DB2PATH¥tools¥xalan.jar;
    %DB2PATH¥tools¥xercesImpl.jar;%DB2PATH¥tools¥xml-apis.jar;
    %DB2PATH¥tools¥db2das.jar;%DB2PATH¥tools¥db2cmn.jar;
    %DB2PATH¥tools¥db2ca.jar;%DB2PATH¥tools¥db2cc.jar;
    %DB2PATH¥tools¥db2hcapi.jar;%DB2PATH¥tools¥db2ssmonapis.jar;
    %DB2PATH¥java¥Common.jar;%DB2PATH¥java¥db2java.zip;
```

注:

- 1) `set CLASSPATH` の行は、スペースも改行も入れずに 1 行で入力しなければなりません。
 - 2) Linux および UNIX オペレーティング・システムでは、円記号 (¥) の代わりにスラッシュ (/) を使用します。
2. 以下を完了させて、WebLogic 管理コンソールを介して DB2 Web ツールをデプロイします。
 - a. WebLogic 管理コンソールを開始します。
 - b. ウィンドウの左側のペインで、「ドメイン (domain)」 → 「デプロイメント (deployments)」 → 「Web アプリケーション (Web Applications)」をクリックします。
 - c. 「新しい Web アプリケーションの構成 (Configure a new Web Application)」リンクをクリックして、DB2 Web ツールの Web アプリケーションをインストールします。
 - d. ファイル・システムのリストをブラウズして、`Sqllib¥tools¥web¥db2wa.war` を見つけます。
 - e. `db2wa.war` ファイル名の横にある「選択 (select)」を選択します。
 - f. 選択可能なサーバーのリストから DB2 Web ツールを入れるサーバーを選択し、矢印をクリックしてターゲット・サーバーに移動させます。

注: DB2 Web ツールでハードコーディングされているため、オリジナルの名前である `db2wa` はそのまま使用しなければなりません。

- g. 「構成およびデプロイ (Configure and Deploy)」ボタンをクリックします。
 - h. 選択したサーバー上の Web アプリケーションのデプロイメント状況を、アプリケーション・サーバーがリフレッシュするまで待ちます。正常に行われた場合、「**Deployed=true**」が表示されます。
3. 以下の場所にある DB2 Web ツールの Web アプリケーションを呼び出します。

`http://server_name:app_server_port_number/db2wa`

例えば、 `http://server_name:7001/db2wa` などです。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルス・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 121 ページの『その他のアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 127 ページの『第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ』

その他のアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ

ここでは、Tomcat 4.0 や Macromedia JRun 4.0 などのほかのアプリケーション・サーバーで DB2 Web ツール (Web コマンド・センターおよび Web ヘルス・センター) をデプロイおよび構成する方法について説明します。これらのツールは、Web サーバー上の Web サーバーとして実行され、Web ブラウザーを介して DB2 サーバーへのアクセスを提供します。

前提条件:

DB2 Web ツールをインストールする場合、以下が必要です。

- 以下のようなアプリケーション・サーバー。
 - Tomcat 4.0 Servlet/JSP Container (<http://jakarta.apache.org/tomcat/>)
 - Macromedia JRun 4.0
- IBM DB2 Administration Client バージョン 8。
- HTML 4.0 と互換性のある Web ブラウザー。

制約事項:

DB2 Web ツール・デプロイメントには、以下の制約事項が適用されます。

1. 複数言語および中間層 (middle tier) と DB2 サーバー間のコード・ページ変換は、サポートされていません。サーバーの言語は表示されているとおりで、文字が正しく表示されない場合があります。
2. データベース、表スペース、および Web ヘルス・センター内の表スペース・コンテナのヘルス・アラートを表示するには、データベースが Web アプリケーション・サーバー上でカタログされている必要があります。
3. Web ブラウザーのボタンの使用 (「中止」、「戻る」、「履歴」) は、DB2 Web ツールの使用中はサポートされていません。
4. Netscape Navigator 4 で DB2 Web ツールを使用している場合は、ブラウザー表示が正常に更新されない場合があります。この問題が起こった場合は、ウィンドウを最小化して、再び元に戻すことで表示を最新表示できます。他のウィンドウにブラウザー・ウィンドウを隠し、再び前面に戻すことで、表示を最新表示できます。

5. DB2 システム、インスタンス・ノード、またはデータベースに独自の別名を割り当てるには、DB2 構成アシスタントまたは DB2 コントロール・センターを使用して、アプリケーション・サーバーでそれらを明示的にカタログする必要があります。
6. DB2 Web ツールの最初の始動には、その後の始動に比べて初期化に非常に長い時間が必要です。待ち時間のほとんどは、自動カタログ処理によるものです。自動カタログ機能を使用したくない場合は、サーブレット構成でカタログをオフにすることで、待ち時間を短くすることができます。

注: サーブレット構成パラメーターは、デプロイメント記述子ファイル `web.xml` にあります。パラメーター名およびデフォルト値は、リリースによって変更される場合があります。アプリケーション・サーバーの中には、インターフェースを通じて、または直接 `web.xml` ファイルを編集することで、これらのパラメーターの変更を許可するものがあります。

7. デスクトップまたはラップトップ・ブラウザの使用時の出力 (結果) バッファは、1MB 以上に構成されていたとしても、絶対最大サイズは 1MB になります。PDA Web ブラウザーの場合、その上限は 1KB です。
8. Windows および UNIX オペレーティング・システムでは、DB2 Web ツールはアプリケーション・サーバーと同じ TCP/IP ネット上のすべてのシステムを自動的に検出してカタログします。同じ TCP/IP ネット上のシステムの場合、それぞれの IP アドレスの最初の 3 桁は同じです。このツールは、元のリモート TCP/IP ホスト名を使って、DB2 システム・ノードのカタログを試みます。名前が重複している場合、ツールによってランダムで一意的な名前が割り当てられます。アプリケーション・サーバー上の他の DB2 管理サーバーの場合はすべて、アクセス可能にしなければ明示的にカタログする必要があります。それには、アプリケーション・サーバーと同じ TCP/IP ネット上にない、TCP/IP を使用するすべてのサーバーと、TCP/IP を使用しないすべてのサーバーが含まれます。
9. Windows および UNIX オペレーティング・システムでは DB2 Web ツールは、カタログ済みの DB2 システムに置かれているすべての DB2 インスタンス・ノードとデータベースの自動検出とカタログを試みます。複数の通信プロトコル用に 1 つのリモート・インスタンスを構成することは可能なので、カタログでは、自動的にカタログされたインスタンスでサポートされているプロトコルごとに、別々のノード項目が入れられます。名前が重複している場合、ツールによってランダムで一意的な名前が割り当てられます。

手順:

以下に、Tomcat 4.0 や Macromedia JRun 4.0 などのアプリケーション・サーバーを使用して、DB2 Web ツールをインストールする際の手順を示します。

Tomcat 4.0

1. 以下を完了して、Tomcat 4.0 構成ファイル (CLASSPATH) を準備します。
 - a. 新しい environment/system 変数 **CATALINA_HOME** を作成して、Tomcat 4.0 へのパス (ルート・ディレクトリー) を入れます。例えば、`D:¥jakarta-tomcat-4.0.3` などです。

注: このステップは Windows オペレーティング・システムでは必要ありませんが、**ステップ c** は、この値の設定か、または使用するオリジナルのパスに応じて異なります。

- b. 以下のように、Tomcat 4.0 Servlet/JSP Container がしているかを確認します。
 - 1) Tomcat の bin ディレクトリーから **startup.bat** を実行して、Tomcat を開始します。
 - 2) Web ブラウザーを使用してメインの Web ページ **http://localhost:8080/** にアクセスします。
 - 3) Tomcat の bin ディレクトリーから **shutdown.bat** を実行するか、または Tomcat を開始したオリジナルのコマンド・ウィンドウをクローズして、Tomcat をシャットダウンします。
- c. bin ディレクトリー内にある **setclasspath.bat** 構成ファイルを変更します。set CLASSPATH の行は、改行を使わずに 1 行のテキスト行内に入力する必要があります。例えば、ファイルの最後に以下を入力することで、D:\jakarta-tomcat-4.0.3\bin 内にある **setclasspath.bat** 構成ファイルを変更します。

```
set CLASSPATH=%CLASSPATH%; %CATALINA_HOME%\common\lib\
servlet.jar;%DB2PATH%\tools\web\webtools.jar;
%DB2PATH%\tools\xalan.jar;%DB2PATH%\tools\xercesImpl.jar;
%DB2PATH%\tools\xml-apis.jar;%DB2PATH%\tools\db2cmn.jar;
%DB2PATH%\tools\db2das.jar;%DB2PATH%\tools\db2ca.jar;
%DB2PATH%\tools\db2cc.jar;%DB2PATH%\tools\db2hcapi.jar;
%DB2PATH%\tools\databasean.jar;%DB2PATH%\tools\db2ssmonapis.jar;
%DB2PATH%\java\Common.jar;%DB2PATH%\java\db2java.zip
```

注:

- 1) set CLASSPATH の行は、スペースも改行も入れずに 1 行で入力しなければなりません。
 - 2) Tomcat 4.1.x をご使用の場合は、参照変数 %DB2PATH% を使用することはできません。パスを明示的に指定する必要があります。
2. DB2 Web ツールのインストール・パス (つまり、Sql1lib\tools\web\db2wa.war) を見つけて、**db2wa.war** を Tomcat のデプロイメント・ディレクトリー (つまり、Tomcat の webapps ディレクトリー) にコピーし、DB2 Web ツールを Tomcat Servlet/JSP Container にデプロイします。
 3. 以下を完了して、Tomcat Servlet/JSP Container で DB2 Web ツールを呼び出します。
 - a. DB2 コマンド・ウィンドウを開いて、ディレクトリーを Tomcat の bin ディレクトリーに移動します。
 - b. **startup.bat** を使用して Tomcat を開始し、新しいディレクトリー (**db2wa**) が webapps ディレクトリーに追加されているか確認します。

注: コマンド・ウィンドウからの **startup.bat** の実行では、DB2PATH は設定されません。それを有効にするには、

%DB2PATH% 環境変数ではなく DB2 インストール・パスを明示的に参照するように、CLASSPATH 行を変更する必要があります。

- c. DB2 Web ツールのエンタープライズ・アプリケーションは **http://localhost:8080/db2wa** に置かれ、HTML 4.0 対応の Web ブラウザーでアクセスできます。

JRun

1. 以下を完了して、DB2 Web ツールに新しいアプリケーション・サーバーを準備します。

注: 新しいアプリケーション・サーバーを作成するようにお勧めしますが、必須ではありません。テスト目的の場合、デフォルト・サーバーを使用でき、JVM classpath およびデプロイメントの構成だけが必須です。

- a. JRun Management Console を開始して、アプリケーション・サーバーの管理者としてログインします。
 - b. メイン・ページの右側にある「**新しいサーバーの作成 (Create New Server)**」を使用して、新しいアプリケーション・サーバーを作成します。ホスト名の選択は localhost から変更しないでください。
 - c. 新しいサーバー名 (**DB2WebToolsServer**) を入力して、「JRun サーバー・ディレクトリー (JRun Server Directory)」をクリックします。値が自動的に入力されます。
 - d. 「**サーバーの作成 (Create Server)**」ボタンをクリックします。
 - e. 生成された値を記録するか、または以下に新しい値を入力します。
 - 「JNDI プロバイダーの URL (JNDI Provider URL)」
 - 「Web サーバーのポート番号 (Web Server Port Number)」。DB2 Web ツールの URL に使用される値になります (つまり、`http://localhost:web_server_port_numer/db2wa`)
 - 「Web コネクターのプロキシ・ポート番号 (Web Connector Proxy Port Number)」
 - f. 必要に応じて「**ポート番号の更新 (update port numbers)**」をクリックし、ウィンドウを閉じます。
2. 以下を完了させて、アプリケーション・サーバーへの JVM classpath を構成します。

- a. コンテンツの表 (左側のパネル) 中の新たに作成された「**DB2WebToolsServer**」を選択し、「**設定 (Settings)**」を選択して、「**JVM 設定 (JVM Settings)**」をクリックします。
- b. `DB2_install_path` をシステム上の明示的な値で置換してから、以下の値の入った「**新しい classpath (New Classpath)**」に新しい項目を追加します。以下は、改行を使わずに 1 行のテキスト行内に入力する必要があります。

```
DB2_install_path%tools%web%webtools.jar;  
DB2_install_path%tools%databean.jar;  
DB2_install_path%tools%xalan.jar;  
DB2_install_path%tools%xercesImpl.jar;  
DB2_install_path%tools$xml-api.jar;
```

```
DB2_install_path%tools%db2das.jar;  
DB2_install_path%tools%db2cmn.jar;  
DB2_install_path%tools%db2ca.jar;  
DB2_install_path%tools%db2cc.jar;  
DB2_install_path%tools%db2hcapi.jar;  
DB2_install_path%tools%db2ssmonapis.jar;  
DB2_install_path%java%Common.jar;  
DB2_install_path%java%db2java.zip
```

3. 以下を完了させて、JRun アプリケーション・サーバーでの DB2 Web ツールをデプロイします。
 - a. DB2 Web ツールの Web アプリケーションを入れるように選択したアプリケーション・サーバー (DB2WebToolsServer、デフォルトまたは admin 以外のほかの任意のもの) を開始します。
 - b. 「**Web アプリケーション (Web Applications)**」をクリックしてから、「**追加 (Add)**」をクリックします。
 - c. 「**デプロイメント・ファイル (Deployment File)**」セクションをブラウザして、DB2 インストール・パスから `Sql1lib%tools%web%db2wa.war` ファイルを選択します。
 - d. 「**デプロイ (Deploy)**」をクリックし、コンテキスト・パスが `/db2wa` であることを確認します。
 - e. アプリケーション・サーバーを選択し、「**Web アプリケーション (Web Applications)**」セクションに DB2 Web ツール・アプリケーションが表示されているか確認します。このページの「**適用 (Apply)**」はクリックしないでください。
 - f. メイン・ページの左側のパネルから「**ホーム (Home)**」リンクを選択します。
 - g. DB2 Web ツール (**DB2WebToolsServer**) を含む、「**ホーム (Home)**」ビューからアプリケーション・サーバーを再始動します。
4. DB2 Web ツールのエンタープライズ・アプリケーションは `http://localhost:web_server_port_numer/db2wa` に置かれ、HTML 4.0 対応の Web ブラウザーでアクセスできます。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルス・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 118 ページの『WebLogic アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 127 ページの『第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ』

第 13 章 DB2 Web ツールのデバッグ

DB2 Web ツールのエンタープライズ・アプリケーションのデプロイメントに関連した問題が生じた場合、そのようなプロセスのデバッグに使用できる方法があります。

手順:

WebSphere

以下の方法で、WebSphere 上の DB2 Web ツールに関するトレースを有効にできます。

1. DB2 Web ツールのインストール・ディレクトリー内にある、デプロイメント記述子ファイル `web.xml` を変更します。

```
¥WebSphere¥AppServer¥installedApps¥DB2_Web_Tools.ear
  ¥db2wa.war¥WEB-INF
```

値を **true** に変更することにより、トレースが有効になり、情報がログ・ファイルに出力されます。アプリケーション・サーバーを再始動しなければなりません。

2. WebSphere **Administrator's Console** を使用するか、「**ツール (Tools)**」の下の **Console** のメニューにある「**アプリケーション・アセンブリー・ツール (Application Assembly Tools)**」を使用して、`SQLLIB¥tools¥web¥db2wa_war.ear` ファイルを変更します。 `trace.on` パラメーター (デフォルトでは `false`。トレースを収集する場合は `true`) を変更できます。「**Web モジュール (Web Modules)**」 → 「**DB2 Web ツール (DB2 Web Tools)**」 → 「**Web コンポーネント (Web Component)**」 → 「**ポータル (Portal)**」 → 「**初期化パラメーター (Initialization Parameters)**」をクリックして、「**初期化パラメーター (Initialization Parameters)**」を見つけます。 `db2wa_war.ear` を保管した後で、エンタープライズ・アプリケーションを再インストールし、再始動しなければなりません。

トレース・ファイルは、インストール・ディレクトリー (`¥WebSphere¥AppServer¥logs`) にあります。インストールの方法によっては、以下の場所にある場合もあります。

1. 新しいアプリケーション・サーバーを設定した場合、トレース情報が含まれているファイルは以下のようになります。
 - `DB2Tools_stdout.txt`。このファイルには、DB2 Web ツールのコードによって生成されたトレース情報のほかに、WebSphere アプリケーション・サーバーによって生成されたトレース情報がすべて含まれています。
 - `DB2Tools_stderr.txt`。このファイルには、WebSphere アプリケーション・サーバーおよび DB2 Web ツールのコードによってランタイム時に生成される、予期しない例外によって生じたスタック・ダンプの情報が含まれている場合があります。

2. デフォルト・アプリケーションを使用してインストールした場合、トレース情報は以下のデフォルト・ログ・ファイルにあります。

- Default_Server_stdout.log
- Default_Server_stderr.log

WebLogic 7.0

DB2 Web ツールの Web アプリケーション・トレースを有効にするには、以下を完了し、「**Web アプリケーションのデプロイメント記述子の編集 (Edit Web Application Deployment Descriptors)**」を使用してデプロイメント記述子ファイルを変更します。

1. 「ドメイン (domain)」 → 「デプロイメント (deployments)」 → 「**Web アプリケーション (Web Applications)**」 をクリックして、WebLogic 管理コンソールのナビゲーション・ツリーから Web アプリケーションを選択します。
2. リンク「**Web アプリケーションのデプロイメント記述子の編集 (Edit Web Application Deployment Descriptors)**」をクリックします。
3. 「**Web アプリケーション記述子 (Web Application Descriptor)**」 → 「サーブレット (Servlets)」 → 「ポータル (Portal)」 → 「パラメーター (Parameters)」 へナビゲートし、**trace.on** を選択して、デフォルト値である **false** から **true** に変更します。

アプリケーション・サーバーおよび DB2 Web ツールで生成された情報はすべて、以下のインストール・パスに収集されます。

```
¥user_projects¥domain¥  
server_name¥server_name.log
```

例えば、D:¥BEA¥user_projects¥domain¥server_name.log のようになります。

JRun 4.0

DB2 Web ツールの Web アプリケーション・トレースを有効にするには、JRun インストール・パスにある、デプロイメント記述子ファイル **web.xml** を変更します。例えば、

```
D:¥JRun¥servers¥WebDB2¥SERVER-INF¥temp¥db2wa.war-560049872  
¥WEB-INF¥web.xml
```

ただし、トレース情報が収集されるのは、**trace.on** 値が **true** の場合です。このログには、アプリケーション・サーバーおよび DB2 Web ツールによって生成されたトレース情報がすべて含まれています。

JRun の場合、トレース情報は logs ディレクトリの下にインストール・パスに置かれています。ファイルの名前は *app_server_name-event.log* です。例えば、D:¥JRun¥logs¥DB2WebToolsServer-event.log などです。

Tomcat 4.0

DB2 Web ツールの Web モジュールに関するトレース情報を有効にするには、ディスクリプター記述子 **web.xml** を、インストール・パスに置かなければなりません。例えば、

```
D:¥jakarta-tomcat-4.0.3¥webapps¥db2wa¥WEB-INF¥web.xml
```

パラメーターは **trace.on** で、デフォルト値は **false** です。ただし、トレース情報が収集されるのは、**trace.on** 値が **true** の場合です。この値を有効にするには、Tomcat を再始動する必要があります。

Tomcat 4.0 では、ログ用のインストール・ディレクトリーにトレース情報を置くことができます。ログ・ファイル名は `localhost_log.time_stamp.txt` です。この *time_stamp* は生成の日付です。例えば、`localhost_log.2002-06-05.txt` などです。このログには、サブレット・コンテナおよび DB2 Web ツールのコードによって生成されたトレース情報がすべて含まれています。

関連概念:

- 111 ページの『DB2 Web コマンド・センター』
- 112 ページの『DB2 Web ヘルス・センター』

関連タスク:

- 113 ページの『WebSphere Application Server 上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 118 ページの『WebLogic アプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』
- 121 ページの『その他のアプリケーション・サーバー上での DB2 Web ツールのデプロイ』

第 5 部 リファレンス

第 14 章 DB2 製品ライセンス・ファイル

DB2 製品ライセンス・ファイル

DB2 製品のライセンス・ファイルの名前は、下記のとおりです。ライセンス・ファイルは、DB2 を使用する前に追加する必要があります。

db2ese.lic

DB2 Enterprise Server Edition

db2ese_dpf.lic

DB2 データベース・パーティション機能 (DPF)。

db2exp.lic

DB2 UDB Express Edition

db2conee.lic

DB2 Connect Enterprise Edition

db2conas.lic

DB2 Connect Application Server Edition

db2conpe.lic

DB2 Connect Personal Edition

db2conue.lic

DB2 Connect Unlimited Edition

db2dln.lic

DB2 Data Links Manager

db2gse.lic

DB2 Spatial Extender

db2gse_geo.lic

DB2 Geodetic Extender

db2iiae.lic

DB2 Information Integrator Advanced Edition

db2iide.lic

DB2 Information Integrator Developer Edition

db2iire.lic

DB2 Information Integrator Replication Edition

db2iise.lic

DB2 Information Integrator Standard Edition

db2iiue.lic

DB2 Information Integrator Advanced Edition Unlimited

db2nse.lic

Net Search Extender

db2pe.lic

DB2 Personal Edition

db2wm.lic

DB2 Warehouse Manager

db2wse.lic

DB2 Workgroup Server Edition

db2wsue.lic

DB2 Workgroup Server Unlimited Edition

関連タスク:

- 134 ページの『db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録』
- 3 ページの『DB2 製品の手動インストール』

db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録

DB2 製品は、nodelock ファイルに入っているライセンス・キー情報を使用します。nodelock ファイルは、DB2 製品のライセンス・ファイル指定して **db2licm** コマンドを実行することにより、作成したり更新したりすることができます。nodelock ファイルの作成や更新は、DB2 製品ライセンス・キーの登録としても参照されます。

DB2 がインストールされているそれぞれのコンピュータで **db2licm** コマンドを実行することによって、DB2 製品ライセンス・キーを登録する必要があります。

手順:

root 権限を使用して DB2 製品のライセンス・キーを登録するには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 該当するコマンドを使用して、DB2 製品のライセンス・キーを登録します。

```
/usr/opt/db2_08_01/adm/db2licm -a filename (AIX の場合)
/opt/IBM/db2/V8.1/adm/db2licm -a filename (他のすべての UNIX オペレーティング・システムの場合)
```

filename は、購入した製品に対応するライセンス・ファイルの絶対パス名とファイル名です。ライセンス・ファイルは、CD-ROM のルートの /db2/license ディレクトリーに含まれています。

例えば、AIX において CD-ROM が /cdrom ディレクトリーにマウントされていて、ライセンス・ファイルの名前が db2dlm.lic の場合、コマンドは下記ようになります。

```
/usr/opt/db2_08_01/adm/db2licm -a /cdrom/db2/license/db2dlm.lic
```

db2licm コマンドを実行した後、DB2 製品ライセンス・キー情報は nodelock ファイルに入れられます。これは次のディレクトリーにあります。

- AIX: /var/ifor
- HP-UX、Linux、または Solaris オペレーティング環境: /var/lum
- Windows: DB2PATH/sql1lib/license

インスタンス所有者として DB2 製品のライセンス・キーを登録するには、

1. インスタンス環境を作成し、インスタンス所有者になります。
2. 該当するコマンドを使用して、DB2 製品のライセンスを登録します。

- UNIX オペレーティング・システムの場合

```
db2instance_path/adm/db2licm -a filename
```

- Windows オペレーティング・システムの場合

```
db2instance_path\adm\db2licm -a filename
```

ここで、*db2instance_path* は DB2 インスタンスされる場所であり、*filename* は、購入した製品に対応するライセンス・ファイルの絶対パス名とファイル名です。ライセンス・ファイルは、CD-ROM のルートの /db2/license ディレクトリーに含まれています。

関連タスク:

- 135 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 ライセンス・キーの登録』
- 136 ページの『db2licm コマンドによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定』
- 137 ページの『ライセンス・センターによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定』

関連資料:

- 133 ページの『DB2 製品ライセンス・ファイル』

ライセンス・センターを使用した DB2 ライセンス・キーの登録

DB2 製品は、*nodelock* ファイルに入っているライセンス・キー情報を使用します。*nodelock* ファイルは、DB2 製品のライセンス・ファイルを指定してライセンス・センターを使用して、作成したり更新したりすることができます。*nodelock* ファイルの作成や更新は、DB2 製品ライセンス・キーの登録としても参照されます。

DB2 がインストールされているコンピューターごとに、DB2 製品ライセンス・キーを登録する必要があります。

手順:

ライセンス・センターを使用してライセンス・キーを登録するには、

1. DB2 コントロール・センターを起動し、「**ツール (Tools)**」メニューから「**ライセンス・センター (License Center)**」を選択します。
2. ライセンスをインストールするシステムを選択します。「**インストール済み製品 (Installed Products)**」フィールドに、インストール済み製品の名前が表示されます。
3. 「**ライセンス (License)**」メニューから「**追加 (Add)**」を選択します。
4. 「**ライセンスの追加 (Add License)**」ウィンドウで、「**ファイルから (From a file)**」ラジオ・ボタンを選択し、ライセンス・ファイルを選択します。
 - Windows サーバーの場合: `x:\db2\license\license_filename`
 - UNIX サーバーの場合: `x:/db2/license/license_filename`

x: は、DB2 製品 CD が挿入されている CD-ROM ドライブを表します。また、*license_filename* には、各 DB2 Universal Database 製品に応じた値が入ります。DB2 製品ライセンス・ファイルのリストについては、関連リンクを参照してください。

5. 「適用 (Apply)」をクリックします。ライセンス・キーが追加されます。

ライセンス・センターを使用した後、DB2 製品ライセンス・キー情報は `nodelock` ファイルに入れられます。これは次のディレクトリーにあります。

- AIX: `/var/ifor`
- HP-UX、Linux、または Solaris オペレーティング環境: `/var/lum`
- Windows: `DB2PATH/sql/lib/license`

関連タスク:

- 134 ページの『`db2licm` コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録』
- 136 ページの『`db2licm` コマンドによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定』
- 137 ページの『ライセンス・センターによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定』

関連資料:

- 133 ページの『DB2 製品ライセンス・ファイル』

db2licm コマンドによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定

ライセンス・ポリシーは、ライセンス・センターではなく `db2licm` コマンドを使用しても追加できます。

`db2licm` コマンドを使用してライセンス・ポリシーを設定するときには、製品 ID を入力する必要があります。製品 ID をリストするには、`db2licm -l` コマンドを使用して製品情報をリストします。製品 ID は製品識別番号フィールドにリストされます。

手順:

`db2licm` コマンドを使用してライセンス・ポリシーを設定するには、購入したライセンスの種類に応じて、以下のうちのいずれかを実行します

- Connector ライセンスを購入した場合は、下記のコマンドを入力します (この例は DB2 Information Integrator Replication Edition の場合)。

```
db2licm -c db2ii concurrent
db2licm -u db2ii N
```

ここで、*N* は、購入したコネクタ・ライセンスの数です。

- 並行ユーザー・ライセンスを購入した場合は、下記のコマンドを入力します (この例は DB2 UDB Workgroup Server Edition の場合)。

```
db2licm -p db2wse concurrent
db2licm -u db2wse N
```

N は、購入した並行ユーザー・ライセンスの数です。

- 登録済みユーザー・ライセンスを購入した場合は、下記のコマンドを入力します (この例は DB2 UDB Enterprise Server Edition の場合)。

```
db2licm -p db2ese registered
```

- 並行ユーザー・ライセンスと登録済みユーザー・ライセンスの両方 を購入した場合は、下記のコマンドを入力します (この例は DB2 UDB Workgroup Server Edition の場合)。

```
db2licm -p db2wse concurrent registered
db2licm -u db2wse N
```

N は、購入した並行ユーザー・ライセンスの数です。

db2licm コマンドを使用して、購入したプロセッサ・ライセンスの数を次のように入力します。

```
db2licm -n <product> <number of processors>
```

例えば、Enterprise Server Edition ライセンスを 5 プロセッサに設定するには、次のように入力します。

```
db2licm -n db2ese 5
```

関連タスク:

- 134 ページの『db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録』
- 135 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 ライセンス・キーの登録』
- 137 ページの『ライセンス・センターによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2licm - ライセンス管理ツール・コマンド』

ライセンス・センターによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定

ライセンス・ポリシーは、ライセンス・センターを使用して設定できます。

手順:

ライセンス・ポリシーを設定するには、購入したライセンスの種類に応じて、以下を実行します。

1. ライセンス・センターの「**ライセンス (License)**」メニューから「**変更 (Change)**」を選択します。
2. 「**ライセンスの変更 (Change License)**」ウィンドウで、購入したライセンスの種類を選択します。
 - Connector ライセンスを購入した場合は、「**コネクタ (Connector)**」を選択してから、購入したユーザー・ライセンスの数を入力します。
 - 並行ユーザー・ライセンスを購入した場合は、「**並行ユーザー (Concurrent users)**」または「**並行接続ユーザー (Concurrent connect users)**」を選択してから、購入したユーザー・ライセンスの数を入力します。
 - 登録済みユーザー・ライセンスを購入した場合は、「**登録済みユーザー (Registered users)**」または「**登録済み接続ユーザー (Registered connect users)**」を選択してから、「**OK**」をクリックして「ライセンスの変更 (Change License)」ウィンドウをクローズし、ライセンス・センターに戻りま

す。「**ユーザー (Users)**」タブをクリックし、購入したライセンスの対象のすべての登録済みユーザー ID を追加します。

プロセッサ・ベースのライセンスもあります。購入したプロセッサ・ライセンスの数を変更することも必要です。

1. ライセンス・センターの「**ライセンス (License)**」メニューから「**変更 (Change)**」を選択します。
2. 「**ライセンスの変更 (Change License)**」ウィンドウで、お持ちのプロセッサ・ライセンスの数を入力します。

関連タスク:

- 134 ページの『db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録』
- 135 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 ライセンス・キーの登録』
- 136 ページの『db2licm コマンドによる DB2 ライセンス・ポリシーの設定』

第 15 章 MultiFixPak によるインストール

installAltFixPak による複数レベルの DB2 のインストール (UNIX)

UNIX ベースのオペレーティング・システムで稼働している DB2 Universal Database バージョン 8 Enterprise Server Edition (ESE) では、複数の DB2 レベルの共存をサポートするようになりました。例えば、DB2 の別のフィックスパックまたは修正レベルを、現行の DB2 レベルから代替パスにインストールすることができるので、DB2 ESE のバージョン 8 リリース・レベルのコードと、DB2 ESE のフィックスパック 1 または DB2 バージョン 8.1.2 レベルのコードを同時にインストールすることができます。

正規フィックスパックまたは修正レベルは、既存のシステムに `/usr/opt/db2_08_01` または `/opt/IBM/db2/V8.1` のいずれかに直接上書きインストールされます。ただし、複数の DB2 レベルをインストールするために、フィックスパックまたは修正レベルが、バージョン 8 レベルのコードが既にインストールされている場所とは異なる場所にインストールされます。インストール・パスは、以下のとおりです。

- `/usr/opt/db2_08_FPn` (AIX の場合)
 - `/opt/IBM/db2/V8.FPn` (他のすべての UNIX オペレーティング・システムの場合)
- ここで、n はフィックスパックまたは修正レベルを表します。

前提条件:

インストールを開始する前に、下記のことを確認してください。

- root 権限を持っている。
- 代替パスにインストールされるフィックスパックまたは修正レベルのコピーを持っている。DB2 フィックスパックまたは修正レベルは、IBM の匿名 FTP サーバー ([ftp.software.ibm.com](ftp://ftp.software.ibm.com)) からダウンロードできます。
`ps/products/db2/fixes/%L/%P/` に移動してください。ここで、%L は適切なロケール (例えば `english-us`、`spanish`、`german`)、%P は製品の名前とバージョンです。

制約事項:

複数の DB2 レベルをインストールする場合、以下の制約事項が適用されます。

- UNIX ベースのオペレーティング・システム用の DB2 Enterprise Server Edition でのみ使用可能です。
- 代替パスにインストールされるフィックスパックまたは修正レベルに、正規のフィックスパックまたは修正レベルを上書きインストールすることはできません。
- ご使用の実稼働環境の代替パスにインストールされているフィックスパックまたは修正レベルの使用を考慮する場合、代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルより上位の完全フィックスパックまたは修正レベルをサポートする計画は、現在存在しないことに注意してください。これは、代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルに対して実行しているインスタンスがあり、それに修正を加えたいと思う場合、以下のことを実行する必要があるということを意味します。

1. 必要なフィックスパックまたは修正レベルをバージョン 8.1 インストール・パスに適用する。
 2. バージョン 8.1 インストール・パスから **db2iupdt** を実行することによってインスタンスを更新し、インスタンス環境を代替パスからバージョン 8.1 インストール・パスに移動する。
- 現在のところ、代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルの応答ファイルのインストールはサポートされていません。
 - 代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルは常に、事前に決められたパスにインストールされます (ただし、代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルのそれぞれに一意)。これは、インストールのために別のパスを選択できないことを意味しています。
 - DB2 のコピーなしで代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルをインストールする場合、バージョン 8 リリース・レベルのメディアからライセンス・キーを取得する必要があります。その後、**db2licm** コマンドを使ってライセンスをインストールできます。
 - 代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルに対して実行している DAS を持っている場合や、**DB2DIR/instance** ディレクトリー内のバージョン 8.1 コードに対して実行するようにこの DAS を修正する場合、以下のことを実行する必要があります。
 1. **DASuser** としてログインする。ここで、**DASuser** は、DB2 ユーザーおよびグループの作成時に作成された DAS ユーザーの名前です。
 2. **db2admin stop** を実行する。処理する前に必ずこのコマンドを発行するようにしてください。そうでないと、DAS は不整合状態になります。
 3. root 権限を持つユーザーとして、**DB2DIR/instance** に進む。ここで、**DB2DIR** は、AIX では **/usr/opt/db2_08_01**、他のすべての UNIX ベースのプラットフォームでは **/opt/IBM/db2/V8.1** を表します。
 4. **./dasupdt -D** コマンドを実行する。

手順:

フィックスパックまたは修正レベルを、代替パスにインストールするには、次のことを実行します。

1. フィックスパックまたは修正レベル・イメージのルート・ディレクトリーにある **installAltFixPak** ユーティリティを実行します。
2. インストール・プログラムによって、DB2 バージョン 8 がインストール済みかどうかチェックされます。既存の DB2 バージョン 8 インストールが検出された場合、同じファイル・セットとパッケージをフィックスパックまたは修正レベルからインストールするかどうか尋ねられます。
 - 応答として「はい (yes)」を選択すると、すでにインストールされているものと同じファイル・セットとパッケージがインストール・プログラムによってインストールされます。
 - 応答として「いいえ (no)」を選択した場合、または DB2 バージョン 8 が **/usr/opt/db2_08_01** と **/opt/IBM/db2/V8.1** のどちらにも検出されなかった場合には、**db2_install** が開始されます。

注: 代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルにはライセンスが付属していません。バージョン 8 リリース・レベルのメディアからライセンスをインストールする必要があります。

複数の DB2 レベルのダウンロードおよびインストールの詳細については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winoss2unix/support> の IBM サポートを参照してください。

ローカル・コンピューターか、ネットワーク上の別のコンピューターにある DB2 資料に DB2 製品からアクセスできるようにする場合は、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database と DB2 関連製品の資料が収録されています。

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 141 ページの『複数の DB2 レベルのインストール』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 FixPak の削除』
- 153 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

複数の DB2 レベルのインストール

DB2[®] Universal Database のフィックスパックまたは修正レベルは、更新コード、修正コード、および新機能を既存の DB2 インストール・システムに提供します。バージョン 8 より前のどのバージョンの DB2 に対しても、フィックスパックまたは修正レベルはインストール済みパッケージまたはファイル・セットの更新としてのみ機能します。これは基本的に、オペレーティング・システム・インストーラーが既存のファイルを、フィックスパックまたは修正レベルで提供される更新ファイルに置き換えることを意味します。

UNIX[®] ベースのオペレーティング・システムで稼働する DB2 Enterprise Server Edition (ESE) バージョン 8 では、DB2 の複数のフィックスパック・レベルの共存をサポートするようになりました。例えば、DB2 ESE のバージョン 8 リリース・レベルのコードと、DB2 ESE のフィックスパック 1 レベルのコードを同時にインストールすることができます。正規フィックスパックまたは修正レベルは、既存のシステムに `/usr/opt/db2_08_01` または `/opt/IBM/db2/V8.1` のいずれかに直接上書きインストールされます。

ただし、DB2 の複数レベルをインストールするために、フィックスパックまたは修正レベルが、バージョン 8 レベルのコードが既にインストールされている場所の代わりにインストールされます。代替パスにインストールされているフィックスパックまたは修正レベルのインストール・パスは次のとおりです。

- `/usr/opt/db2_08_FPn` (AIX[®] の場合)

- /opt/IBM/db2/V8.FPn (他のすべての UNIX オペレーティング・システムの場合)
ここで、n はフィックスパックまたは修正レベルを表します。

注:

1. ご使用の環境には不要と思われる場合には、複数の DB2 レベルをインストールする必要はありません。
2. ご使用の実稼働環境の代替パスにインストールされているフィックスパックまたは修正レベルの使用を考慮する場合、代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルより上位の完全フィックスパックまたは修正レベルをサポートする計画は、現在存在しないことに注意してください。これは、代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルに対して実行しているインスタンスがあり、それに修正を加えたいと思う場合、以下のことを実行する必要があるということを意味します。
 - a. 必要なフィックスパックまたは修正レベルをバージョン 8.1 インストール・パスに適用する。
 - b. バージョン 8.1 インストール・パスから **db2iupdt** を実行することによってインスタンスを更新し、インスタンス環境を代替パスからバージョン 8.1 インストール・パスに移動する。

正規フィックスパックまたは修正レベル

- このフィックスパックまたは修正レベルは、既存のコードに上書きインストールされ、それまでの一連のフィックスパックと同様に動作します。
- このタイプのフィックスパックまたは修正レベルは、フィックスパックまたは修正レベルの通常の動作に満足している場合に使用すべきです。

代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベル

- このフィックスパックまたは修正レベルは、独自のディレクトリー・パスにインストールされるという点を除いて、完全にインストール可能なイメージと類似しています。
- これは、正規フィックスパックまたは修正レベルと同じレベルのコードを持ちます。
- このタイプのフィックスパックまたは修正レベルをインストールするための GUI は提供されておらず、コマンド行からのみインストールできます。
- 代替パスにインストールされたフィックスパックまたは修正レベルは、ライセンス交付を受けた DB2 バージョンではありません。これは DB2 バージョン 8 が (ライセンスの有無に関係なく) インストールされていなくても、単独でインストールできます。DB2 のコピーなしで代替パスにインストールされるフィックスパックまたは修正レベルをインストールする場合、バージョン 8 リリース・レベルのメディアからライセンス・キーを取得する必要があります。その後、**db2licm** コマンドを使ってライセンスをインストールできます。

DB2 の複数のレベルをインストールすることには、以下のような利点があります。

- 実動システムでは、完全にテストされていないフィックスパックまたは修正レベルに切り替えることなく、特定レベルのコードをオフにすることができます。

- 複数の UNIX ワークステーションがなくても、(同じバージョンの) DB2 の複数のレベルをサポートできます。
- 部門ごとにそれぞれのフィックスを持つことができ、実動に移す前にフィックスパックまたは修正レベルをテストできます。
- DB2 インスタンス・ユーティリティーがこの機能に組み込まれています。

複数の DB2 レベルのダウンロードおよびインストールの詳細については、IBM® サポート・サイト <http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support> を参照してください。

関連タスク:

- 139 ページの『installAltFixPak による複数レベルの DB2 のインストール (UNIX)』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 FixPak の削除』

第 6 部 付録

付録 A. DB2 Universal Database の技術情報の概要

DB2 資料とヘルプ

DB2 テクニカル情報は、以下のツールおよび方法により入手できます。

- DB2 インフォメーション・センター
 - トピック
 - DB2 ツールのヘルプ
 - サンプル・プログラム
 - チュートリアル
- ダウンロード可能な PDF ファイル、CD 上の PDF ファイル、および印刷されたブック
 - ガイド
 - リファレンス・マニュアル
- コマンド行ヘルプ
 - コマンド・ヘルプ
 - メッセージ・ヘルプ
 - SQL 状態ヘルプ
- インストール済みのソース・コード
 - サンプル・プログラム

オンラインの ibm.com にある TechNotes、白書、Redbooks などの追加の DB2 Universal Database テクニカル情報を利用することもできます。

www.ibm.com/software/data/db2/udb/support.html にある DB2 Information Management Library サイトにアクセスしてください。

DB2 ドキュメンテーションの更新

IBM は定期的に、利用可能な DB2 インフォメーション・センターに対して、文書 FixPaks やその他の文書更新を行います。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> にある DB2 インフォメーション・センターにアクセスすれば、常に最新の情報を確認することができます。DB2 インフォメーション・センターをローカルにインストールした場合は、最新情報を表示するために手動で更新情報をインストールする必要があります。文書更新により、新しい情報が入手できるようになったときに、DB2 インフォメーション・センター CD からインストールした情報を更新することができます。

インフォメーション・センターは PDF やその他のハードコピー・ブックよりも頻繁に更新されます。最新の DB2 テクニカル情報を入手するには、利用可能になったら文書更新をインストールするか、www.ibm.com サイトにある DB2 インフォメーション・センターにアクセスしてください。

関連概念:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI サンプル・プログラム』
- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Java サンプル・プログラム』
- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 169 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 159 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 171 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 161 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 インフォメーション・センター

DB2[®] インフォメーション・センターを使用すると、DB2 Universal Database[™]、DB2 Connect[™]、DB2 Information Integrator および DB2 Query Patroller[™] などの DB2 ファミリー製品を最大限に活用するのに必要なすべての情報にアクセスできます。また、DB2 インフォメーション・センターは、DB2 の主な機能とコンポーネントに関する情報を提供します (レプリケーション、データウェアハウジング、および DB2 の種々の Extender など)。

Mozilla 1.0 以上または Microsoft[®] Internet Explorer 5.5 以上で表示する場合、DB2 インフォメーション・センターには以下の機能があります。以下のいくつかの機能では、JavaScript[™] のサポートを使用可能にする必要があります:

柔軟なインストール・オプション

以下の中から、ご使用の環境に最も適したオプションを使って DB2 資料を表示できます。

- 最新の資料を常に自動的に利用できるようにするには、IBM[®] の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターからすべての資料に直接アクセスします。
- 更新処理を最小化し、イントラネット内のネットワーク・トラフィックだけに制限するには、イントラネット上の 1 つのサーバーに DB2 資料をインストールします。
- 柔軟性を改善し、ネットワーク接続への依存を軽減するには、個々のコンピューターに DB2 資料をインストールします。

検索 「検索」テキスト・フィールドに検索語を入力することにより、DB2 インフォメーション・センターのすべてのトピックを検索できます。複数の語句を引用符で囲めば、完全一致を検索できます。また、ワイルドカード演算子 (*、?) とブール演算子 (AND、NOT、OR) を使用して検索を絞り込むことができます。

タスク指向の目次

単一の目次の中から、DB2 資料のトピックを見付けることができます。目次は、主に実行するタスクの種類に従って編成されていますが、そのほかに製品概要、特定のゴール (目的) の情報、参照情報、索引、および用語集も含まれます。

- 製品概要では、DB2 ファミリーで使用可能な製品間の関係、そうした各製品で提供される機能、および各製品の最新リリース情報について説明されています。
- インストール、管理および開発などのゴール・カテゴリには、タスクを迅速に完了し、そのための背景情報をよく理解できるようにするトピックが含まれています。
- 「参照」トピックでは、その対象に関する詳細な情報 (ステートメントとコマンドの構文、メッセージ・ヘルプ、構成パラメーターなど) が説明されています。

現在のトピックを目次に表示する

現在のトピックが目次のどの部分に該当するかを表示するには、目次フレーム内の「リフレッシュ/現在のトピックの表示 (Refresh/Show Current Topic)」ボタンをクリックするか、コンテンツ・フレーム内の「目次に表示 (Show in Table of Contents)」ボタンをクリックします。幾つかのファイルで関連トピックへの複数のリンクをたどった場合、または検索結果からトピックにアクセスした場合には、この機能が役立ちます。

索引 索引から、すべての資料にアクセスすることができます。索引では、用語が 50 音順に編成されています。

用語集 用語集を見れば、DB2 資料で使われているさまざまな用語の定義を調べることができます。用語集では、用語が 50 音順に編成されています。

組み込まれているローカライズ情報

DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで設定された言語でトピックを表示します。設定された言語のトピックが利用できない場合、DB2 インフォメーション・センターにはそのトピックの英語版が表示されます。

iSeries™ 技術情報については、IBM eServer™ iSeries Information Center (www.ibm.com/eserver/iseries/infocenter/) を参照してください。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 159 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおいて、希望する言語でトピックを表示する』
- 158 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 153 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

- 155 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ

それぞれ異なる環境で作業している人々は、各自の環境に合った方法で DB2 製品資料にアクセスする必要があります。そのため、DB2 製品資料は 3 つの方法で利用できるようになっています。すなわち、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、およびご使用のコンピューターにインストールしたバージョンを利用する方法です。これら 3 つのどのケースでも、資料は DB2 インフォメーション・センターに含まれています。これは、ブラウザで表示するトピック・ベース情報の設計されたウェブです。デフォルトで、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。しかし、イントラネット・サーバーから、あるいはご使用のコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを利用したい場合は、製品メディア・パックに含まれている DB2 インフォメーション・センター CD を使って DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターのどのアクセス方式がご使用の作業環境に最も適しているか、また考慮する必要のあるインストール上の事項には何があるかを判断するには、以下の 3 つのシナリオが役立ちます。

シナリオ: IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

コリンは研修の会社を経営する情報技術コンサルタントです。彼はデータベース・テクノロジーおよび SQL を専門としており、それらの主題に関するセミナーを、DB2 Universal Database Express Edition を使用して北米全域で実施しています。コリンのセミナーの一部には、教材として DB2 資料を使用することが含まれています。例えば、SQL についての課程を扱いながら、コリンはデータベース照会の基本および上級構文を教える手段として SQL に関する DB2 資料を使用します。

コリンが教えるビジネスマンのほとんどはインターネット・アクセスを利用します。このような事情を考慮して、DB2 Universal Database Express Edition をインストールした際に、コリンは IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスするように自分のモバイル・コンピューターを構成することに決定しました。この構成により、コリンはセミナー中、最新の DB2 資料にオンライン・アクセスすることができます。

しかし、コリンは旅行中、インターネット・アクセスができないこともあります。このことは、特にセミナーの準備のために DB2 資料にアクセスする必要があるときに、彼にとって問題となります。このような状況を避けるために、コリンは DB2 インフォメーション・センターのコピーをモバイル・コンピューターにインストールしました。

コリンは、必要なときにいつでも DB2 資料のコピーを持てるという柔軟性に満足しています。 **db2set** コマンドを使用してモバイル・コンピューターのレジストリー変数を簡単に構成し、状況に応じて、IBM Web サイトの DB2 インフォメーション・センターに、あるいは自分のモバイル・コンピューターの DB2 インフォメーション・センターにアクセスすることができます。

シナリオ: イン트라ネット・サーバー上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

エバは生命保険会社の上級データベース管理者として働いています。彼女の管理責任の一部は、会社の UNIX データベース・サーバーに最新版の DB2 Universal Database Enterprise Server Edition をインストールして構成することです。最近、彼女の会社では、セキュリティ上の理由から、職場ではインターネット・アクセスを従業員に提供しないということを彼らに対して通知しました。会社にはネットワーク環境があるので、エバはイントラネット・サーバー上に DB2 インフォメーション・センターのコピーをインストールすることにしました。そうすれば、会社のデータウェアハウスを定期的に使用する全従業員（営業担当員、営業管理者、およびビジネス・アナリスト）は、DB2 資料にアクセスすることができます。

イントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターのインストール中、DB2 セットアップ・ウィザードはエバにプロンプトを出し、それによって、ネットワーク上の他のコンピューターから着信情報を受け取るために DB2 インフォメーション・センターが使用するポートを指定します。このことは、DB2 インフォメーション・センターをインストールしているイントラネット・サーバーのサービス名とポート番号を指定することによって行います。

次にエバは、データベース・チームに指示を与えて、応答ファイルを使用して従業員のコンピューターすべてに最新版の DB2 Universal Database をインストールさせます。そうすれば、イントラネット・サーバーのホスト名とポート番号を使って、DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう各コンピューターを確実に構成することができます。

ところが、エバのチームの初級データベース管理者であるミグアルの誤解によって、イントラネット・サーバー上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう DB2 Universal Database を構成するのではなく、一部の従業員のコンピューターに DB2 インフォメーション・センターのコピーをインストールしてしまいました。この状況を正すためにエバはミグアルに指示を与え、問題のコンピューターそれぞれに対して **db2set** コマンドを使用して、DB2 インフォメーション・センターのレジストリー変数（ホスト名については DB2_DOCHOST、ポート番号については DB2_DOCPORT）を変更させます。これにより、ネットワーク上で該当するすべてのコンピューターが DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、従業員は DB2 に関する質問の答えを DB2 資料で見出せるようになりました。

シナリオ: 自分のコンピューター上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

ツーチェンは、インターネット・アクセスを提供するためのローカル ISP を持たない小さな町で工場を営んでいます。彼は DB2 Universal Database Personal Edition を購入して、在庫、商品注文、銀行口座情報、および必要経費を管理しています。DB2 製品の使用経験がないので、ツーチェンは DB2 製品資料からそれらの管理方法を学ぶ必要があります。

標準インストール・オプションを使用して DB2 Universal Database Personal Edition をコンピューターにインストールした後、ツーチェンは DB2 資料へのアクセスを試みます。しかしブラウザからは、オープンしようとしたページが見つからな

ったというエラー・メッセージが出されます。ツーチェンは「*DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール*」ガイドを参照して、自分のコンピューター上の DB2 資料にアクセスしたい場合は DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があることを知ります。彼は DB2 インフォメーション・センター CD をメディア・バックに見つけてそれをインストールします。

オペレーティング・システムのアプリケーション・ランチャーから、ツーチェンは DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、DB2 製品を使って業務の収益を上げる方法を学べるようになりました。

DB2 資料にアクセスするためのオプションの要約:

次の表は、DB2 インフォメーション・センター内の DB2 製品資料にアクセスする上で、作業環境に最も適した推奨オプションを提供しています。

インターネット・アクセス	イントラネット・アクセス	推奨
可	可	IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、イントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターにアクセスする。
可	不可	IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスする。
不可	可	イントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターにアクセスする。
不可	不可	ローカル・コンピューター上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスする。

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 159 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 153 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 155 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)

DB2 製品資料は、3 つの方法で利用することができます。すなわち、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、およびご使用のコンピューターにインストールしたバージョンを利用する方法です。デフォルトでは、DB2 製品は、IBM Web サイトから DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバー、あるいはご使用のコンピューターから DB2 資料を利用したい場合は、*DB2 インフォメーション・センター CD* から資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストール・プリファレンスを定義し、UNIX オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールすることができます。

前提条件:

ここでは、UNIX コンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールするための、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

• ハードウェア要件

次のいずれかのプロセッサが必要です。

- PowerPC (AIX)
- HP 9000 (HP-UX)
- Intel 32 ビット (Linux)
- Solaris UltraSPARC コンピューター (Solaris オペレーティング環境)

• オペレーティング・システム要件

次のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- IBM AIX 5.1 (PowerPC 上)
- HP-UX 11i (HP 9000 上)
- Redhat Linux 8.0 (Intel 32 ビット上)
- SuSE Linux 8.1 (Intel 32 ビット上)
- Sun Solaris Version 8 (Solaris オペレーティング環境の UltraSPARC コンピューター上)

• ソフトウェア要件

- 次のブラウザーがサポートされています。
 - Mozilla バージョン 1.0 以降

• DB2 セットアップ・ウィザードは、グラフィカル・インストーラーです。ご使用のコンピューターで DB2 セットアップ・ウィザードを実行するには、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示できる X Window System ソフトウェアのインプリメンテーションが必要です。DB2 セットアップ・ウィザードを実行できるようにするため、まずディスプレイを正しくエクスポートしたことを確認してください。例えば、次のコマンドをコマンド・プロンプトに入力します。

```
export DISPLAY=9.26.163.144:0.
```

• 通信要件

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようにします。

1. システムにログオンします。
2. DB2 インフォメーション・センターの製品 CD をシステムに挿入してマウントします。
3. 次のコマンドを入力することによって、CD がマウントされているディレクトリに移動します。

```
cd /cd
```

ここで、*/cd* は、CD のマウント・ポイントを表しています。

4. **./db2setup** コマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。
5. **IBM DB2 セットアップ・ランチパッド**がオープンします。DB2 インフォメーション・センターのインストールに直接進むには、「**製品のインストール (Install Product)**」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「**ヘルプ (Help)**」をクリックします。「**キャンセル (Cancel)**」を押せば、任意のときにインストールを終了できます。
6. 「**インストールしたい製品を選択します**」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。
7. 「**DB2 インフォメーション・センターの DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ**」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードが、プログラム・セットアップ・プロセスを案内します。
8. インストールを進めるためには、ご使用条件を受け入れる必要があります。「**使用条件 (License Agreement)**」ウィンドウで、「**使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」を選択し、「**次へ (Next)**」をクリックします。
9. 「**インストール・アクションの選択**」ウィンドウで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする場所を選択します。後でこのコンピューターまたは他のコンピューターで DB2 インフォメーション・センターをインストールするために応答ファイルを使用したい場合は、「**設定を応答ファイルに保管する**」を選択します。「**次へ (Next)**」をクリックします。
10. 「**インストールする言語の選択**」ウィンドウで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「**次へ (Next)**」をクリックします。
11. 「**DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定**」で、着信通信用に DB2 インフォメーション・センターを構成します。「**次へ**」をクリックしてインストールを続けます。
12. 「**ファイルのコピーの開始**」ウィンドウで、ここまでのインストール選択項目を検討します。いずれかの設定を再検討または変更する場合は、「**戻る (Back)**」をクリックします。「**インストール (Install)**」をクリックして、コンピューターに DB2 インフォメーション・センターのファイルをコピーします。

応答ファイルを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールすることもできます。

db2setup.his、db2setup.log、および db2setup.err の各インストール・ログは、デフォルトで /tmp ディレクトリーに入れられます。ログ・ファイルの位置を指定することもできます。

db2setup.log ファイルは、エラーを含むすべての DB2 製品インストール情報をキャプチャーします。db2setup.his ファイルは、コンピューター上のすべての DB2 製品インストールを記録します。DB2 は db2setup.log ファイルを db2setup.his ファイルに付加します。db2setup.err ファイルは、Java が戻すすべてのエラー出力 (例外やトラップ情報など) をキャプチャーします。

インストールが完了すると、DB2 インフォメーション・センターは、ご使用の UNIX オペレーティング・システムによって、以下のいずれかのディレクトリーにインストールされます。

- AIX: /usr/opt/db2_08_01
- HP-UX: /opt/IBM/db2/V8.1
- Linux: /opt/IBM/db2/V8.1
- Solaris オペレーティング環境: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 71 ページの『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 159 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおいて、希望する言語でトピックを表示する』
- 158 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 155 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)

DB2 製品資料は、3 つの方法で利用することができます。すなわち、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、およびご使用のコンピューターにインストールしたバージョンを利用する方法です。デフォルトでは、DB2 製品は、IBM Web サイトから DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーから、あるいはご使用のコンピューターから DB2 資料を利用したい場合は、DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストール・プリファレンスを定義し、Windows オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールすることができます。

前提条件:

ここでは、Windows 上に DB2 インフォメーション・センターをインストールするための、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

• ハードウェア要件

次のプロセッサが必要です。

- 32 ビット・コンピューター: Pentium、または Pentium 互換の CPU。

• オペレーティング・システム要件

次のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- Windows 2000
- Windows XP

• ソフトウェア要件

- 次のブラウザーがサポートされています。

- Mozilla 1.0 以降
- Internet Explorer バージョン 5.5 または 6.0 (Windows XP の場合はバージョン 6.0)

• 通信要件

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようにします。

1. DB2 インフォメーション・センターのインストール用に定義したアカウントを使ってシステムにログオンします。
2. CD をドライブに挿入します。使用可能であれば、自動実行機能によって DB2 セットアップ・ランチパッドが起動します。
3. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを英語以外の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して手動で開始することができます。

次のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 「開く」フィールドで、次のコマンドを入力します。

```
x:%setup language
```

ここで、*x:* は CD ドライブを表し、*language* はセットアップ・プログラムが実行される言語を表します。

- c. 「OK」をクリックします。
4. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。DB2 インフォメーション・センターのインストールに直接進むには、「製品のインストール (Install Product)」をクリックします。残りのステップについて説明している

オンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックします。「キャンセル (Cancel)」を押せば、任意のときにインストールを終了できます。

5. 「インストールしたい製品を選択します」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
6. 「DB2 インフォメーション・センターの DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードが、プログラム・セットアップ・プロセスを案内します。
7. インストールを進めるためには、ご使用条件を受け入れる必要があります。「使用条件 (License Agreement)」ウィンドウで、「使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)」を選択し、「次へ (Next)」をクリックします。
8. 「インストール・アクションの選択」ウィンドウで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする場所を選択します。後でこのコンピューターまたは他のコンピューターで DB2 インフォメーション・センターをインストールするために応答ファイルを使用したい場合は、「設定を応答ファイルに保管する」を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
9. 「インストールする言語の選択」ウィンドウで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
10. 「DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定」で、着信通信用に DB2 インフォメーション・センターを構成します。「次へ」をクリックしてインストールを続けます。
11. 「ファイルのコピーの開始」ウィンドウで、ここまでのインストール選択項目を検討します。いずれかの設定を再検討または変更する場合は、「戻る (Back)」をクリックします。「インストール (Install)」をクリックして、コンピューターに DB2 インフォメーション・センターのファイルをコピーします。

応答ファイルを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールすることができます。また、**db2rspgn** コマンドを使用して、既存のインストールに基づいた応答ファイルを生成することもできます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、'My Documents'\%DB2LOG% ディレクトリーにある db2.log および db2wi.log ファイルを参照してください。My Documents ディレクトリーのロケーションは、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、最新の DB2 インストール情報をキャプチャーします。db2.log は DB2 製品インストールの履歴をキャプチャーします。

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 64 ページの『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』

- 159 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおいて、希望する言語でトピックを表示する』
- 158 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 153 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

DB2 インフォメーション・センターの呼び出し

DB2 インフォメーション・センターは、Linux、UNIX、および Windows オペレーティング・システム用の DB2 製品 (DB2 Universal Database、 DB2 Connect、DB2 Information Integrator、 DB2 Query Patroller など) を使用するために必要なすべての情報を提供します。

DB2 インフォメーション・センターは、以下の場所から呼び出すことができます。

- DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューター
- DB2 インフォメーション・センターがインストールされているイントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューター
- IBM の Web サイト

前提条件:

DB2 インフォメーション・センターを呼び出すための要件は、以下のとおりです。

- オプション: 希望する言語でトピックを表示するようブラウザーを構成する
- オプション: コンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを使用するよう DB2 クライアントを構成する

手順:

DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを呼び出すには、以下のようになります。

- (Windows オペレーティング・システムの)「スタート」メニューから: 「スタート」→「プログラム」→「IBM DB2」→「情報」→「インフォメーション・センター」をクリックします。
- コマンド行プロンプトから:
 - Linux および UNIX オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs** コマンドを発行します。
 - Windows オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs.exe** コマンドを発行します。

イントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューターにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ `http://<host-name>:<port-number>/` を開きます (<host-name> はホスト名、<port-number> は DB2 インフォメーション・センターを利用可能なポート番号)。

IBM Web サイトにある DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ `publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/` を開きます。

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおいて、希望する言語でトピックを表示する』
- 169 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 159 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 171 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール

`http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/` から利用できる DB2 インフォメーション・センターは、資料の新規追加または変更によって定期的に更新されます。さらに、更新された DB2 インフォメーション・センターをコンピューターまたはイントラネット・サーバーにダウンロードしてインストールできる場合もあります。DB2 インフォメーション・センターを更新しても、DB2 クライアント製品またはサーバー製品は更新されません。

前提条件:

インターネットに接続されたコンピューターへのアクセスが必要です。

手順:

DB2 インフォメーション・センターの更新をコンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストールするには、以下のようにします。

1. IBM の Web サイト (`http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/`) にある DB2 インフォメーション・センターを開きます。
2. 「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」 ページの見出し「サービスおよびサポート」の「ダウンロード」セクションで、「**DB2 資料**」リンクをクリックします。

3. 最新のドキュメンテーション・イメージのレベルと、インストール済みのドキュメンテーション・レベルを比較して、DB2 インフォメーション・センターを更新する必要があるかどうかを確認します。「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」ページに、インストール済みのドキュメンテーションのレベルがリストされます。
4. より新しいバージョンの DB2 インフォメーション・センターが存在する場合、ご使用のオペレーティング・システムに対応する最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをダウンロードします。
5. 最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをインストールするには、Web ページの指示に従ってください。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 158 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 153 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 155 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターにおいて、希望する言語でトピックを表示する

DB2 インフォメーション・センターでは、ブラウザの設定値で指定された言語でトピックを表示するよう試行されます。希望する言語に翻訳されていないトピックがある場合、そのトピックは英語で表示されます。

手順:

Internet Explorer ブラウザーにおいて、希望する言語でトピックを表示するには、

1. Internet Explorer で、「ツール」→「インターネット オプション」→「言語...」ボタンをクリックします。「言語の優先順位」ウィンドウが表示されます。
2. 言語リストの中で、希望する言語が最初の項目として指定されていることを確認してください。
 - 新しい言語をリストに追加するには、「追加...」ボタンをクリックします。

注: 言語を追加する場合、希望する言語でトピックを表示するために必要なフォントがコンピューターに備わっているという保証はありません。

- ある言語をリストの先頭に移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストの先頭になるまで「上へ (Move Up)」ボタンをクリックします。
3. ページを最新表示して、希望する言語で DB2 インフォメーション・センターを表示します。

Mozilla ブラウザーにおいて、希望する言語でトピックを表示するには、

1. Mozilla で、「編集 (Edit)」→「設定 (Preferences)」→「言語 (Languages)」ボタンを選択します。「設定 (Preferences)」ウィンドウに「言語 (Languages)」パネルが表示されます。
2. 言語リストの中で、希望する言語が最初の項目として指定されていることを確認してください。
 - 新しい言語をリストに追加するには、「追加... (Add...)」ボタンをクリックします。
 - ある言語をリストの先頭に移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストの先頭になるまで「上へ (Move Up)」ボタンをクリックします。
3. ページを最新表示して、希望する言語で DB2 インフォメーション・センターを表示します。

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

DB2 PDF 資料および印刷された資料

以下の表は、正式な資料名、資料番号、および PDF ファイル名を示しています。ハードコピー版の資料を注文するには、正式な資料名を知っておく必要があります。PDF ファイルを印刷するには、PDF ファイル名を知っておく必要があります。

DB2 資料は、以下のカテゴリに分類されています。

- DB2 中核情報
- 管理情報
- アプリケーション開発情報
- ビジネス・インテリジェンス情報
- DB2 Connect 情報
- 入門情報
- チュートリアル情報
- オプション・コンポーネント情報
- リリース・ノート

以下の表は、DB2 ライブラリー内の各資料について、その資料のハードコピー版を注文したり、PDF 版を印刷または表示したりするのに必要な情報を示しています。DB2 ライブラリー内の各資料に関する詳細な説明については、www.ibm.com/shop/publications/order にある IBM Publications Center にアクセスしてください。

DB2 の基本情報

こうした資料の情報は、すべての DB2 ユーザーに基本的なもので、プログラマーおよびデータベース管理者にとって役立つ情報であるとともに、DB2 Connect、DB2 Warehouse Manager、または他の DB2 製品を使用するユーザーにとっても役立つ内容です。

表 13. DB2 の基本情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス」	SC88-9140	db2n0j81
「IBM DB2 Universal Database 用語集」	資料番号なし	db2t0j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 1 巻」	GC88-9152 (ハードコピーな し)	db2m1j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 2 巻」	GC88-9153 (ハードコピーな し)	db2m2j81
「IBM DB2 Universal Database 新機能」	SC88-9158	db2q0j81

管理情報

これらの資料の情報は、DB2 データベース、データウェアハウス、およびフェデレーテッド・システムを効果的に設計し、インプリメントし、保守するために必要なトピックを扱っています。

表 14. 管理情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: プランニング」	SC88-9135	db2d1j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: インプリメンテー ション」	SC88-9133	db2d2j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: パフォーマンス」	SC88-9134	db2d3j81
「IBM DB2 Universal Database 管理 API リファレンス」	SC88-9136	db2b0j81
「IBM DB2 Universal Database データ移動ユーティリティー ガイドおよびリファレンス」	SC88-9142	db2dmj81
「IBM DB2 Universal Database データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス」	SC88-9143	db2haj81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター 管理ガイド」	SC88-9165	db2ddj81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 1 巻」	SC88-9155	db2s1j81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 2 巻」	SC88-9156	db2s2j81

表 14. 管理情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database システム・モニター ガイドおよびリファレンス」	SC88-9157	db2f0j81

アプリケーション開発情報

これらの資料の情報は、DB2 Universal Database (DB2 UDB) のアプリケーション開発者またはプログラマーが特に興味を持つ内容です。サポートされるさまざまなプログラミング・インターフェース (組み込み SQL、ODBC、JDBC、SQLJ、CLI など) を使用して DB2 UDB にアクセスするのに必要な資料とともに、サポートされる言語およびコンパイラーについても紹介されています。また、DB2 インフォメーション・センターをご使用の場合には、サンプル・プログラムのソース・コードの HTML バージョンにアクセスすることもできます。

表 15. アプリケーション開発情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」	SC88-9137	db2axj81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9138	db2a1j81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド サーバー・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9139	db2a2j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」	SC88-9159	db211j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 2 巻」	SC88-9160	db212j81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター アプリケーション統合ガイド」	SC88-9166	db2adj81
「IBM DB2 Universal Database XML Extender 管理およびプログラミングのガイド」	SC88-9172	db2sxj81

ビジネス・インテリジェンス情報

これらの資料の情報は、さまざまなコンポーネントを使用して、DB2 Universal Database のデータウェアハウジング機能および分析機能を拡張する方法を説明しています。

表 16. ビジネス・インテリジェンス情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インフォメーション・カタログ・センター 管理ガイド」	SC88-9167	db2dij81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インストール・ガイド」	GC88-9164	db2idj81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition DB2 Warehouse Manager を使用時の ETI ソリューション・コンバージョン・プログラムの管理」	SC88-9894	iwhe1mstx80

DB2 Connect 情報

このカテゴリの情報は、DB2 Connect Enterprise Edition または DB2 Connect Personal Edition を使用して、メインフレーム・サーバーおよびミッドレンジ・サーバー上のデータにアクセスする方法を説明しています。

表 17. DB2 Connect 情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM コネクティビティ 補足」	資料番号なし	db2h1j81
「IBM DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」	GC88-9145	db2c6j81
「IBM DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9146	db2c1j81
「IBM DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」	SC88-9147	db2c0j81

入門情報

このカテゴリの情報は、サーバー、クライアント、および他の DB2 製品をインストールして構成する場合に役立ちます。

表 18. 入門情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database DB2 クライアント機能 概説およびインストール」	GC88-9144 (ハードコピーなし)	db2itj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 サーバー機能 概説およびインストール」	GC88-9148	db2isj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9150	db2ilj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 インストールおよび構成 補足」	GC88-9149 (ハードコピーなし)	db2iyj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」	GC88-9141	db2z6j81

チュートリアル情報

チュートリアル情報は、DB2 機能を紹介し、さまざまなタスクを実行する方法を示します。

表 19. チュートリアル情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介」	資料番号なし	db2tuj81
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド」	資料番号なし	db2taj81
「インフォメーション・カタログ・センター チュートリアル」	資料番号なし	db2aij81
「Video Central for e-business チュートリアル」	資料番号なし	db2twj81
「Visual Explain チュートリアル」	資料番号なし	db2tvj81

オプション・コンポーネント情報

このカテゴリーの情報は、DB2 のオプション・コンポーネントを使用する方法について説明しています。

表 20. オptional・コンポーネント情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Cube Views Guide and Reference」	SC18-7298	db2aax81
「IBM DB2 Query Patroller インストール、管理、使用法のガイド」	GC88-9154	db2dwj81
「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」	SC88-9171	db2sbj81
「IBM DB2 Universal Database Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」	SC88-9169	db2z0x82
「DB2 Net Search Extender 管理およびユーザーズ・ガイド」	SH88-8546	N/A

注: この資料の HTML 版は、HTML ドキュメンテーション CD からインストールされません。

リリース・ノート

リリース・ノートは、ご使用の製品のリリースおよびフィックスパック・レベルに特有の追加情報を紹介します。また、リリース・ノートには、各リリース、アップデート、およびフィックスパックで組み込まれた資料上の更新の要約も含まれています。

表 21. リリース・ノート

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「DB2 リリース・ノート」	「注」を参照。	「注」を参照。
「DB2 インストール情報」	製品 CD-ROM でのみ参照可能。	使用できません。

注: リリース・ノートは以下の形式で入手できます。

- XHTML およびテキスト形式 (製品 CD 内)
- PDF 形式 (PDF ドキュメンテーション CD 内)

さらに、リリース・ノートの中で、『既知の問題と予備手段』および『リリース間の非互換性』に関する部分は DB2 インフォメーション・センターにも表示されます。

UNIX ベースのプラットフォームでテキスト形式でリリース・ノートを確認するには、Release.Notes ファイルを参照してください。このファイルは、DB2DIR/Readme/%L ディレクトリーに収録されています。%L はロケール名を表しています。DB2DIR は以下になります。

- AIX オペレーティング・システムの場合: /usr/opt/db2_08_01
- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 147 ページの『DB2 資料とヘルプ』

関連タスク:

- 167 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』
- 168 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 169 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』

PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法

DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている DB2 資料を印刷することができます。 Adobe Acrobat Reader を使用すれば、資料全体または特定のページを印刷できます。

前提条件:

Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。 Adobe Acrobat Reader をインストールする必要がある場合、 Adobe Web サイト (www.adobe.com) から入手できます。

手順:

PDF ファイルから DB2 資料を印刷するには以下のようにします。

1. *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をドライブに挿入します。 UNIX オペレーティング・システムの場合、 *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をマウントします。 UNIX オペレーティング・システムで CD をマウントする方法については、「概説およびインストール」を参照してください。
2. `index.htm` を開きます。ブラウザ・ウィンドウにファイルが開きます。
3. 参照したい PDF のタイトルをクリックします。 Acrobat Reader で PDF が開きます。
4. 「ファイル」→「印刷」を選択して、所要の資料の任意の部分を印刷します。

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 168 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Solaris)』

関連資料:

- 161 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 の印刷資料の注文方法

ハードコピー版の資料を望む場合には、以下のいずれかの方法で注文できます。

印刷資料の注文方法:

一部の国または地域では、印刷された資料を注文することもできます。お客様がお住まいの国または地域でこのサービスが利用可能かどうかを確認するには、お住まいの国または地域の IBM Publications Web サイトをご覧ください。資料のご注文が可能な場合、以下のようにすることができます。

- 正規の IBM 製品販売業者または営業担当員に連絡してください。お客様がお住まいの地域の IBM 担当員の情報については、お手数ですが IBM の Web サイト (www.ibm.com/planetwide) の IBM Worldwide Directory of Contacts で確認してください。
- IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。なお、IBM Publications Center から資料を注文できない国もあります。

DB2 製品がご利用可能になった時点で、印刷された資料は DB2 PDF ドキュメンテーション CD にある PDF 形式の資料と同じものです。さらに、DB2 インフォメーション・センター CD に収録されている印刷された資料の内容もまた、これらと同じです。ただし、DB2 インフォメーション・センター CD には、PDF 資料にない追加情報も含まれます (たとえば、SQL 管理作業や HTML サンプル)。DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている資料の中には、ハードコピーとしてご注文できない資料もあります。

注: DB2 インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピー の資料よりも頻繁に更新されます。ドキュメンテーションの更新が入手可能になった時点でインストールするか、DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) を参照して最新の情報を入手してください。

関連タスク:

- 167 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』

関連資料:

- 161 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す

コンテキスト・ヘルプは、特定のウィンドウ、ノートブック、ウィザード、またはアドバイザに関連したタスクまたはコントロールの情報を提供します。コンテキスト・ヘルプは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのある DB2 管理ツールおよび開発ツールから利用できます。コンテキスト・ヘルプには、以下の 2 種類があります。

- それぞれのウィンドウまたはノートブックにある「ヘルプ」ボタンからアクセス可能なヘルプ
- infopop (ポップアップ情報ウィンドウ)。これは、マウス・カーソルを特定のフィールドまたはコントロール上に置いたとき、またはウィンドウ、ノートブック、ウィザード、アドバイザ内でフィールドまたはコントロールを選択して F1 を押すと表示されます。

「ヘルプ」ボタンを押すと、概説、前提条件、およびタスク情報が表示されます。infopop は、それぞれのフィールドおよびコントロールについて説明します。

手順:

コンテキスト・ヘルプを呼び出すには、以下のようになります。

- ウィンドウおよびノートブックのヘルプを表示するには、いずれかの DB2 ツールを開始して、任意のウィンドウまたはノートブックを開きます。ウィンドウまたはノートブックの右下隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックして、コンテキスト・ヘルプを呼び出します。

また、それぞれの DB2 ツール・センターの上部にある「ヘルプ」メニュー項目からコンテキスト・ヘルプにアクセスすることもできます。

ウィザードおよびアドバイザでは、最初のページの「タスクの概要」リンクをクリックすると、コンテキスト・ヘルプを表示できます。

- ウィンドウまたはノートブック上の各コントロールの infopop ヘルプを表示するには、コントロールをクリックしてから、**F1** を押します。コントロールの詳細情報を示すポップアップ情報が、黄色いウィンドウに表示されます。

注: フィールドまたはコントロールにマウス・カーソルを置いておくだけで infopops が表示されるようにするには、「ツール設定」ノートブックの「**文書 (Documentation)**」ページの「**infopops の自動表示**」チェック・ボックスを選択します。

infopop に似た別のコンテキスト・ヘルプに、診断ポップアップ情報があります。これにはデータ入力規則が示されます。診断ポップアップ情報は、無効または不十分なデータが入力されたとき、紫色のウィンドウに表示されます。診断ポップアップ情報は、以下に関して表示されます。

- 必須フィールド。
- 日付フィールドのように、正確なフォーマットを必要とするデータのフィールド。

関連タスク:

- 158 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』

- 170 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 171 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 UDB ヘルプの使用法: Common GUI help』

コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す

メッセージ・ヘルプは、メッセージが出された原因と、エラーへの応答として実行すべきアクションを説明します。

手順:

メッセージ・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? XXXnnnnn
```

ここで、*XXXnnnnn* は有効なメッセージ ID を表します。

たとえば、? SQL30081 と入力すると、メッセージ SQL30081 に関するヘルプを表示します。

関連概念:

- 「メッセージ・リファレンス 第 1 巻」の『メッセージの概要』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す

コマンド・ヘルプは、コマンド行プロセッサでのコマンドの構文を説明します。

手順:

コマンド・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? command
```

ここで *command* はキーワードまたはコマンド全体を表します。

たとえば、? catalog と入力すると、すべての CATALOG コマンドに関するヘルプが表示され、? catalog database と入力すると、CATALOG DATABASE コマンドのヘルプだけが表示されます。

関連タスク:

- 169 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 158 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 171 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す

DB2 Universal Database は、SQL ステートメントの結果の原因となったと考えられる条件の SQLSTATE 値を戻します。SQLSTATE ヘルプは、SQL 状態および SQL 状態クラス・コードの意味を説明します。

手順:

SQL 状態ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? sqlstate または ? class code
```

ここで、*sqlstate* は有効な 5 桁の SQL 状態を、*class code* は SQL 状態の最初の 2 桁を表します。

たとえば、? 08003 を指定すると SQL 状態 08003 のヘルプが表示され、? 08 を指定するとクラス・コード 08 のヘルプが表示されます。

関連タスク:

- 158 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 170 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

DB2 チュートリアル

DB2® チュートリアルは、DB2 Universal Database のさまざまな機能について学習するのを支援します。このチュートリアルでは、アプリケーションの開発、SQL 照会のパフォーマンス調整、データウェアハウスの処理、メタデータの管理、および DB2 を使用した Web サービスの開発の各分野で、段階的なレッスンが用意されています。

はじめに:

インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) から、このチュートリアルの XHTML 版を表示できます。

チュートリアルの中で、サンプル・データまたはサンプル・コードを使用する場合があります。個々のタスクの前提条件については、それぞれのチュートリアルを参照してください。

DB2 Universal Database チュートリアル:

以下に示すチュートリアルのタイトルをクリックすると、そのチュートリアルを表示できます。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介 データウェアハウス・センターを使用して簡単なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド
データウェアハウス・センターを使用して高度なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

インフォメーション・カタログ・センター・チュートリアル
インフォメーション・カタログを作成および管理して、インフォメーション・カタログ・センターを使用してメタデータを配置し使用します。

Visual Explain チュートリアル
Visual Explain を使用して、パフォーマンスを向上させるために SQL ステートメントを分析し、最適化し、調整します。

DB2 トラブルシューティング情報

DB2[®] 製品を使用する際に役立つ、トラブルシューティングおよび問題判別に関する広範囲な情報を利用できます。

DB2 ドキュメンテーション

トラブルシューティング情報は、DB2 インフォメーション・センター、および DB2 ライブラリーに含まれる PDF 資料の中でご利用いただけます。DB2 インフォメーション・センターで、(ブラウザー・ウィンドウの左側の) ナビゲーション・ツリーの「サポートおよびトラブルシューティング (Support and troubleshooting)」ブランチを参照すると、DB2 トラブルシューティング・ドキュメンテーションの詳細なリストが見つかります。

DB2 Technical Support の Web サイト

現在問題が発生していて、考えられる原因とソリューションを検索したい場合は、DB2 Technical Support の Web サイトを参照してください。

Technical Support サイトには、最新の DB2 出版物、TechNotes、プログラム診断依頼書 (APAR)、フィックスパック、DB2 内部エラー・コードの最新リスト、その他のリソースが用意されています。この知識ベースを活用して、問題に対する有効なソリューションを探し出すことができます。

DB2 Technical Support の Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) にアクセスしてください。

DB2 Problem Determination Tutorial Series

DB2 製品で作業中に直面するかもしれない問題を素早く識別し、解決する方法に関する情報を見つけるには、DB2 Problem Determination Tutorial Series の Web サイトを参照してください。あるチュートリアルでは、使用可能な DB2 問題判別機能およびツールを紹介し、それらをいつ使用すべきかを判断する助けを与えます。別のチュートリアルは、『データベース・エンジン問題判別 (Database Engine Problem Determination)』、『パフォーマンス問題判別 (Performance Problem Determination)』、『アプリケーション問題判別 (Application Problem Determination)』などの関連トピックを扱っています。

関連概念:

- 148 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 「問題判別の手引き」の『Introduction to Problem Determination - DB2 テクニカル・サポートのチュートリアル』

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある（身体動作が制限されている、視力が弱いなど）ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2®バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、174 ページの『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java™ Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、174 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、174 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX[®] オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: [Common GUI help](#) を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザーに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 174 ページの『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム

- |
- | スクリーン・リーダーを使用してインフォメーション・センターを利用するユーザーのために、シンタックス・ダイアグラムがドット 10 進形式で提供されます。
- |

ドット 10 進形式では、各シンタックス・エレメントは別々の行に書き込まれます。複数のシンタックス・エレメントが常に同時に存在する (または常に同時に不在の) 場合、単一のコンパウンド・シンタックス・エレメントとみなせるので同一行に表示できます。

各行は、ドット 10 進数で開始します。たとえば、3 または 3.1 ないしは 3.1.1 です。こうした数を適切に聞き取るには、スクリーン・リーダーが句読点を読み取るように設定されていることを確認してください。同じドット 10 進数を持つすべてのシンタックス・エレメント (たとえば、3.1 という数値を持つすべてのシンタックス・エレメント) は、相互に排他的な代替エレメントです。3.1 USERID および 3.1 SYSTEMID という行を聞き取る場合、シンタックスには両方ではなく USERID または SYSTEMID のどちらかが含まれることが分かります。

ドット 10 進レベルは、ネストのレベルを表示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメントの後に、一連のドット 10 進数 3.1 のシンタックス・エレメントが続きます。3.1 の番号が付されたシンタックス・エレメントすべては、番号 3 の付されたシンタックス・エレメントに従属します。

シンタックス・エレメントに関する情報を追加するため、ドット 10 進数の次に特定のワードおよびシンボルが使用されます。時折、こうしたワードおよびシンボルはエレメントの最初に表示される場合もあります。簡単に識別するため、ワードやシンボルがシンタックス・エレメントの一部である場合には、円記号 (¥) 文字が先頭に付きます。* シンボルはドット 10 進数の次に使用でき、シンタックス・エレメントが反復することを示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメント *FILE は、3 ¥* FILE という形式になります。3* FILE という形式は、シンタックス・エレメント FILE が反復されることを示します。3* ¥* FILE という形式は、シンタックス・エレメント * FILE が反復されることを示します。

シンタックス・エレメントのストリングを分離するのに使用されるコンマなどの文字は、シンタックス内の分離する項目の直前に表示されます。こうした文字は、それぞれの項目と同一行に表示するか、同じドット 10 進数を持つ関連する項目のある別の行に表示できます。またその行には、シンタックス・エレメントに関する情報を提供する別のシンボルを表示することも可能です。たとえば、複数の LASTRUN および DELETE シンタックス・エレメントを使用している場合には、5.1*、5.1 LASTRUN、および 5.1 DELETE という行は、エレメントをコンマで区切る必要があります。区切り文字が指定されないと、各シンタックス・エレメントを区切るのにブランクが使用されると想定されます。

シンタックス・エレメントの前に % シンボルが付く場合、他の箇所で定義されている参照であることを示します。% シンボルの後のストリングは、リテラルではなくシンタックス・フラグメントの名前です。たとえば、2.1 %OP1 という行は別のシンタックス・フラグメント OP1 を参照すべきことを意味します。

以下のワードおよびシンボルが、ドット 10 進数の次に使用されます。

- ? は、オプションのシンタックス・エレメントであることを表します。? シンボルが後に続くドット 10 進数は、対応するドット 10 進数のシンタックス・エレメント、および任意の従属のシンタックス・エレメントがオプションであることを示します。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが 1 つしかない場合、? シンボルはそのシンタックス・エレメントと同じ行に表示されます (たとえば、5? NOTIFY)。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが複数

ある場合、 ? シンボルだけで行に表示され、その後にオプションのシンタックス・エレメントが続きます。たとえば、「5 ?, 5 NOTIFY、および 5 UPDATE」という行を聞き取る場合、シンタックス・エレメント NOTIFY および UPDATE がオプションである、つまりそのいずれかを選択でき、どちらも選択しないこともできることが分かります。 ? シンボルは、線路型ダイアグラムのバイパス線に相当します。

- ! は、デフォルトのシンタックス・エレメントであることを表します。! シンボルおよびシンタックス・エレメントが後に続くドット 10 進数は、そのシンタックス・エレメントが、同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントすべてのデフォルト・オプションであることを示します。同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントのうち 1 つだけに、! シンボルを指定できません。たとえば、「2? FILE、2.1! (KEEP)、および 2.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、FILE キーワードのデフォルト・オプションは (KEEP) になります。この例では、FILE キーワードを含めてもオプションを指定しない場合には、デフォルト・オプション KEEP が適用されます。デフォルト・オプションは、次に高位のドット 10 進数にも適用されます。この例の場合、FILE キーワードが省略されると、デフォルトの FILE(KEEP) が使用されます。しかし、「2? FILE、2.1、2.1.1! (KEEP)、および 2.1.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、デフォルト・オプション KEEP は次に高位のドット 10 進数 2.1 (関連キーワードを持っていない) にのみ適用され、2? FILE には適用されません。キーワード FILE が省略されると、どれも使用されません。
- * は、0 回以上反復できるシンタックス・エレメントを示します。* シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントが 0 回以上使用できること、つまりオプションであり、なおかつ反復できることを表します。たとえば、5.1* データ域という行を聞き取る場合、1 つまたは複数のデータ域を含めるか、またはデータ域を全く含めないことが可能です。「3*, 3 HOST、および 3 STATE」という行を聞き取る場合、HOST、STATE をどちらか一方または両方同時に含めるか、どちらも含めないことができます。

注:

1. ドット 10 進数の後にアスタリスク (*) が付き、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合には、同じ項目を複数回反復できます。
 2. ドット 10 進数の後にアスタリスクが付き、ドット 10 進数の付いた項目が複数ある場合、リストから複数の項目を使用できますが、各項目を複数回使用することはできません。前述の例では、HOST STATE と書くことはできませんが、HOST HOST とは書けません。
 3. * シンボルは、線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。
- + は、1 回以上含める必要のあるシンタックス・エレメントであることを示します。+ シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントを 1 回以上含める必要があること、つまり少なくとも 1 回は含める必要があり、反復できることを表します。たとえば、「6.1+ データ域」という行を聞き取る場合、データ域を少なくとも 1 回は含めなければなりません。「2+, 2 HOST、および 2 STATE」という行を聞き取る場合には、HOST、STATE、またはその両方を含める必要があります。* シンボルと同様に、+ シンボルは、ドット 10 進

| 数の付いた項目が 1 つしかない場合に限り、その特定の項目のみを反復できま
| す。 * シンボルと同様、 + シンボルは線路型シンタックス・ダイアグラムのル
| ープバック線に相当します。

| **関連概念:**

- | • 173 ページの『アクセス支援』

| **関連タスク:**

- | • 『目次』

| **関連資料:**

- | • 「SQL リファレンス 第 2 巻」の『構文図の見方』

| **DB2 Universal Database 製品の共通基準認証**

| DB2 Universal Database は、 Common Criteria の評価検定レベル 4 (EAL4) で認証
| の評価を受けています。 Common Criteria の詳細については、以下の Common
| Criteria の Web サイトを参照してください。 <http://niap.nist.gov/cc-scheme/>

付録 B. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	iSeries
AISPO	LAN Distance
AIX	MVS
AIXwindows	MVS/ESA
AnyNet	MVS/XA
APPN	Net.Data
AS/400	NetView
BookManager	OS/390
C Set++	OS/400
C/370	PowerPC
CICS	pSeries
Database 2	QBIC
DataHub	QMF
DataJoiner	RACF
DataPropagator	RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2	S/370
DB2 Connect	SP
DB2 Extenders	SQL/400
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Information Integrator	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
	zSeries

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ

機能 173

ドット 10 進数の構文図 174

アプリケーション・サーバー

アンインストール 108

インストール 99

開始

リモート側で 104

ローカルに 102

使用可能にする 101

除去 108

推奨される

デプロイ用の 113

停止

リモート側で 107

ローカルに 106

DB2 Web ツールのアンインストール

DB2 用のアプリケーション・サーバー 108

Web ツール 113

デプロイ 104, 121

WebLogic 118

アンインストール

アプリケーション・サーバー 108

DB2 Web ツール

DB2 用のアプリケーション・サーバーからの 108

印刷

PDF ファイル 167

印刷版ブックの注文 168

インスタンス

作成

db2icrt を使用した 15

インストール

アプリケーション・サーバー 99

インフォメーション・センター 150,

153, 155

応答ファイル 53, 62

エラー・コード 80, 81

タイプ 54

SMS (Microsoft Systems

Management Server) 91

代替フィックスバック 139, 141

インストール (続き)

複数レベルの DB2

代替フィックスバック 139, 141

DB2 製品

手動での 3

SMIT を使用した 6

インフォメーション・センター

インストール 150, 153, 155

インポート

プロファイル 82

エクスポート

プロファイル 82

エラー

応答ファイル・エラー・コード 80,

81

応答ファイル

インストール

タイプ 54

DB2 ファイルを使用可能にする

62

DB2 プロセスの強制終了 83

db2cli.ini の構成 95

SMS を使用した 91

UNIX 69, 71

Windows 61

インストール・エラー・コード 80,

81

キーワード

Windows 32 ビット・オペレーティ

ング・システムの 74

Windows の 78

考慮事項 53

作成

DB2 セットアップ・ウィザード

54

UNIX 70

Windows 63

サンプル 73

生成プログラム

概説 66

セットアップの実行 64

応答ファイルによるインストール

バッチ・ファイル 82

オンライン

ヘルプへのアクセス 169

[カ行]

解決

サーバー・ホスト・アドレス 22

開始

アプリケーション・サーバー

リモート側で 104

ローカルに 102

カタログ

データベース 25

パラメーター値ワークシート 27

名前付きパイプ 33

ホスト・データベース

DB2 Connect 25

NetBIOS ノード 30, 31, 48

TCP/IP ノード 24, 44

キーボード・ショートカット

サポート 173

起動

コマンド・ヘルプ 170

メッセージ・ヘルプ 170

SQL ステートメント・ヘルプ 171

クライアント

サーバー接続 19

クライアントからサーバーへの通信

シナリオ 11

接続の構成

TCP/IP パラメーター値ワークシ

ート 21

接続のテスト、CLP を使用した 34

クライアント・サーバー通信

接続の構成

サーバー・ホスト・アドレスの解決

22

グループ ID

作成 12

検査

接続

NetBIOS 45

更新

DB2 ライセンス・キー 134

HTML 文書 159

構成

クライアントからサーバーへの接続

コマンド行プロセッサ (CLP) 19

クライアント・サーバー接続

TCP/IP ワークシート 21

通信プロトコル

リモート DB2 インスタンスの 37

ローカル DB2 インスタンスの 39

NetBIOS 45

NetBIOS ノード 47

TCP/IP

クライアント 20

コマンド

catalog database 25
catalog netbios 30
catalog npipe 33
catalog tcpip 24
db2licm 136
db2start 34

コマンド行プロセッサ (CLP)

クライアント上の NetBIOS の構成
28
クライアントからサーバーへの接続の
構成 19
データベースのカタログ 25
名前付きパイプの構成 32
ノードのカタログ 24
TCP/IP の構成
クライアント 20

コマンド・センター

Web ツール 111

コマンド・ヘルプ

起動 170

コントロール・センター

DB2 サーバー通信の構成 40

[サ行]

サーバー

クライアント接続 19
ホスト・アドレスの解決 22
リモート・アクセスの構成 93

サービス・ファイル

更新
クライアントでの 23
TCP/IP 通信 44

作成

応答ファイル
DB2 セットアップ・ウィザード
54
SMS サーバー上のパッケージ 88

サンプル

応答ファイル 73

使用可能にする

アプリケーション・サーバー 101

除去

アプリケーション・サーバー 108

資料

表示 158

身体障害

173

接続のテスト

クライアントとサーバーの間 34

セットアップ

手動インストール後の 11

[夕行]

代替フィックスバック

インストール 139, 141

対話式インストール

DB2 プロセスの強制終了 83

チュートリアル

171
トラブルシューティングと問題判別
172

通信

通信のシナリオ、クライアントからサ
ーバーへの 11

NetBIOS 45

通信プロトコル

構成
リモート DB2 インスタンスの 37
ローカル DB2 インスタンスの 39
設定、DB2 インスタンス用の 41

NetBIOS 45

データベース

カタログ 25

データベース・マネージャー構成

更新
NetBIOS の 31, 48
TCP/IP 通信の 43

停止

アプリケーション・サーバー
リモート側で 107
ローカルに 106

ディレクトリー

共用アクセスのセットアップ 62

デバッグ

Web ツール 127

デプロイ

Web ツール
WebSphere 113

ドット 10 進数の構文図

174

トラブルシューティング

オンライン情報 172

チュートリアル 172

[ナ行]

名前付きパイプ

構成
CLP を使用した 32
DB2 インスタンス 49

パラメーター値ワークシート 32

ネットワーク

DB2 インストール・パッケージの配布
89

[ハ行]

バッチ・ファイル

応答ファイルによるインストール 82

パラメーター値ワークシート

データベースのカタログ 27

名前付きパイプ 32

NetBIOS 29

TCP/IP

サーバー接続の構成 21

複数レベルの DB2

代替フィックスバックのインストール
139, 141

プロトコル

NetBIOS 45

プロファイル

インポート 82
エクスポート 82

ヘルプ

コマンド

起動 170

表示 158, 160

メッセージ

起動 170

SQL ステートメント

起動 171

[マ行]

メッセージ・ヘルプ

起動 170

問題判別

オンライン情報 172

チュートリアル 172

[ヤ行]

ユーザー ID

作成 12

ユーティリティー

応答ファイル生成プログラム 66

[ラ行]

ライセンス・センター

インストール
DB2 ライセンス・キー 135
ファイル、DB2 製品 133
DB2 ライセンス・ポリシーの設定
137

リモート・アクセス

サーバー・データベースの構成 93

リンク

ディレクトリーへのリンクの作成
DB2 ファイルの 16

例

リモート・データベースへの接続 34

論理アダプター番号

NetBIOS クライアント接続 29

A

AIX

- インストール
DB2 製品 6

D

DB2

- インストール
手動での 14
ライセンス・ファイル 133

DB2 Administration Server (DAS)

- 作成 14

DB2 インスタンス

- 構成
名前付きパイプ 49
TCP/IP 通信 42
通信プロトコルの設定 41

DB2 インストール・パッケージ

- 配布
ネットワークを経由した 89

DB2 インストール・ファイル

- SMS へのインポート 88

DB2 インフォメーション・センター 148

- 起動 158

DB2 クライアント

- カタログ
名前付きパイプ・ノード 33
NetBIOS ノード 30
TCP/IP ノード 24
サービス・ファイルの更新 23

DB2 コントロール・サーバー

- 応答ファイル・キーワード
Windows の 78

DB2 サーバー

- 作成
グループ ID 12
ユーザー ID 12
手動インストール後の設定 11
NetBIOS の構成 46

DB2 サーバー通信

- 構成
コントロール・センターを使用した 40

DB2 製品

- インストール
db2_install スクリプトの使用 4
rpm を使用した 7
SMS を使用した 87
Solaris オペレーティング環境 10
swinstall を使用した 8
手動でのインストール 3

DB2 セットアップ・ウィザード

- 応答ファイルの作成 54

DB2 チュートリアル 171

DB2 の資料

- PDF ファイルの印刷 167

DB2 ファイル

- リンクの作成 16

DB2 ブックの注文 168

DB2 プロセス

- 強制終了
応答ファイル・インストールでの 83
対話式インストール時の 83

DB2 ライセンス・キー

- インストール
ライセンス・センターの使用 135
更新 134

DB2 ライセンス・ポリシー

- 設定
ライセンス・センターの使用 137
db2licm コマンドを使用した 136

db2cli.ini ファイル

- 応答ファイル・インストールの構成 95

db2icrt コマンド

- インスタンスの作成 15

db2licm コマンド

- DB2 ライセンス・ポリシーの設定 136

db2_install スクリプト 4

F

fenced ユーザー

- 定義 12

H

HP-UX

- インストール
DB2 製品 8

HTML 文書

- 更新 159

L

Linux

- インストール
DB2 製品 7

N

NetBIOS

- 更新
データベース・マネージャー構成フ
ァイル 31
構成
クライアント 29

NetBIOS (続き)

構成 (続き)

- CLP を使用した 28
DB2 サーバー上での通信 46
サーバー上 45
ノード
構成 47
パラメーター値ワークシート 29
論理アダプター番号の判別 29

P

- pkgadd コマンド、Solaris オペレーティ
ング環境での DB2 製品のインストール
10

R

- rpm コマンド、Linux での DB2 製品のイ
ンストール 7

S

- SMIT コマンド、AIX での DB2 製品の
インストール 6

SMS (Systems Management Server)

- DB2 インストール・ファイルのインポ
ート 88
DB2 製品のインストール 87
SMS サーバー上でのパッケージの作
成 88

Solaris オペレーティング環境

- インストール
DB2 製品、pkgadd を使用した 10

SQL ステートメント・ヘルプ

- 起動 171

- swinstall コマンド、HP-UX での DB2 製
品のインストール 8

T

TCP/IP

- 更新
データベース・マネージャー構成フ
ァイル 43
構成
クライアント 20, 23
DB2 インスタンス 42
通信
サービス・ファイルの更新 44

U

UNIX

- 応答ファイルによるインストール 69,
71
- 応答ファイルの作成 70

W

Web ツール

- アプリケーション・サーバー
 - 推奨される 113
- インストール 99
- 開始 102
- コマンド・センター 111
- 推奨されるアプリケーション・サーバ
ー 113
- デバッグ 127
- デプロイ
 - アプリケーション・サーバー 104,
121
 - WebLogic 118
- Web ヘルス・センター 112

WebSphere

- デプロイ 113

Web ヘルス・センター

- Web ツール 112

Windows

応答ファイル

- インストール 61
- キーワード 74
- SMS 91
- 共用アクセス・ディレクトリーのセッ
トアップ 62
- クライアント・ワークステーションか
らのセットアップの実行 64
- 作成
 - 応答ファイル 63

IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



Printed in Japan

GC88-9149-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12